

米国ブレクトラム30年史

岩国フレクトラム30年史





旧校舎・横山



岩国市中央公民館



新校舎・向山



PLECTRUM ENSEMBLE

S. 33 ~ S. 42



IWAKUNI HIGH SCHOOL

PLECTRUM ENSEMBLE

S. 43 ~ 現在



IWAKUNI PLECTRUM SO

S. 45 ~ S. 47



IWAKUNI CITIZEN MANDOLIN CLUB

S. 48 ~ 現在

卷頭辞



岩国市民マンドリン・クラブ

会長 三浦 孔司

編集委員会から、巻頭辞を書くようにという身に余るご推薦を頂きましたので、本誌の一頁を汚さぬよう心掛けましょう。

既にご高承のように、岩高プレアンは昭和24年12月24日に創立され、定演は今秋30回を迎えたし、岩国市民MC（創立当初は岩高プレティと呼称）は昭33年4月1日に創立されて定演は今夏20回を迎えた。その間にステージに上ったメンバーは実に940名を数え、その一人一人が深い感銘を今でも持ち続けているようです。

長い歴史と特異な伝統をもち、他に異彩を放つ岩高PEと岩国市民MCの活動は、校内・社会に於て多数の純粹なアマチュアイズムによって今日の隆盛をみているわけで、決して1人や2人の或いは数人で成し遂げられたわけではありませんし、産みの苦しみと育ての厳しさで手塩にかけて天寿を全うされた恩師故熊谷幹雄先生の教育の賜ものだと信じています。

戦後30年、岩国のプレクトラム音楽活動は先の940名の人々によって次々に伝え続けられた訳ですが、30年間を物語るものと言えば、夫々の定演のプログラムと人々の記憶でしかありません。今年迎えた30回定演、20回定演、熊谷先生の10周年を機に、分散している資料を集め、心に残る事柄を記し、岩国の30年間のプレクトラム活動を鮮明に記録し、熊谷先生を顕彰しようという熱烈なる気運から「岩国プレクトラム30年史」が編纂された所以あります。

この記念誌の外に、51年3月大成功を納めた京都特別演奏会を初め、52年3月交歓会、52年8月第20回定演、52年9月第30回定演を併せて記念事業の一環として企画実施され、いよいよ52年12月岩高PE創立記念日に記念誌は発刊される運びとなりました。

15年前にも記念誌を発刊し岩高PE初期の生立ちをまとめておりますが、今回はその後の歴史とICMCの歴史を加え、さらに昭和初期にまで溯っておりますので、実は岩国プレクトラム50年史の内容となりました。

一地方に於けるこうした文化活動が、一時期で終ることなく、一つの組織として休むことなく続くことは、一般的の常識を破るものであり、現在の社会では極めて貴重な存在になっていると思います。今後も益々活躍が期待されるところであり、既に20年・30年後には映画にでもしたいという夢も画かれているようです。

多忙な毎日の中で、慣れない筆をとり、薄く消えかけた記憶をたどりながら書いた夫々の文章が、白髪になった時の自分達をきっと勇気づけ、青春の熱い血を呼び起こすことでしょう。

目 次

各界メッセージ	1
定期演奏会プログラム及び写真	30
(イ) 岩国高校プレクトラム・アンサンブル (I H S · P E)	30
(ロ) 岩国市民マンドリン・クラブ (I C M C)	60
一般寄稿	82
故熊谷幹雄先生を偲ぶ	141
年譜	144
住所録	148
(イ) 岩国高校プレタトラム・アンサンブル卒業生	148
(ロ) 岩国市民マンドリン・クラブ部員	172
(ハ) 岩国高校プレクトラム・アンサンブル在校生	174
資料	178
(イ) 岩国市民マンドリン・クラブ会則	178
(ロ) 岩国市民マンドリン・クラブ歴代役員	178
(ハ) 岩国市民マンドリン・クラブ現役部員	179
(二) 記念事業組織	180



なつかしい人々とあの頃

元校長 石 神 正
〒 753 山口市野田 21

横山時代の岩国高校は、城山と錦川とにはさまれた景勝の地にあった。その校庭を私たちは、横山グランドと呼びなれていたが、緑が深く、一面に静けさが漂っていた。若葉の朝そぞろ歩けば、身も心も緑に染まる思いであった。

川に落鮎の影が走り、山に松茸が香りを放つ頃、町の名物となっていた岩高の運動会が催されて、人々は秋の深まりゆくのを覚えるのであった。プレクトラム部員の演奏する行進曲が拡声器から流れ出ると、一発の花火の轟音と共に全校生徒の入場行進が始まる。これはすべて純情の人熊谷幹雄教諭の演出によるものであった。やがて静かに静かに幹雄さんの言葉が流れて来る。高校生活を讃美し、友情を説く、三年生にとっては、これが最後の行進であることを叙する頃は、幹雄さんの声がかすかにうるんでくる。恐らくは込み上げてくる熱いものを懸命に押えていたことであろう。青春のみがもつ甘い哀愁のなかを、行進はいつまでもつづく。幹雄さんの叙情詩もいつまでもつづく…………。

ちょっぴりセンチメンタルであり、限りなく生徒を愛し、音楽を愛した幹雄さんは、ほんとうに愛すべき先生だった。手造りで楽器を造っている何人かの名人気質の人と親交があつたらしく、終戦直後の物のない時代にも、すばらしい楽器を見つけて来たが、その熱心さにはだされて、私はずい分高い買い物をさせられた。遠いなつかしい想い出である。

毎年クリスマスにはクラブの記念パーティを、秋には演奏会を催していたが、必ず母堂を案内して来て、その足もとに炬燵を置き、膝に毛布をかけてあげている幹雄先生の孝心は私たちの心をうつものがあった。そして安心したように舞台にあがって夢みるような眼差でタクトを振っていた…………。

プレクトラム・アンサンブルのO Bの諸君が、プレクトラム・ソサエティをおつくりになったそうですが、集まりの度に必ず幹雄先生の追憶談が出ることでしょう。私も皆さんと一緒におしゃべりをしているつもりになってこれを書きました。

亡き幹雄君を偲び、かつ、諸君の発展と多幸をお祈りしております。



想 い 出

元校長 山 本 重 治
〒 753 山口市古熊 1-6-1

岩高プレクトラムが、今秋第30回の記念演奏会を迎えることになりましたそうで、心からおめでたく祝意を表したいと思います。

岩高のプレクトラムを語るときには、今は亡き熊谷幹雄先生の温顔を、想い浮べずにはおられません。時の経つのは早いもので、先生が冥土へ旅立たれてから、早くも十回忌を迎えられますとのこと、ご在世当時の温顔が懐しく思い出されます。

私が岩高へ赴任しましたが、昭和31年10月でしたので、プレクトラムの演奏会も10回を数えたころであったかと思います。

当時の部室は、横山校舎（旧岩中）の古い講堂裏の、樟（くすのき）の大木で隔てられた、これまた一段と古い旧寄宿舎の2階の一室にありました。

放課後、ときどき部室をまわってあるきましたが、プレクトラムの部室の前にくると、指揮棒をもつ熊谷先生の、前かがみになったきびしい姿と、部員たちの懸命な練習風景が目に浮んでくるようです。部室の下には、弓道部の仮設の的場がありましたが、弓道部員たちの練習をみていくと、上方からプレクトラムの美しい調べが、響いてくるのが例でした。

私が就任した当初に、プレクトラムという舌をかみそうな名前の由来がわからず、熊谷先生におたずねしますと、これは弦を鳴らす爪のこと、しかもラテン語からとったものだとのお話しがあり、大変ゆかしく感じたことでした。

それがきっかけになって、マンドリンのことに話がはずみ、私も旧制高校時代にマンドリンを購入したが、とうとうものにならずにすんだこと、東京の大学当時、友人にマンドリンの好きなのがいて、そのグループの定期演奏会が、日比谷公園入口前の仁寿生命の講堂で開かれるときは、何度か演奏を聴きに行つたこと、同じ場所で毎月行われたレコード会社の新譜の発表会には、欠かさずでかけたこと、日比谷公会堂の音楽会にも、何度か足を運んだことなどを語り合い、楽しいひとときを過したことなどが、思いおこされます。

そのようなことで、12月のクリスマスの前夜祭のプレクトラムの集いには、いつもお招きいただき、福引きや部員の隠し芸、ジングルベルや聖しこの夜などの合唱やマンドリンの演奏、はては私にも何かやれとのことで、マダムバタフライなどの奇声を発したことなど、楽しく懐しい想い出のひとこまであると思います。

岩国を離れて下関西高校へ移ってからしばらくたったある年、熊谷先生から小さいハトロン封筒が送られてきました。開けてみたら、小さいテープが入っていました。早速レコーダーにかけて再生してみたら、ある年のクリスマスの前夜祭の集いの録音で、部員のみなさんの楽しい歌声やプレクトラムの調べのはかに、私の奇声の一節も入っており、熊谷先生のご好意に心から感謝もし、岩高時代を懷しんだことでした。

またあるとき、熊谷先生に、部員は、はじめから楽器の好きなものばかり集るのですかとおたずねしましたら、岩高へ入ってから始めて楽器を手にする生徒が多いのですよ……とのお答えでしたが、熊谷先生のような熱心な指導者と、これにこたえる生徒があつてはじめて、立派な成果があがるものだということと、師弟同行の教育の真の姿をつくづく感じさせられたことでした。

熊谷先生が亡くなられて10年になるそうですが、先生の教えをうけた先輩のみなさんが先生のご遺志をついで後輩を育て、お互いに協力し、励まし合いながらプレクトラムの輪をひろげ、今回の第30回定期演奏会を迎えることは、何にも、たとえようのない美しい人間関係の絵模様のような気がしてなりません。今は亡き熊谷先生も、さぞかし満足して、無言の拍手をおくっておられることと思います。

30回といえば、歴史的にも大きな節目にあたります。これを機会に、過去をふりかえり、プレクトラムの種をまかれた熊谷先生のご遺徳をしのび、プレクトラムを通じて、お互いの人間関係

を深めながら、さらに次の節目をめざして生生発展されますよう祈ってやみません。

(山口市 中村女子高校長)



おもいで

元校長 吉村宮男

下関市武久町1-47-22

岩高プレアンを初めて拝聴したのは、今から20数年前、当時私が在職していた柳井高校の講堂（もと柳井高女の講堂で、今は無い）で開催された県高校連合音楽会でした。連合音楽会の参加はほとんどが合唱で合奏は極めて少なく、ましてマンドリン合奏が聴けるなどとは夢にも思ってもいませんでした。マンドリンは我々の青春時代に大いに流行したものであり、実に懐しく拝聴したのですが、殊に熊谷先生の指揮振りは、恰も何者かにとりつかれた如き感あり、その音楽に対する執念に驚嘆したことは、昨日のことのように記憶しております。

その後、私は縁あって昭和33年岩国高校に赴任し、それから5年間、直接に熊谷先生とプレアンとに接触することとなりました。例年の定期演奏会には多くの先輩が協力してレパートリーも広く、常に盛会で、これも一に先生の人徳のいたずところかと思っていました。先生没後10年クラブ活動がなお活発だということは、遺徳後世に及ぶということで、いつ迄も見守っておられるからでしょう。

さて私は何の御役にも立ちませんでしたが、たゞ当時の講堂がもと定員700名の旧制岩国中学校のもので、川西校舎の女生徒を収容して全校生徒が一堂に会することができない状態がありました。それでこの拡張工事を計画したわけですが、これについては将来の移転計画とからみあって反対の声もありましたが、現状が余りにも気の毒だということで各方面のご理解を得て、県営工事で面積を約二倍に拡大して頂き、その上同窓会、PTAのご寄付でステージと綾帳、ピアノまで新調してもらいました。このことを一番喜んでもらったのが熊谷先生でした。ご承知のとおり先生は生涯独身で、その全精力を母堂への孝養と、プレアンの指導に専念されました。亡父君は宮内省にお勤めだったということで極めて礼儀正しいご家庭で、先生の昇給、ボーナスの度毎に母堂から礼状を拝受しました。昇給やボーナスはいわば機械的なもので、戦前のように校長の意見できるものではないので大変恐縮しました。そのお手紙は「愚息幹雄儀、今回昇給の恩命に浴し……」とあり参上の上お礼を申し上げたいが病床にあるために書状で失礼すること、終りに必ず自作の和歌一首が添えられておりました。それがまた見事な達筆で、私は稀代の悪筆ですから恥ずかしくてとうとう返事を差し上げることができません。いつも先生を通じてお礼を申し上げ以後ご無用のことをお願いしたのですが、お別れするまでついに、やむことがありませんでした。先生は、年寄は頑固で、気がすまぬからということですから気にしないで下さいということでした。こうした経験もまた私の19年にわたる校長生活の中で空前にして絶後のものであり、なぜ一度位お見舞いに参上しなかったかと悔まれてなりません。今日はもう先生にも母堂にも永久にお目にかかることができません。謹んでご冥福を祈ります。終りに岩高プレクトラム・アンサンブルのますますのご発展を祈ります。



30回定演を祝して

元校長 高橋正徳
〒740 岩国市尾津町2-3-9

「岩高プレクトラム30年史」が刊行されるに当って岩国高校で2ヶ年間お世話になり、横山の講堂で演奏会に招かれた御縁でお祝いを述べる機会を与えられましたが、寄る年波で当時の記憶も薄くなりましたので、想い出の2,3を綴って責を塞がせていただきます。

新入生の女子生徒が、マンドリンのケースを大事そうに抱え誇らしげに喜々として錦帯橋を渡って来ます。聞けば岩国高校に合格するよりもプレクトラムアンサンブルに入れてもらう方が難しいとのことですから無理もありません。私自身は全くの音痴で、マンドリンと言えば窓辺で流行歌を口ずさみながら搔きならすもの位に思っていたのですから、定期演奏会で「ラ・クンパルシータ」——これもうろ憶えですが——といった様な曲が合奏されるのを聞いて耳を聾てたものです。

プレアンと言えば熊谷先生を思い出します。10年前に急逝されたと承りますが、流れる汗を拭いながら、タクトを振っておられる先生の姿には、マンドリンに魅せられたとでも言える真摯なものを感じました。御気嫌の時には、獨得の笑顔で口三味線でなく口マンドリンとでも表現すべきでしょうか、得意のメロディーを口にしながら急ぎ足で廊下を歩いておられたのが、目に浮びます。

岩高プレクトラムアンサンブルも創設30余年を迎え、その間に数々のマンドリンの名手を送り出し、今年は広島で田村さんが日本一の腕を披露されると知って、熊谷先生もどんなにか喜んでおられるでしょう。

三浦会長を中心と今後ますます岩国市民マンドリンクラブが活躍されますよう祈念いたします。



“プレアン”の想い出

元校長 青木英一
〒746 新南陽市富田新町西

錦帯橋を渡り終えると、岩国高校の校門が ポツリと二本 ミカゲ石の古びた姿を見せる。咲き乱れる桜に浮かれた人の列が、この校門を素通りして、崩れかかった土塀に沿って、吉香公園の方へと流れていく。その雑踏をよそに、校門を一步入ると、古い校舎の廊下でのこぼこの赤レンガの波が暗く静かに続く。

玄関をつききって数十歩のところに、講堂が古い歴史の厳しさと重さをもって立ちふさがる。思わずそこに佇みながら、岩国高校の歴史に想いを馳せている私の耳に、あるいは松頬のような、あるいは潮騒のような妙なるメロディがどこからともなく流れてきた。このような音色の、このような見事なハーモニーのメロディを始めて耳にした私は、強く心をうたれるとともに、わが耳を疑った。これが、私と『岩高プレアン』との最初の縁であった。

このプレアンの育ての親であり、卓越せる指導者が熊谷先生であることを知ったのは、それから数日後であった。当巷に流れたバーブ佐竹の『女ごころ』の作曲家、吉田矢健次氏の芸術性の芽生えは、実に熊谷先生に負うところ大であったことは、皆さんよくご存じのとうり……。毎年、甲子園への夢をかけて岩高生の絶唱するあの『五橋の桜かんばしく……』の作曲も、そうした縁から当時吉田矢健次氏の後輩への愛をこめた贈りものであることを、今さらのように懐しく思い出します。

私が熊谷先生と特に親しかったのは、幼にして父を失い、母一人の手で育てられたという境遇が似ていたことにもよりますが、何よりもまず、『生徒を愛する』という教育にかけるその情熱に心をうたれたことにあるといえましょう。もちろん、先生のこの生徒への愛は、結果的には、自らの愛情に恵まれない家庭環境による寂しさを救うものであったことは否定できないが、少くとも、先生のプレアンの指導にかけられた熱情を身を以て体験された皆さんは、先生の『プレアン』への愛が、いや『生徒』への愛が、いかに温かくいかにはげしいものであったか、ご指導の一つ一つに感じとられたことと思います。

これは、かなり後になって知ったことですが、既に病重く絶食状態にあった先生は、それをひたかくしつつ、学年主任としての責任感から、いや今にして思えば、『こよなく愛する一年坊主たち』との最後の訣別を心に秘めての『遠足』を果たされて、間もなく不帰の客になられた。病状をもっと早く私が知っていたら……と残念でなりませんでしたが、例え私が静養を忠告しても、既に心に期するところのあった先生は、この『無謀なる遠足』を決して中止されなかっただしょう。先生は、愛情に恵まれない自らの生涯を、『プレアンへの愛』、『生徒への愛』にかけておられたといえましょう。『プレアン』とともにある熊谷先生を絶えず私は懷しむのである。



岩高プレアンの思い出

元校長 岡 村 直

〒753 光市島田上太田

岩国高校にマンドリンオーケストラがあることを知ったのは、私が山口高校から県教育委員会勤務になって、しばらくたった昭和20年代後半に入つてからのことだったようだ。戦後、新制高校がスタートしたものの、戦争中の物資不足、戦後の人心の虚脱荒廃の後遺症とでもいいうか、何とも言えず索漠とした感じのする高校の中で、岩国高校に来て見ると、校舎は古く、質素だけれども、緑の木々に囲まれて、実際に落着いた静かな雰囲気に包まれていたのには、いささかならず驚きもし、本当にほっとした気持ちを味わったことであった。この印象は、後年校長と

して着任した時、すぐ出会った方々に話したほどのものだった。その岩高にぴったりのプレクトラムアンサンブルが育っていることを聞いて、これにも何とも言えぬ親しみと懐しさとでも言うものを感じたのであった。

このような特別な感情をいだいたというのは、実は私は学生時代にギターを始めたことがあったためである。九大には荒川教授を中心としたオーケストラがあって、音楽に接する機会のない当時、私には大きな感動を与えていたと言ってもよいが、時間も少なく、経済的にも余裕がなく、もちろん元来音楽に才のないものが手を出せるものでもなく、全然その気もなかった。そのうち、古賀政男のギター伴奏曲「酒は涙か……」が流行して、何ともあの柔らかい音色に魅せられ、たまらなくなつてとうとう無理に無理して、ギターとカルカッジの教本（原書）を入手したのだった。はじめ「ギター教えます」の下げ札を見つけて、手ほどきを受けたが、それはピアノの先生だった。

その年の夏休み、門司に赤松某という上手な人がいると聞いて、一面識もなかったが、一日いきなり訪ねて行って、「ギターを始めたが、あなたのお名前を聞いて参りました。聞かせてください」と申し入れ、たしか、「何をやつたか」と言われて「酒は涙か……」と言つたら、おもむろにギターを取り上げて、まず聞かしてくれたのは忘れもない「カミング・スルー・ザ・ライ」多分私の程度を察して、わかり易いものをということだったと思う。が、音の柔かさ、甘さ、リズムの面白さ、心地よさ、トレモロの美しさ、本当に啞然というのか茫然というかだったと思う。M・ジュリアーン編曲だという。その後数曲もただ聞き入るばかり、仲間で発行している楽譜のことや、その他の楽譜のことなど教えてもらったのは、つい先頃のことのようである。とにかく流行歌の「酒は涙か……」を始めたばかりとは天地雲泥の差、てんでレベルの違うことにびっくりしたのであった。

これをきっかけにパスカル・ロッホの教則本を、当洋書を扱っていた丸善書店に取り寄せてもらって読んだり、在学中は少ない時間ながらかなり熱心にやつたものだ。卒業してからは生徒を教えることに夢中で、生徒を引張って来ては夜中まできたるという状態が続いたりで、ギターだけは家をかわるたびに抱え歩いたものの、手にすることはほとんどなく、そうなると、少しやると指は痛いし、元来素質のないことでもあるし、とうとう縁が切れたようなことになってしまった。岩国に居た間もギターは押入れに眠つたままだった。

つまらぬことを書いてしまったが、そんなことで先程言ったように岩高にプレアンがあるということが、私には特別な感懷をいだかせたわけである。その後も近くで、遠くで、時に岩高プレアンのことを耳にしたが、昭和45年、岩高に着任することになって、自分のこととして身近に触れることになったのである。在任中、今のようなことは誰にも言わなかつたし、特別な気持ちを外に出すようなことはなかつたが、ほとんど毎日、割に遅くまで学校に残っていて、それとなく練習振りを見せもらっていたのであった。そして毎年の発表会も、私達にはできなかつことを代つて果たしてもらうような気持ちだったのであった。市民マンドリンクラブが編成されて、岩高の卒業生が引続いて練習したり、発表したりしていることにも、口では言えない頼もししさを感じていたのであった。

世の中にはやりたいことは沢山ある。そしてその中に音楽がある。音楽にもいろいろな分野が

ある。そしてその中にギター・マンドリンがある。私はそれが好きだった。そしてその良さをほこらしく思つたりした。けれど結果的には捨てた形になった。これは私としては止むを得ないのだが、とても惜しくも思う。このよい音楽が岩国高校にある。岩高にぴったりという感じさえする。どうか岩高プレアンよ、いつまでも続いて発展していってほしい。沢山の若人がこの好ましい楽器を手にしてほしい。そうして卒業後もできるだけ多くの諸君が止めないで続けてほしい。切に切に祈る次第である。



マンドリン・クラブの発展に寄せて

元校長 田 中 豊
〒753 山口市大字野田14

岩国高校のプレクトラム・アンサンブルのOBが岩国市民マンドリン・クラブを作つてから20年になるという。

マンドリン・ブームというのが有ったのか無かったか知らないが、当令、マンドリン演奏に関する限り大規模のコンクールも少ないし、マンドリン・クラブもあちこちに有るという訳でもなさそうである。楽器の性格上、独り静かに楽しむのに適しているのであろうか。

高等学校のクラブ活動でマンドリンのある学校についてあまり耳にしたことがない。岩国高校のプレクトラム・アンサンブルは特異な存在である。しかもそれが永い伝統を持ちその定期演奏会も近く第30回を迎えるという。誠に驚くべきことである。

これは熊谷先生という立派な創設者のあったことにもよるが、プレ・アンを巣立ったOBが、常に後輩のために伝統の火をかき立てゝきた贈物であろう。

岩国市民マンドリン・クラブは、まさにその推進力となって今日に至り、自らも第20回の演奏会を迎えようとしているのである。

スポーツや芸能の技を磨くことは、若い人々にとって楽しいことであるから、苦労を耐え忍んで次々に目標を高め、次第にその醍醐味を味わう境地に入ることができるるのである。

それ自身人生にとって意義のことである。

その上稽古を通じてクラブ員同志が人間的に接触し、その交りを深めることのできることはそれにも増して楽しいことであり、人間性を磨く上に意義のあることである。

若い時には、いろいろ勉強しなければならない事があるが、人の交りを深くする事も極めて大切であつて、若い時の交友関係は生涯直接間接に物を言うものである。

岩国市民マンドリン・クラブの方々には、そのマンドリンの技能もさることながら、永いクラブ員の接触を通じてそれぞれ立派な社会人となつて活躍して居られるものと信じており、岩高プレ・アン諸君もこうした良い先輩をもつて幸いであると思っている。

私は今度、結婚相談員という新しい仕事に就くことになった。テレビ・ラジオ・新聞等で盛んに報道されたのでご承知の方も多いと思うが、山口県の公立学校の教職員で作っている財団法人山口県教職員互助会が、この6月から始めた結婚相談所で、互助会の会員やその家族の方が、結

婚の相手を見つけるのを援助してあげる役目である。

開店早々多数の申込み者があり、更に互助会に縁の無い人からも、大阪・神戸・広島等、県外からも問い合わせが来るという始末で「結婚」ということの難しさをしみじみ味わされているこの頃である。

私も男であるから、世の男性の通弊通り結婚についてあまり厳しく考えては来なかった。のみならず「一つのくじ引きとあきらめる」暢気な質であったのだが、他人の事となるとそういう訳にもいかないから、こゝに改めて、これから結婚を迎える人達に一言言っておきたいのである。

今の青年には三度の勝負がある。大学入試・就職・結婚の三つがそれである。

三度の勝負のうち結婚ほど大事で難かしい勝負はないにも拘らず軽視されていると言いたいのである。入試や就職にかけた根性を結婚においても発揮してほしいと思うのである。

考えてみれば、大学入試というのは最も単純なテストであって、特定の教科に限られたテストである。仮に失敗しても他人に影響もないし出直しもできる。就職ともなると戻り道が限られているし、ゆっくり思案もできない。何れにしても成否は多く先方で決めてくれるのである。

結婚については、先方や他人に任せる訳にはいかないのである。最終的には当事者の二人が合意のもとに決定を下すという最も自分自身の責任にかかる勝負である。

適切な時機に適切な決定ができるよう第三の勝負を大切にすることをお願いしておきたいのである。

豊かな人間関係を築いて来られたマンドリン・クラブの方々に対して、こういう忠告は必要でないかも知れないが、もし思い当る節のある人があったら大いに奮起して幸福をつかんでいたゞきたい。

30年史の刊行に寄せて



県立岩国高校校長 山崎達雄
〒741 岩国市川西1-21-3-110

岩高プレクトラム・アンサンブルの30年史が作られるということを聞き、先ずは驚きました。一つのクラブについて30年史をつくるというのは、30年という長い歴史と、その間の誇るに足る充実した内容があるからで、一般には驚きに値すると思います。次には好奇心をもちました。どうしてそれだけの歴史と内容が創られたのだろうかと思うのは人情ではないでしょうか。今、手元にはこの30年間のことを物語るものもなく、周囲の方から断片的に多少のことを聞くことができるに過ぎません。それだからこそ30年史として1冊の本にまとめようということになったのだと思い、30年史の出版を心からお慶び申し上げます。

例えば、草花の好きな熱心な先生が学校に赴任されますと、鉢が段々増え、そのうちに温室ができて校内に美しい花が飾られ、学校の雰囲気が変りますが、一度この先生が転任されると、とたんに花は枯れ、温室の窓ガラスは破れて見るも無残な姿になるものです。誰か後を継げばよいわけですが、素質的というか、誰にでも後が継げるというものではなく、克な結果になるこ

とが多いもので、学校に「特異な施設を作るな」という引き合いによく出されます。クラブ活動の場合は、一人の先生だけでなく相棒の生徒がおりますので、上の例とは若干違い、多少興隆し難く、衰微し難い傾向があるかも知れません。熱心な指導者があるとめきめき実績が挙がり、周囲からも注目されますが、その先生が去られますと2~3年で細ってしまう例はよく見られます。草花は半年で枯れますが、枯れるのに多少期間があるくらいの違いでしょうか。

このような状態が一般的傾向ですが、本校のプレアンが隆々として30年にわたって栄えているのは注目に値すると思います。それは、昭和21年春母校である本校に赴任された熊谷幹雄先生の献身的な努力と熱意、先生の許に集った生徒の優秀な素質と意欲に始まり、後をつぐ生徒が絶え間なく先輩のメロディーに惹かれるように続き、更に熊谷先生亡き後の先輩諸氏のたゆまぬ熱心な指導と4拍子揃っていることがその要因であると思います。今後ともこのようにありたいと願うとともに、ますますプレアンは光彩を放っていくことゝ喜びに堪えません。

熊谷先生の思い出

現教頭 門 田 栄

〒740 岩国市今津町3-18-30

去る、9月23日にプレクトラムアンサンブルの第30回定期演奏会が盛大に開かれましたが、4年半ぶりに母校に帰りました私は、久しぶりにしみじみと演奏を聞くことができて深い感慨にひたることができました。

30回定期演奏会といえば、ほぼ30年間の歳月の上に刻みこまれたのですが、高等学校でマンドリン・ギターを中心とした音楽部では、他に類を見ない素晴らしいものだと思います。

これこそ、歴史と伝統を誇るわが母校百年の歴史に、さらに未来への夢をばば広く拡大していくことができる文化的活動だと思うのです。

この定演とともに思い出されるのが、いまはなき熊谷幹雄先生のことです。先生は部の創設者であり、そのうえ音楽を愛され、生徒をいつくしまれ、母校を愛しつづけられて戦後23年間、教育者の道を純粋に、一途に強く生きられた方でした。

また、横山をこよなく愛されて遂に川西向山の新校舎に移ること叶わず昭和43年7月16日不帰の人になられました。

私は戦後23年間ともに母校で教職にあった者の一人ですが、定演以前のことで皆さんにご存じない歩みについて、おぼろげな記憶ですがたどりながら書いてみたいと思います。

終戦直後の昭和20年10月1日に縁あって私は教壇に立つことになり、占領下の不安な空気のなかで、教科書もなく、食糧事情は最悪、衣服もまともでないなかで如何に授業を進めたらよいか途方にくれていた頃、昭和21年4月に熊谷先生が赴任してこられました。

先輩である先生については、川西に住んでおられることと、お名前程度しか存じませんでした。私が旧岩中に入った時先生は四年生でどことなく品がよく、しかしきびしい面立ちの上級生として印象が残っておりました。そのことを申しあげるとすぐに何年も前からおつき合しているように

親しくなり、そのうえ幸いにも机をならべてともに新一年を担任することになりました。

こうして熊谷先生との出会いが始まり、教員生活への初步の手ほどきから教えをうけることになり、今日あるのも先生のおかげと深く感謝しております。

当時、母校には伊藤校長、大地教頭がご在職で、或る日熊谷先生には音楽(ハーモニカアンサンブル)の世話を、私には野球の面倒をみると申しわたされたのです。

現代のようにはっきりと整った組織的な状態でもなく、予算についても決まったものではなく、全く無の状態から、地元出身であるからしかるべきやれというようなことでした。

私どもも惨めな敗戦から立ちあがるために、元気な中学生達に何かをしてやらねばならないという悲壮感ともうけとれる気持で一所懸命でした。しかしどちらを向いても佑びしいことばかりで、つぎはぎだらけの活動でしたが、明るく成長する中学生の姿に苦しくても皆張切って楽しい思いでした。

この間のハーモニカアンサンブルのことについては、15年誌に熊谷先生が詳しく書いておられます。

前進ばかり続けているときには圧力がかかるのが世の中の道理で、戦後のクラブ活動についても例外ではありませんでした。

翌年だったと思いますが、組織化、予算化の道が一步前進はしましたが僅かの予算のことで一年分を一学期に使いたいぐらいで、はやる気持にブレーキがかかりました。クラブは金を使いすぎる放蕩息子みたいなものだとたしなめられたことがありました。放蕩息子という言葉にたまりかねて熊谷先生と私と二人で強く抵抗し、校門の横の八角堂の図書館で夜の10時まで職員会を頑張ったなつかしい思い出がありました。

昭和24年4月石神校長先生がご来任になってプレクトラムアンサンブルの発足をみるわけで、この間の歩みは15年誌に熊谷先生が記しておられます。野球部についても書きますと、中一期の黄金時代をむかえ一次予選を勝ち進んで2回目の二次予選西中国大会に（1回目は22年の山陽大会）出場しました。

かくて石神校長先生は昭和31年10月までご在職で、創設期のクラブ活動に並々ならぬご指導をうけ、部をもりたてていただきました。

最後に、熊谷先生のもう一つのご功績について私の心に強く残っていますことを記します。

先生は教科は国語のご担当でしたが多くの卒業生から「江戸くずしの名調子」の授業だったと親われており、強い印象として残っているようです。

さらに先生は、本校での生涯を終始一貫して一年の担任をつとめられ、後には学年主任として全般的なご指導にも当られたことです。しかも極めて頑固で歴代の校長先生がご来任されても遂に変ることはありませんでした。人間形成の面で、新入学時の躾教育が極めて大切であるという先生のご信念によるもので、礼儀、作法、言葉使いは勿論のこと特に和の精神を強調されて、オリエンテーションなどの時には特別に目が輝いてみました。

本校に入って2年に進級した生徒は皆んな熊谷先生のご薰陶を通過した者ということになり、身をもって気品ある校風と伝統ある岩高精神の育成に23年間の情熱をつくされたもので、母校をこよなく愛し続けられた先生の清純な愛情が、本校百年の歴史と伝統に新たな輝かしい節目を刻み

こまれた役割は大きいものと言えます。
終りに、いまは普済寺の山に静かに眠っておられる先生の御靈安らかれと祈りつつ筆を欄きます。

プレクトラムアンサンブルの顧問として

顧問 河 内 喜代彦

本年は本校のプレクトラムアンサンブルの30周年と、本校の卒業生で構成される岩国市民マンドリンクラブの20周年の記念すべき年と聞き、これまでの顧問の先生方が、初代の熊谷先生を始めとして、いずれも深い御造詣と御熱心さで指導して来られた今日、よりもよって、私のような音痴が本校のプレクトラムアンサンブルの顧問を引き受けましたことは、今までのプレクトラムアンサンブルのすばらしい歩みに大きな汚れを記すようなことになり、恐れ入っている次第です。

しかし、私も音楽に興味や関心が全くなかったわけではありません。高校生の頃は一時いろいろ興味をもち、「バイオリン」や「ギター」等もさわる程度のこととは多少あったのですが、いずれもオタマジャクシの読みとり不能と生来の鈍さのため、途中で放棄せざるを得なくなり、それ以来全く聞き役専門になりました。そしてその頃に聞く曲は「コロラドの月」とか「丘を超えて」等でした。マンドリンのトレモロのすばらしさを知ったのもその頃でした。

私が本校に赴任して参りましたとき、4月のクラブ紹介で「プレクトラムアンサンブル」ということばを聞き、何のことだろうかと思っていましたところ、やがてマンドリンクラブのことであり、またそのクラブは毎年秋に定期演奏会まで開催していることを知って、本校にはめずらしいクラブがあり、しかも熱心に活動していることに感心していました。そうしていたところ、昨年は不意に「副顧問を引き受けてくれ。」と半強制的に頼まれ、「それでは私は何も知りませんが。」とお世話もできないままに引き受けてしまったわけです。そして始めて聞く本校のプレクトラムアンサンブルの正式の演奏は私のこれまで耳にしていた低俗な曲よりも遙かに格調の高いものであり、ただただ素晴らしいという一語に尽きるものでした。これでは私のような低俗な人間にはとてもお世話できないと思っていた矢先、「だから今からは高尚な音楽をしっかり聞いてもらい、理解してもらう機会を十分与えてあげましょう。」とこれも半強制的に今年度は正顧問を押しつけられてしまい、どうしたらよかろうか、このままでは今まで折角りっぱな歴史をつくりってきたプレクトラムアンサンブルが挫折してしまうのではなかろうか、と案じるままに半年が過ぎてしまいました。幸い今年は副顧問として私と同じ国語科の吉本まり子先生の御協力を得ることができまして、吉本先生の熱心さに私の方がリードされているような状態です。

現在のクラブ員は1年生が40名、2年生が25名、3年生が15名、総計80名という、本校のクラブ中では最大の所帯ですが、部長を中心に、また多くの先輩諸兄姉の平素からの熱心な御指導を得て、本年もあと数日に迫った第30回定期演奏会を成功させるため、連日猛烈な練習を続けてお

ります。一方本校は御承知のとおり県下でも有数の進学校であり、それだけにクラブ員の中には勉学とクラブの両立に苦しんでいる者も多いようです。しかし1つのことに青春の情熱を打ち込んでいる姿は見ても本当にすがすがしいものであり、これがまた彼らクラブ員の青春の思い出として永く残ることと思います。彼らは高校での活躍はわずか3年間ですが、卒業後は岩国市民マンドリンクラブの1員として再び活躍するものと思っております。

記念すべき本年を迎えて私も音楽には未熟ながら、本校のプレクトラムアンサンブルと岩国市民マンドリンクラブの発展を心から祈念してこの稿を終りたいと思います。

祝　　詞

山口芸術短大教授

前岩高教諭（音楽科担当）福島淳
〒741 岩国市錦見4-16-26

記念誌発行を心からお祝いいたします。

10万都市としては文化的な施設、内容共に全国的にも極めて珍らしいほど貧弱な岩国市に、素晴らしい行動力とハイレベルな活動を続けている岩国市民マンドリン・クラブがあることは、音楽関係者の一人としてこの上ない喜びと誇りに感じ、また市民の一人として救いにも似た共感を覚えます。

マンドリン・クラブで先ず思い出されるのは、故熊谷幹雄先生のことでもあります。岩国市民マンドリン・クラブの根源になった岩高プレクトラム・アンサンブルは熊谷先生の並々ならぬ情熱とご苦心によって出来たものでした。昭和23年から先生の亡くなられるまで、プレアンの創立時代・充実時代・発展時代と側でつぶさに見て来た私にとっては、半ば自分の生涯を振り返るような感慨深さを感じます。

岩高初期は、プレアンと合唱の両部が共同で春秋に定期演奏を持っていました。その後合唱はコンクールその他の関係で定期演奏を春に、プレアンが充実した秋にと分かれましたが、最近迄お互に交歓演奏としてステージは夫々応援したものでした。思えば昭和36年には熊谷先生の急病でピンチヒッターとして全然知らない曲を指揮させられ、アタックが揃わないこと、音質の関係からか各パートが走りだして冷汗をかいたことなど想い出されます。この時の部員の方々には全く申し訳ないことだったと今だに責任を感じています。また合唱付きの“麦祭り”という曲を両クラブが合同演奏したことなど思い出の数々が残っています。

熊谷先生の素晴らしい情熱、秀れた音楽性がそのまま受け継がれ、ご逝去後10年たった現在もなお生々々々と発展している姿を見ると、今さら音楽の持つ魔力の凄まじさに圧倒されます。

“死者の生命の力強さ”このような世界が他にあるでしょうか。私が岩国高校に勤めたのも先生の招請によるものだったし、先生最後の1ヵ月間の入院も国病に同じように入院したこと等、先生には特別な因縁を感じています。先生のご冥福を祈ると共にこのクラブの発展を願っています。

プレアンにとってもう一人の大恩人は、クラブ創設時の岩高校長石神正氏です。石神正校長の広い見識と力強い指導力によってプレアンは成立したものです。創立からその充実については

随分苦労され傍で見ていたりも大変なものでした。多くの方々に改めて認識して頂き感謝して頂きたいと思います。

熊谷先生を中心としたプレアンの想い出になってしましましたがお許し下さい。

最後に、岩国市民マンドリン・クラブが、三浦会長を中心にして今後さらに飛躍的な発展をするよう心から祈っています。



祝　　辞

岩国市長 河上武雄
〒740 岩国市車町1-14-39

岩国市民マンドリンクラブが創立20周年を迎えられ、またその母体である岩国高等学校プレクトラムアンサンブルが第30回記念定期演奏会を開催されるというまことに喜ばしい時にあたりまして、心からお祝いの言葉を申し上げます。

さて、昭和24年12月24日故熊谷幹雄先生の並々ならぬ音楽への情熱によって岩国高等学校プレクトラムアンサンブルが誕生し、岩国の地にマンドリンの一粒の種子が播かれたのでした。それは戦後の荒廃した人の心の中で育っていた若い世代の心を潤おし、精神の高揚を促すなど、若き胸に訴えたものは大きく、それによって戦後の混乱の中で音楽文化の基盤をつくられたのであります。

その後、昭和33年岩国高等学校プレクトラムアンサンブルのOBによって、学生時代の音楽の楽しみを社会人となっても楽しもうという意図から岩国高等学校プレクトラムソサエティを組織され、今日の岩国市民マンドリンクラブへのステップを踏み出されました。

つづいて、昭和45年に岩国プレクトラムソサエティと改称され、広く市民の音楽愛好者に呼びかけられましたところ会員は次第に増加し、演奏活動も広範囲に及び、昭和48年には岩国市民マンドリンクラブと改称され今日に至っております。

創設以来通算20年にわたって定期演奏会をはじめとして数多くの内容豊富な演奏活動を幅広く続けて来られ、聴衆に深い感動と豊かな心を与えられたばかりでなく、音楽の普及に大きな貢献を果たしてこられました。それは、会員の皆様のたゆまぬご研修とご努力の賜物であり、ここに深く敬意を表します。

また本年は、終始献身的にこれら諸団体の育成と指導に当られました故熊谷幹雄先生が昭和43年7月16日多くの人々に惜しまれてご逝去になってから、はやくも10回忌を迎えるました。

終わりにあたって、岩国市民マンドリンクラブの会員におかれましては、今後とも益々高度な音楽性を追求され、演奏を通して岩国に音楽の伝統を築かれますよう期待し、ご発展を祈念いたします。

祝　　詞



岩国市教育委員会教育長 木下良久

〒740 岩国市今津町1-14-51

岩国市の音楽団体として中核的な存在であり、古い歴史と文化功労賞受賞をはじめ数々の栄誉をもっておられる「岩国市民マンドリンクラブ」が、本年度創立20周年を迎えることは、まことに喜ばしく、心よりお祝詞を申し上げます。

岩国市民マンドリンクラブの創立については、皆様ご承知のように、戦後の暗い世相の中において、楽器も充分に得られない混とんとした不安動搖のとき、熊谷幹雄先生のご指導により生まれた岩国高校の音楽サークル活動から発展したもので、名前も岩国高校プレクトラム・アンサンブル → 岩国高校プレクトラム・ソサエティ → 岩国プレクトラム・ソサエティと幾度かの変遷を経て今日のような成長を迎えたものであります。

熊谷先生の音楽に対する情熱、高校生に対しての愛情、人間味溢れる指導は、今日までの語り草となり、毎年開催される岩国高校のプレクトラム・アンサンブルの定期演奏会の日には、クラブの生徒が墓参し、その成果を報告しているということを聞いております。

音楽をとおしての人づくりが、現在も生きているということに、熊谷先生の人がらがしのばれ敬服いたしますとともに深い感銘をおぼえる次第であります。

今年は先生の10回忌に当たり、楽団としても、岩国市民マンドリンクラブの20周年、岩国高校プレクトラム・アンサンブルの30回定演となり、それぞれ意義深い記念の定期演奏会が開催されます、成功をひそかにお祈りするとともに、地下に眠っておられる先生のご冥福を心からお祈りするものであります。

音楽は人々の生活とともに発達し、すぐれた音楽には人間の求めてやまない真善美……あらゆる情感がこめられております。

音楽を盛んにすることは、立派な人間を育てるためにも、また、文化的で平和国家を建設するためにもまことに大切なことであります。

現在の教育に豊かな人間性の回復が叫ばれているとき、岩国市民マンドリンクラブのますますのご発展とご活躍を期待し、岩国市音楽文化の向上にご貢献あらんことを祈念してやみません。

“おめでとう存じます”

日本マンドリン連盟会長 伊東尚生

〒500 岐阜市梅河町1-7

今年は、岩国高校プレクトラム・アンサンブル第30周年、そして恐らくその卒業生の方々の多くのメンバーより成ると推察される、岩国市民マンドリンクラブの第20周年とおめでたが重なり、心より御祝い申し上げます。又、岩国市においてマンドリンの黎明時代より大いに御尽力なさいま

した熊谷幹雄先生の御逝去10周年に当ります由で、これを機会に記念誌を編纂中のこと、実に当を得た企画で、御同慶に耐えません。

第4回日本マンドリン独奏コンクール（大阪市）に、貴クラブの新井義悠氏が第1位金賞を獲得され、又引つづいて第5回のコンクール（広島市）には、やはり貴クラブより田村隆司氏が第1位に入賞されました、極めて優れたマンドリンクラブであるとの御噂はかねがね承っていましたが、去る2月6日のJMU主催の西日本フェスティバルにおいて中国地区代表に参加され、素晴らしい演奏を拝聴しました。

これは指揮者の方々、メンバーの皆さん等の協力一致の賜物とは存じますが、更に逆のぼって良き指揮者であった熊谷幹雄先生の勝れた指導力、影響力によるることも否定することの出来ない事実と思います。

この度の記念誌の発刊にあたって、かっての指導者熊谷先生の御恩をお忘れなく、この年に、先生の記憶を新たに温める企画には満腔の敬意を払うものであります。これを機会に今後共、亡き熊谷先生の面影を見失うことなく、共に歩み、更に前進されますよう、心からお祈り致します。

本当におめでとう御座います。

戦前の岩国マンドリン活動

JMU副会長 西 村 鎌次郎
〒107 港区南青山2-14-4

岩国プレクトラム30年史編纂にあたり、戦前の岩国のM・C活動について記すよう御依頼を受けました事を誠に嬉しく存じます。

私は昭和4年4月から昭和8年9月まで、帝人岩国工場に勤務していましたが、当時の工場長吉岡豊氏が大変音楽がお好きで、音楽を通じて工場従業員に情操教育をほどこしたいとの御趣旨から、マンドリンオーケストラの設立にお力添えをいただきました。更にプラスバンドを作り、将来は管弦楽団に発展せしめる大構想だったのです。

私は東京帝国大学在学中の三年間、大森マンドリンオーケストラ（後に東京マンドールと改称一昨年から35年ぶりに復活して年一回東京で演奏会を開いています）に所属していましたが、俄かに岩国の片田舎に勤務することになり、その淋しさをまぎらすため、マンドリン音楽の普及に打ち込みたいと考えていました。入社二年後の昭和6年4月、吉岡主事に勧められて女子従業員にマンドリン、ギターを教え、楽団を作ることをお受けした次第です。

現在岩国市に住む方々には片田舎と言う言葉に抵抗を感じられるかも知れませんが、当時は工場所在地は麻里布村、旧岩国は岩国町、現在の岩国駅は麻里布駅で、この駅前から錦帯橋まで電車が通っていた頃の事です。

この電車は岩徳線が麻里布から岩国まで開通したので、私の赴任した一週間後に廃止されました。麻里布駅から工場までは一面の田園で工場の近くに社宅や商店が少しあったのみでした。麻里布駅前には蔵重や山陽などの旅館が3つ4つあったのみで、そのまわりはすべて田園でした。

当時岩国工場の従業員は千五六百名でしたが、昭和8年頃には二千五六百名に増え、女子従業員が約半数いましたので、女子寄宿舎には七、八百名が入っていました。

マンドリンオーケストラのメンバーは主として女子寄宿生を対象にし、練習も寄宿舎の一室でやりました。

工場の経費ですべての設備を整えて頂いた以上、出来るだけ早くその成果を発表したいものとあせりましたが、楽譜も読めない人ばかりに初步から教えるのは容易ではありません。最初はマンドリン10名、ギター4名を採用し4月から10月まで猛練習をして、10月24日に第一回の発表を行ないました。工場の昼休みを利用して発表するので、せいぜい30分位の演奏をしたのみでした。

第一回及び第二回は合唱団と合同で漸くプログラムをうめることが出来ましたが、第三回からは独力でプログラムをうめることが出来ました。メンバーの数も12,3名から、第五回には21名に達しています。

工場病院の外科医原田三樹男氏がギターの教育を受けられ、合唱団の方は麻里布小学校の中川安一先生が指導に当って居られました。

部員の移動が激しく、第一回に募集した14名は一年後には3名になってしましました。従って再び最初から教えねばならず、一週に2回、時には3回も出かけて指導をしました。

昭和8年6月18日岩国工場歌並びに帝人行進歌が出来ましたを記念して、発表演奏会を開くことになり、従業員及びその家族のみならず、一般の方々もお招きして盛大な演奏会を催しました事は私の若い日の最も楽しい憶い出になりました。

昭和8年9月11日には広島放送局の御依頼を受け午後5時半から6時まで「赤い翼」「村人の組曲」などを放送しました。当時プラーゲ旋風と称するものがあり、外人作曲者の放送には放送局が特に神経をつかっていましたので、一部曲目の変更を余儀なくさせられたものもありました。

私はこの放送を最後に岩国を去り、大阪本社勤務になりました。2年半手がけてきたマンドリンオーケストラと別れるのが一番つらかったが、幸い東京プレクトラムソサイティの内木清次氏がその少し前に千代田生命広島支店勤務になり赴任されたことを聞きましたので、あの指導を同氏にお願いする事に致しました。

その後2,3年は内木氏の熱心な御指導により、更に発展しましたが、準戦時態勢に入ると共に次第にその活動がむつかしくなり、数年を出でずして消滅したようです。

以上が戦前の岩国におけるM・C活動の概要で、主として帝人工場内で行なっていた音楽活動ですが、工場歌発表会やJOKからの放送等多少工場外への活動を致しましたし、時には麻里布小学校へ出かけて演奏したこともありました。

最後に岩国高校プレクトラムアンサンブル、岩国市民マンドリンクラブの御発展を祈念しております。

変な祝辞

J M U副会長 中野二郎
〒464 名古屋市千種区城山町2-13

熊谷先生御在世中、当時京都同志社大学マンドリンクラブに岩国高校出身のメンバーが居り、それが御縁で同校講堂で同校マンドリンクラブの演奏を拝聴したことがあります。先生とお逢したのは私としてはそれが最初で最後であったけれども、同校マンドリンクラブの声価は全国的に高く、当時、関東関西の各大学マンドリンクラブのリーダー格は同校出身者が非常に多かったと聞いています。これ偏々に熊谷先生の御薰陶の賜物で、その伝統は立派に今日までも受け継がれて、今回の記念演奏会を持たれることに敬意を表します。

私は、マンドリン音楽に携わるようになってから半世紀を越え、今日では最長老になりました。しかし往年の事を思うとこの頃のマンドリン界の風潮に同感し難いものがありますので、こゝに述べるのは相応しくないかも知れませんが一つの警鐘として受け取って頂きたいと思います。

古典の大ギタリスト“フェルナンド・ソル”的作品48番に“Est ce bien Ca?”……これでよろしいのか?……と名付けられた六つのギター小曲集があります。当時からソルのギター曲は、演奏が難かしいと言う定評があり、ソルとしては相当容易な技巧に書いた積りのものも、なおかつ難し過ぎると言われていました。そこで一般ギター愛好家と出版社に責められて不承不承に書いたのが前記の曲だったのです。ソルとしてはもうこれ以上妥協はできないという線で書いたのでしょうが、それでもなおかつアマチュアにとっては易しいと言い難いものだったのです。題名に苦しんで「こんなところでどうですか」と名付けたので、芸術家ソルの良心を垣間見る思いがします。

私はソルのこの言葉を借りて日本のマンドリン界に言っておきたいのです。

私は本年75才、残りは非常に少なくなっています。従って物を言うのに今更右顧左胸したり、歯に衣着せる必要が少しもありませんので、わがマンドリン界に瀰漫する感心しない風潮について一言しておきます。

海外旅行

ここ数年来われもわれもと海外に出かけたがる意味が私には判りません。もっと国内(日本)での演奏の声価を高めて然る後にそうしたことを考えるべきで、わがプレクトラム音楽の理想像は如何にあるべきか、メンバーの技量は一般音楽の水準に達しているかどうか、反省すべき材料は山程あるのです。ドイツのベルキ等は近頃日本の演奏団体が入り代り来るが、一体、何処が日本の代表団なのかと聞いて来ている程なのです。

「あそこの団体は非常に優れているそうだから一度聴いておきたい」と日本中の愛好家が注目するような団体に仕立てから海外での声価を問うのが順序であります。観光旅行ならば結構で、何処の景色が良かった、何々が美味かったと言うならば罪はありませんが、好評、絶賛は全く恐れ入りやであります。本当にそれが優れているのであれば国内での声価がもっと高い筈で、人伝てに聞く恥のかき捨て話や裏話を聞くと、どうしてそんなことがそんなに嬉しいのか疑いたくなり

ます。海外へ出かけるとなれば相当の出費も覚悟しなければならないと思いますが、如何に経済成長国になったと言え勿体ない話です。ある女性の練習生が来月一寸休ませて頂くと言うので聞いてみると、ヨーロッパに旅行してくると言うのです。そんな金があれば何故良い楽器を購おうとしないのかと私はつくづく情になりました。酒を呑む金は惜まないが楽譜を買うのはイヤと言うのが現世一般の風潮のようです。それでいて自分達のやっているのは一番優れていると思い込んでいる自己陶酔型がはびこっているようです。

アマチュアイズム

素人趣味・道楽と言うべきでしょうか、JMUの在り方がこれの典型的なもので、何よりの証拠は毎年一回開かれるJMC総会にプロ活動している人は誰一人顔を出さぬことで判ります。

つまりプロにとってはマイナスにこそなれプラスにはならぬと言うことです。たまたま東京で開かれると地の利で顔を出す人はあっても「一寸今日は」と言って早々に退場して、馬鹿を見るのは地方から出かけた愛好家で、年一回の絶好な機会と期待しているとマンドリンの話は何も出ず会則改正の話で終始する有様です。もっとも平素、唯弾くことだけで研究的な積み上げがないから話題の出ないのも肯けるのであります。これではつまらないと一時テーマを提出して討議をしてみたことがありますけれど、元々そうした関心の極めて薄い会なのでいつの間にか立ち消えになってしまいました。

プロと言いアマと言い、元来目指すところは一つであります、プロの方は拙い演奏は忽ち自らの生活に反映するので考え方方が厳しく、それに引き代えアマの方は目指すところは同じでも、どんな拙い演奏をしても咎められることはないで考え方方が甘くなり易い。言いかえれば、どんな拙い演奏をしても、いくら進歩がなくとも退歩しても存続できるのであります。定年退職後の趣味、功成り名遂げた人の道楽、いずれも結構ですが単に往年の繰り返しでは情なく、考え方、演奏、何かに進歩が欲しいのです。

文献

貧困の一語につきます。珍らしくそうした文字を見出すと私にとっては既に40～50年前に調べ上げたことでまだ私の方がましな位なのです。武井氏の出していたマンドリン・ギター研究誌も大正5年創刊号から（初めはマンドリンとギター）マンドリン・ギター研究資料に至る20数年間欠号なしに私は見ており、私にとっては可成り貴重な資料で熟読していました。武井氏在世中私の作成したジュリアーニ作品表を見た武井氏は武井氏説と話した私の文字を見て怪訝な顔をして居られたのを思い起しますが、書いた武井氏より読んだ私の方が誌をよく熟読していたのです。

武井氏の誌を熟読していると氏の考え方方が一本筋が通りしかも進歩の跡が至るところに見られます。一曲の解釈の仕方を見ても、画家にしてみれば一線一廓を疎かにしない周到さと透徹した優れた觀察がありました。武井氏には外には一寸見られない鋭い閃きと直感があり、仙台の沢口氏が出ていたアルモニア誌はまたこれと対象的な学究的なものでした。

今、仮にこれらを読み返してみても匹敵する文献はないのですが、現在マンドリン音楽に携っている人の大半、恐らく9割方、否それ以上の人人がそうした過去の実体を全く知らない人達なのであります。闇夜という感じが拭い切れません。

記念誌発刊によせて

J M U顧問 作曲家 鈴木 静一
〒155 世田谷区代沢2-19-16

岩国プレクトラム30年史が編纂されるという。社会人グループで20回は珍らしい記録であり、こうした記録の基本となる岩国高校プレクトラム・アンサンブルを育てられた亡き熊谷幹雄氏の業績に深い敬意を禁じ得ない。

自身が岩高の熊谷氏の存在を知ったのは、大戦後のことと、熊谷氏が早大在学の頃の同窓者からだった。しかし自身は昭和8年からマンドリン界から離れ、管弦楽曲の作曲に転じていたので、それ以上の事は知ることが出来なかったが、昭和41年、マンドリン界の盟友小池正夫が亡くなりそのためのレクイエムを作曲し発表したのが動機となり、30数年ぶりでプレクトラム界との接触を取り戻したが、その時、京都の鳥井氏の仲介で立命館大学マンドリンクラブのコーチを引き受け、当時のコンサートマスターであった新井義悠君、続いて中央大学マンドリンクラブの指揮をしていた藤本匡孝君から熊谷氏の功績の細部を知り、益々同氏への尊敬の念を深めた次第である。

岩国とのお付き合いも次第に深まり、数年前、岩国を訪問したことがある。当時の富沢会長さん他幹事の方々とゆっくりお話しをする機会を持ち、又城下町岩国の名所旧跡を案内してもらったが、今もあの香川長屋門の“無頭の騎手”的民話が脳裏から離れない。近々是非とも作曲を手がけてみたいと思っている。

岩国高校プレクトラム・アンサンブル第30回、岩国市民マンドリンクラブ第20回定演と夫々30年、20年の合奏活動は、極めて稀少価値が高い。その間の苦労と努力は想像を絶するものがあったであろう。熊谷氏の血を索く岩高プレクトラム・アンサンブル、岩国市民マンドリンクラブは、その誇るべき経歴を大切に、益々記録を延長されることを希望する次第である。

岩国プレクトラムと私

大浜 博正
〒747 防府市三田尻1-12-7

今年の2月、西日本マンドリンフェスティバルが神戸文化ホールにて開催された。特別出演として田村隆司さんの独奏があった。久し振りに聞く彼の成長振りと真面目な演奏態度に、心から喜びを感じました。熊谷先生が生きていたら、どんなにお喜びのことか。岩国市民マンドリンクラブの合奏も聴衆をひきつける素晴らしいものでした。日本のマンドリン界における岩国の中存在は、斯界の注目を集めています。

この岩国プレクトラムの育ての親である故熊谷先生と私の出会いは、私が早稲田のマンドリン樂部のコンマスであった頃、岩国に演奏旅行をした時でした。先生が私達樂部の大先輩であったということで非常な歓待を受けました。演奏旅行の会場は市内の何とかの会社の体育館でしたけ

れど、私達にとって今だに強く印象に残っているのは、翌日行なわれた横山講堂に於ける岩高と早稲田の交歓演奏会でした。あのなつかしい講堂で聴衆なしのお互いの交歓演奏は、演奏会の気負いもなく、本当にマンドリン音楽を楽しむ会でした。

演奏終了後、岩高プレクトラム・アンサンブルの確か豎琴をあしらったバッヂと早稲田のバッヂをそれぞれ個々に交換しあったものです。その時の事は岩国にも憶えて居られる方も何人かいらっしゃるのではないでしょか。山添さんがコンマスとして可愛い学生服を着ていて、私にいろいろ話し掛けて来た記憶が今でも思い出せます。その時から先生との御付き合いが始まり、岩国高校の演奏会にはいつも御案内を頂き、定演ばかりではなく山口で行なわれていた県の高校音楽コンクール（岩国高校は常に特別賞を頂いていたと思いますが）にもお呼びが掛っておりました。

岩国高校の演奏会はいつも昼間の日曜日に行なわれていたのでしょうか。風光明媚な錦川に囲まれた横山講堂のその渡り廊下を楽器を持って小走りに往来する部員達の生き生きした目の輝き、講堂に並べられた粗末な椅子に差し込むやわらかい陽差し、岩国独特の外人のお客様達、熊谷先生の大きなゼスチャーの指揮振り、先生がステージから御自分でなさる曲目の解説……

演奏する人も聴く人も心からプレクトラム音楽を楽しむ素晴らしい雰囲気の音楽会でした。

これが本当のアマチャイズムではないでしょうか。私もある音楽会の雰囲気には、心から魅せられたものです。先生亡きあとも、岩国のプレクトラムが更に成長し、健在であることはその当時の方々がその魅力にとりつかれ、今そのリーダーシップをとっていらっしゃるからだろうと思います。

私は一ファンとして岩国高校プレクトラムアンサンブル並びに岩国市民マンドリンクラブが益々発展をし、熊谷先生の精神が後輩の皆様にも脈々として伝わることを、諸兄に心から祈念したいと思います。

20周年おめでとうございます

尾崎 暎石

京都市上京区河原町通今出川下ル
山喜ビル3F フレット楽器オザキ

私は、今の仕事を始める（10年前）まで、マンドリンについてはたゞ一般的な知識しかもっていませんでした。ところが、仕事の関係から各大学クラブの定演やアンサンブル等の演奏会を聞いているうちに、『マンドリン音楽』にどんどん引付けられていってしまったのです。それぞれ団体の持ち味は違うけれど、一人一人の音が一つになり音楽となる楽しさ、マンドリンとギターの合奏、そこには交響楽團とはまた違った『音楽』があるのです。

特にアマチュア団体は、本当に好きな人達ばかりの集まりだけに夫々が一所懸命に音を取り組み、皆の気持が一つになって曲を作り上げて行っているように思います。聞いていてその情熱がこちらに伝わって来るのです。

また、塩見氏（フィオレンティーのリーダー）、川口氏（第2回ソロ・コンクール優勝者、現在西独在住）、そして新井氏（第4回ソロ・コンクール優勝者、岩国市民MCメンバー）等と

お付き合いさせていたゞくようになり、ソロの魅力にも引かれるようになりました。と同時にマンドリンの「音」も段々と判って来たように思います。マンドリンもギター同様表板の厚味、指板の厚さ、コマの位置、弦の張り具合等が一寸でも違えば音は変ります。マンドリンにも“顔”があり、その顔を見れば大体の音が判るようになりました。特にオールドマンドリンは、顔を見ればこれは鳴るか鳴らないか見当がつくのです。良い顔のものは音を出さなくても、いつまでも眺めているだけで飽きません。マンドリン音楽からはじまって、マンドリンという楽器自体とも離れられなくなってしまったようで、渡欧した時でも、歩いていて素晴らしいオールドに出会った時は最高で、何もかも忘れて買ってしまうのです。

新井氏とのお付き合いから、岩国市民マンドリン・クラブのメンバーの方々とお知り合いになり、定演を聞かせて頂くようになって何年になるでしょうか。毎年定演を聞かせて頂く度に、前述したアマチュア独特の良さの中から生まれる「音楽」に心和むものを感じて帰って来ます。

一口に20周年といっても、色々の立場の人達の集まりであるだけに、練習、人間関係等大変だったろうと思いますが、これからも一つの目的—マンドリン音楽の追求—に向かって心を一つに、より一層頑張って頂きたいと思います。たゞ“マンドリン音楽”という殻にとじこもらず、少しでも時間があれば他の分野の音楽を聞く機会を作つて欲しいと思います。それがまた、自分達の目的への糧になると思います。

最後になりましたが、岩国市民マンドリン・クラブの益々のご発展とメンバーの皆様のご健康をお祈りし、今後とも素晴らしい演奏を拝聴させて頂けるのを楽しみに致しております。

岩国の人々と

塩見一郎

〒614 京都府綴喜郡八幡町男山吉井2-9

私が大学に入りマンドリンを手にし始めた頃、一年先輩に広兼さんという美しい音を出されるマンドリニストがおられました。一年後ムニエルメトードの規定範囲をパスし合奏に加えてもらった頃、一年後輩に三浦繁子さん、右手首のしなやかなテクニシャンが入つて来られました。同志社マンドリン（SMD）での活動はこの二人の優れたプレーヤーに刺激を受けながら共に勉強し合宿し定演をし、よい想い出を持った訳です。演奏旅行で岩国を訪れたことが特に印象深く残っています。S39年8月満員の暑い市立体育館であったと思います。この演奏会を高島氏、新井氏をはじめ後年知り合い今では得難い楽友となつた人々に聴いていただいていた事を数年たつて知つたのでした。

卒業後の活動の中で次に知り合つたのはS42年森脇清子さん。京都の華頂短大MCの黄金時代を築いた人で、メンバー70数名を容し技術的にもかなりの水準だったと思います。S43年秋高島信人、和久本忠史氏が同短大を訪れられ初めてお目にかゝつたのでした。練習場で高島氏作曲「星陰の中で」を氏の指揮で弾き歌つた事を想い出します。

岩国の人と云えばやはり新井義悠氏。彼と岩高同期の藤沢幸昌氏と共に知り合いました。藤沢

氏がS43年その頃私が所属していたエルマノM・Oに入会して来られたのです。独奏曲にとても熱意を持っておられ、現在チルコロのメンバーである丸山氏、私、新井氏と彼の四人でソロジョイントを行なうことになりました。そもそもフィオレンティーノの始まりがこの辺にある訳で、藤沢氏は私にとてもよい機会を与えてくれたことになります。

翌44年夏 I C M C 定演に参りました。曲目に鈴木先生のものが多かったように思いましたが、O B市民団体として着実に活動されている様子をうかがい、自分も京都で頑張らねばと内心強く思ったものでした。この当時の会長富沢氏、現会長の三浦孔司氏、コンマスの山添氏をはじめ幹部の皆様にご面識をいたしました。当夜高島氏宅にお世話になり色々語りました。氏の作曲故熊谷先生追悼曲のテープを聴かせていたいた事を印象深く覚えております。

新井氏の事に戻りますがS45年よりフィオレンティーノが活動を始め彼は仕事の都合で東京に行くまでの5年を1stマンドリンを担当し、定演、レコーディング、岩国・高松などへの演奏旅行等多くの音楽活動と共にし、その後もメンバーの一員として独・協奏曲など活動に参画していました。私は多くのマンドリニストを知りましたが、新井氏ほど魅力溢れる演奏をする人は居ません。左指の安定度に加え正確なピッチングと極めて滑かなトレモロ、特に耳に残っている曲はチルコロ3回の「雪の造型」（鈴木静一曲）の“月冴えて”ソロコン1位の「スイスの牧人」他多曲に亘ります。

新井氏の活躍された立命大MCを創設されたのが川本良人氏でありました。氏は現在大阪新音協アルモニアマンドリン合奏団の指揮者として、又マンドリン独奏家として益々安定した活動をされておられます。長年JMUを通じてのお付き合いをさせていたしましたが、その誠実な人柄に加えてマンドリン音楽に対する情熱には並々ならぬものを感じます。

S49年チルコロのメンバーとして山根道広氏を迎きました。東京農大出身の彼は大阪に勤務の傍ら熱心に活動に参加され、チームの貴重な存在となっています。又ご兄弟の優れたマンドリニスト山根義広氏、第5回ソロコン1位の田村隆司等新井氏に続く人たちともその後の色々な機会に交流することが出来るようになりました。そしてS51年岩国の皆様が京都公演を行われました。その素晴らしい演奏に当地のマンドリン愛好者達は一同に目を見張り、その音楽に感動したのです。この交歓を通じ幹事長石川善久氏をはじめ山本氏、中塚氏、藤本氏、山中さん、松重氏など若い幹部の方々と親交を深めることができました。お名前は挙げられなくてもメンバーの方々全員と親しく交歓させていたしましたことを私はもとよりフィオレンティーノ一同どんなに嬉しく思ったことが知れません。

とりとめもなく岩国の人々を思い出すまゝ、述べて参りましたが、考えてみると私のマンドリン活動は初心の頃よりずっと岩国の人々と一緒に勉強して参ったように思います。私の知り合った多くの岩国の人々は皆すばらしい音楽する人ばかり。岩国市民マンドリンクラブ創立20周年本当におめでとうございます。これからも伝統を守り斯界の発展のために大いに意義ある音楽活動を続けてゆかれますことを切に願っております。

コーヒーの香り

田 中 克 佳

〒739-06 大竹市玖波 7-5-6

昭和52年8月14日、岩国市民マンドリンクラブの定期演奏会で、司会を終え、場末の喫茶店で一杯のコーヒーをすすり、タバコに火をつけようとしてすったマッチの炎の中に、私はなつかしい故熊谷幹雄先生のまなざしをみて、ふと30年前を思い出した。

それは、戦斗帽に背のうをせおい、ゲートルをまいて通学していた昭和22、3年頃、極端な物不足の中から、ハーモニカ・ギター・マンドリン・ウクレレ・トライアングル・アコーディオンなどの楽器をもちよって集まった私たち岩中ハーモニカ・アンサンブルは、熊谷先生の熱のこもった指導をえて、ようやく音楽することの素晴しさに目覚めはじめていた。

宇部の渡辺翁記念館や、旧山口経専講堂でのコンクールや演奏会は、怖くまた楽しみであった。とりわけ、演奏が終ったあと、熊谷先生のお話をききながらごちそうになるうどんやコーヒーは格別の味があった。

それは、前髪がパラリとほつれ、度の強い先生のメガネの奥のギョロ目が、私たちをにらみつけ、タクトが折れんばかりに演奏に熱中されている時とは、まるで別人のような熊谷先生なのだ。そんな時の先生は一ワセダのマンドリン・クラブ時代、靴のうらをみがいてステージにあがったとか、足でリズムをとるのは下品だからしないようにとか、品のいい兄貴という感じであった。

たしか、宇部の渡辺翁記念館での演奏会からの帰途だったと思うが、氷雨の降る肌寒い夕暮れ徳山駅前の食堂の二階に、岩中ハーモニカ・アンサンブルのメンバー全員が、先生につれていってもらい、コーヒーをごちそうになった時だった。妙に色の黒いこげくさいコーヒーを前にして、熊谷先生はこういわれた。

これは、コーヒーではなくて、コーヒーのようなものだ。日本は戦いで敗れ、食べものさえ十分にないのだからやむをえないとは思うが、これを何でつくるかわかるかね。これは、われわれが寄せ集めのおんぼろ楽器で、なんとかほんものの音楽を創りだそうと苦労しているのと同じように、わずかばかりのコーヒーの豆に、たくさんの黒大豆を入れて強く煎りお茶を入れるようにして出した代用コーヒーなんだ。

今、われわれがもっている楽器は、古くてもおんぼろでもほんものなんだ。メンバーのひとりひとりがそれを最大限に活かして、その力を結集すれば、必ず、ほんものの音楽を創りだせるのだ。これからも、がんばってくれたまえ。さあ、遠慮なく召し上れ……。

それから、10数年たったある日、岩高プレクトラム・アンサンブルを、私の勤務先である中国放送のスタジオに迎えた。

後輩たちの演奏も、そして、楽器も、今や、ほんものであり、指揮台の熊谷先生のタクトは、ますます円熟していた。おぐしには白いものがめだちはじめてはいたが、依然として若々しく力のこもったものであった。

スタジオの副調整室の片隅で、担当のディレクター氏とともにききいっていた私は、いつのま

にか、10数年前のメンバーであった頃に帰ってしまっており、演奏に熱が加われば加わるほど、先生のきびしい目が怖くなっている自分に気付いて……昔に、想いをはせていた。

演奏が終り、プレクトラムの後輩たちが、昔のアンサンブルのかすかな臭いを残して去ったスタジオで、今、録音したばかりのテープをボリウム一杯にしてきいた。

担当のディレクター氏が、熱いコーヒーを運んできてくれた。

「アルハンブラの想い出」が流れる。——コーヒーの香り——音楽——みんなほんものだった。

岩国市民マンドリンクラブの定期演奏会司会のため、時折ステージにあがる私は、後輩たちの精進の賜物であるほんものの音楽に酔い、帰途に飲む一杯のコーヒーに、先生の想い出をかみしめているにちがいない。

わが国マンドリン音楽の歴史と 岩国プレクトラム音楽の30年

J M U顧問 鳥井諒二郎

〒701 京都市南区唐橋羅城門町41

岩国市に於けるマンドリン音楽が三十年の発展の歴史を閲して、この夏岩国市民マンドリンクラブは第二回記念定期演奏会を、その発祥の原点ともいるべき岩国高校プレクトラム・アンサンブルが第三回定期演奏会を催し、次いで記念誌「岩国プレクトラム三十年史」がこの度刊行されるに至りましたことは、まことに御同慶の至りであります。またわが国マンドリン音楽界にとりましても裨益するところ多く、真に慶賀すべきことと言わねばなりません。ここにまず御祝詞を呈し、今後の御発展を祈る所以のものであります。

考えますに、わが国マンドリン音楽の歴史はもうその内に百年になるのではないかと考えられます。といって、現在はどれ位になるのか詳しいことは判らないのですが、およそ八十年にはなるのではないかと思います。人間の歴史のことなので盛衰何れを迎えるにしても、この辺で地方別あるいは団体別それぞれの立場に於て、いろいろと資料の整理をしておかねばならないのではないかでしょうか。既に学生団体の中には立派な冊子を出版しているものもあり、準備中のものもあるように聞いております。ここでは我田引水になりますが、日本マンドリン連盟に於てはこうした面での委員（複数）が専任され、地味な活動を始めております。如上の観点から「岩国プレクトラム三十年史」の刊行はまことに重大な意義をもつものであることを改めて認識し、重ねてその発刊をお祝いする次第であります。

ところで、わが国マンドリン音楽の振興発展に尽した人達の内から次の三氏を特にここに取り上げ、新たに斯界の注意を喚起しておきたいと思います。それは宮田政夫氏、貴家健而氏及び、熊谷 雄氏の三氏であります。三氏ともそれぞれ若くして亡くなられ、その時代年令に違ひはあります、せめてもう十年だけでも長く生きて頂いていたら、斯界にとって更にどんなにプラスになったであろうと、私はいつも考えていることなのです。宮田政夫氏については慶應義塾大学出身の方にお願いして詳しいまとまったお話をきいておかねばならないと思います。貴家健而氏については後輩の私に責任がありますが、「フレット」誌に特集号が出されましたので、同志

主幹であり私にとっては大先輩の伊東尚生先生に改めて深謝せねばなりません。最後に熊谷幹雄氏についてここではもう何も言う必要はないでしょう。本記念誌で詳細に述べられていることと思いますが、今後更に関係諸兄姉によって氏の精神が受け継がれ強調されんことをお願いして止みません。

終りに臨み、重ねて岩国マンドリン音楽興隆三十年の歴史を祝福し、今後の御発展をお祈り申し上げます。

52・9・20夜

故熊谷幹雄氏とみどり会

故熊谷先生の竹馬の友 三浦 武人

〒741 岩国市川西1-3-4

岩国プレクトラム30年史が刊行されるに至りましたことは、誠に御同慶の至りであります。

熊谷氏の播かれたプレクトラムに付いては、本誌で各方面から言及されると思いますので、氏の発起で結成されました「ミドリ会」について書き記しましょう。

昭和8年夏、熊谷氏の発起で近所の学童を音楽で情操教育をすることを目的として「みどり会」と名命結成されました。氏の学生時代、春・夏・冬の年三回帰省中、毎週土曜日の夜、熊谷氏の部屋に近所の極く親しい音楽好きの学童（男子3年生位から6年生まで）10数名が参集し、ハーモニカを主として他に打楽器（タンバリン、カスタネット、トライアングル）等をもって、軽快なマーチ曲を氏の指揮、指導のもと約3時間の練習をしておりました。ハーモニカ、打楽器は全て熊谷氏が自費にて調達し、各人に支給されました。その後当初の10数名以外に多数の参加希望者がありましたら、部屋への収容の関係から断ったこともしばしばありました。

昭和10年8月まで色々な行事を繰り返し、ミドリ会は順調に発展しました。この発展の陰に御母堂様の音楽に対する理解と、色々な面に対しての御協力があったことは忘れられません。

この間の行事としては、昭和9年8月、ミドリ会員の演奏で毎朝6時、清泰院の境内にてラジオ体操を実施しました。この時の参加者は老若男女約50人位でした。又発表演奏会を昭和9年8月と12月の2回、昭和10年8月の計3回開催しました。

以上が熊谷氏の学生時代の音楽活動の一端です。これ以降は皆様方が御存知の岩中ハーモニカアンサンブルそして岩高プレクトラムアンサンブルへと続く訳です。

熊谷幹雄先生のこと

旧岩中同期生 村井一露

〒740 岩国市砂山町1-2-21

岩国高校に「岩国高校プレクトラム・アンサンブル」のあることを、私が知ったのは、私の作詞で、吉田矢健治氏が作曲の“岩国高校応援歌”が出来た昭和43年7月のことである。

この応援歌を、その発表会の日に間に合わせく、一所懸命指導して下さったのが、今は亡き熊谷幹雄先生であったことを、あとで聞き、私はひどく心を打たれた。つまり先生指導のもとに、その歌が、どうにか岩国高校生の若い心に植えつけられつつあったのだそうである。

熊谷先生得意のマンドリン音楽の楽しさと、それによって人間性の向上を図ることを目的とした、このプレクトラム音楽のもつ無限の芸術性を、精力的に追求しておられた心構えに、今更ながら私は敬服する。

その応援歌は、今、母校で、別名“五橋の桜”と呼ばれ、生徒の間で、ひろく愛唱され、かつて甲子園でも歌われたことは、作詞した私の、最も光栄とするところだ。

そして何にもまして、私の忘れることが出来ないのは、応援歌の発表会を、まじかにひかえた或る日突然、熊谷先生には、岩国国立病院に入院、重い病気に苦しめられることになったことであった。私は吉田矢氏と2人で病床を見舞い、残念そうだった先生の顔が、今だに眼前に浮んでくる。

吉田矢氏（旧岩中卒）は、現在キングレコード専属の一流作曲家であるが、そのマンドリンの手ほどきは、熊谷先生であり、吉田矢氏が明治大学に進んでからは、古賀正男氏にバトンを渡されたのである。

その上、私は、旧制岩中で熊谷先生とは、5年間席を並べて学んだクラスメートで、色々考えると、先生と私は、何か不思議な糸で結ばれていたような気がしてならない。

熊谷先生ありせば、今回の記念定期演奏会も、さぞかし、よろこばれたに違いないと思う。

靈前の灯を絶たず通夜明け易き 一露

は、10年前の告別式で、熊谷先生に捧げた忘れる事の出来ない、私の弔句の1つである。

(医師・岩国市砂山町1丁目住)

記念誌発行にあたつて

東洋工業マンドリンクラブ 白 石 英 夫

岩国市民マンドリンクラブから教わること、吸収することが非常に多く、今後共マンドリンを愛好する者にとって鏡となっていくことを期待しております。

岩国市民マンドリンクラブと東洋工業マンドリンクラブの関係は、何といっても合同演奏ではなかったかと思います。それまでにもいろいろと交流はあった事を記憶しておりますが鮮明になっておりません。この時に両方の橋渡し役としての安田君の存在は非常に大きかったことをあげなければなりません。またこの合同演奏会を機会にその後の演奏会への出演をさせてもらった事は、我々東洋工業マンドリンクラブにとっては大きな転機とも言えます。合宿場での厳しい練習やマンドリン音楽に対する情熱を肌で感じることができました。我クラブにとっては見習う点が非常に多かったです。又練習の合い間や練習後の雑談などにも人間的なふれあいを感じとれたのです。ただマンドリンを合奏するだけでなく、人間的な繋がりの中から皆が集まって一つの大

な目標に向かって全力を出しきっていることがすばらしいと思えたのです。我クラブを振り返ってみると、新しい部員が加わってはおりますが、男性のほとんどが岩国市民マンドリンクラブとの演奏会に参加し、いろいろな影響を受けマンドリンの良さを身をもって体験した人達といえます。この事を考えてみると、岩国市民マンドリンクラブとの継がりが我クラブに大きな影響をもたらしてくれた事を嬉しく感じていることです。

一方他に目をやりますと、中国地方を代表するマンドリン団体として、常にマンドリン界を引っ張ってこられ、増え活躍されていることは、マンドリンを愛好している私達にとって、非常に嬉しいことであり、自分達もそうありたいと思っております。

又近年の活動は全国的になり、東京公演、京都公演を始めとして、日本マンドリン連盟によるソロコンクールにおいても連続第一位の入賞者を出されたことがレベルの高さを証明しておりますが、この人達だけでなく、すばらしい奏者が沢山おられることが岩国市民マンドリンクラブを支えていることと確信しております。

岩国プレクトラム30年史の発刊を祝す

岩国市文化協会会長 伊藤 正一
〒741 岩国市川西3-3-54

先日、浦武克さんが見え、このたび「岩国プレクトラム30年史」を発刊するので岩国市文化協会長として序文を書いてほしい、というご依頼があった。大抵のことならめくらへびにおじずで引き受けてしまうのだけど、音痴の私が音楽史の序文を書けば、そのことだけでその辺から失笑が聞こえそうなので、とっても駄目ですよ、とおことわりした。

ところが、文化協会長として、といわれてみるとハタと困った。音楽部門は文化協会の有力部門なのである。そのうえ、浦さんの気魄に押されて、それじゃあ何とか書いて見ましょう、ということになった。

音痴の私も、小学校や旧制中学校の低学年のころにはハーモニカを手放さず、例の数字の入ったハーモニカ用の楽譜で旅愁や六段を得意になって吹いた時代もあった。中学の1、2年に音楽の時間があり、柔道の河内先生が担当しておられた。当時の気風に音楽は付帯的な感じがあり、したがって楽譜の読み方もほとんど学ばなかった。そのことは今日まで私の心残りの一つになっている。

昔読んだ本の中にあったことだが、ある外国の有名人に「あなたはもし絶海の孤島に流されるようなことになった場合、二冊の本の所持を許されたら何と何を持って行きますか」という問いに、「聖書とベートーベンの楽譜です」という答えであったのを記憶している。当時、聖書のことは理解できたが、楽譜については大きなショックを覚えた。練達の士はあのオタマジャクシを見るだけで絶妙な楽の音を聞き得るのか、という驚きであった。

「言葉の生まれる前に音楽とそれに伴う踊りがあった」というのが、人間の文化の誕生を想うときの私の感慨であるが、いまも変わっていない。芸術が美の追求であり、美の基本理念が調和

(ハーモニー) あるとすれば、もろもろの芸術部門の中で音楽の占める役割の大きさは、私のような門外漢にも素直に理解できる。わからぬままに見る絵画と同じように、わからぬままに聞く音楽が時として私の魂をゆさぶり、涙の出るほどの感激を与えてくれるのは、本来人間自体にそれを受け入れる素質があるからであろうと理解している。

この文を書くに先立って熊谷幹雄先生の「岩高プレクラム・アンサンブルの歩み」を読ませていただき、偉大な指導者があつてこそ立派な集団が出来て行くことを眼の醒めるような思いで拝読したことでした。一口に30年史というけれども、一人一人の嘗々とした努力の積み重ねによって今日があることを改めて見直すよい機会であり、この編史の意義の大きさを讃えたい。編集にあたられた多くの方々のご努力に深い敬意と感謝の言葉を贈って次第である。

昭和52年中秋

「岩国マンドリン30年史」に寄せて

コムラード・マンドリン・アンサンブル

もう2年前になります。岩国市民マンドリンクラブにお願いし、わざわざ遠い所私達のステージにお呼びして、一緒に演奏していただいたのは。

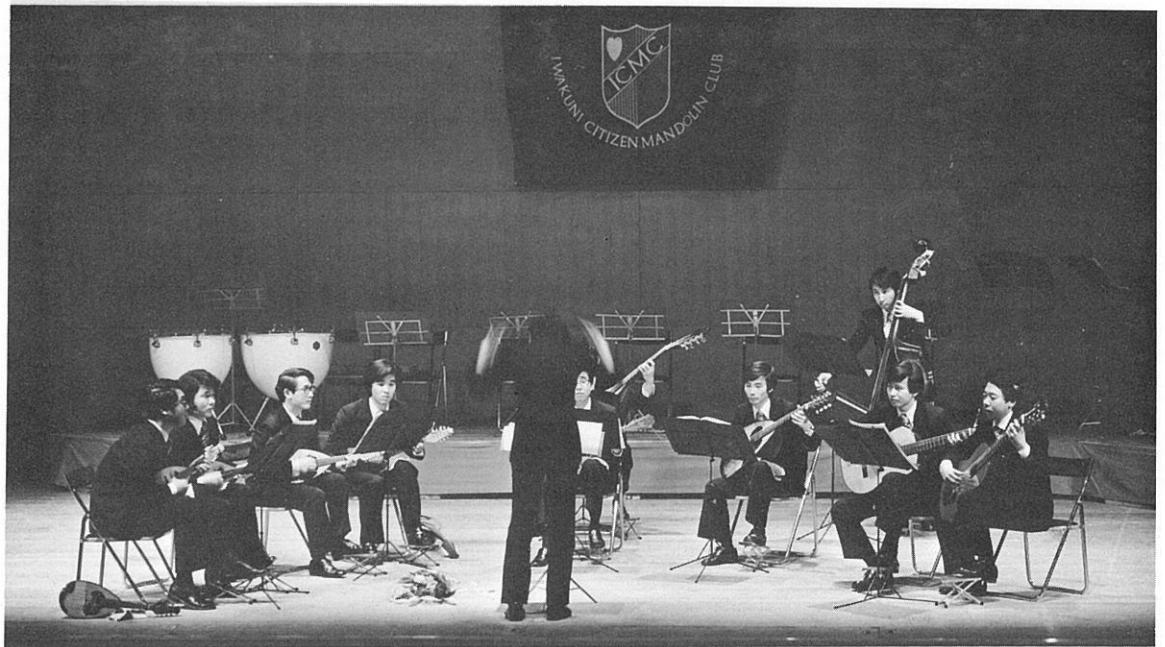
私達コムラード・マンドリン・アンサンブルは、結成後一年を過ぎたヨチヨチ歩きの状態でしたので、演奏技術はもちろん、何から何まで非常に勉強させられる事ばかりでした。

私達の部員各々もまた、マンドリンが好きでたまらない、音楽が好きでたまらない、という事にかけては人並みではないと自負してはいたのですが、貴クラブ員の方々と合宿をともに過ごし、それだけではない、もっと大きな、もっと大切なものがある事を私達に教えていたゞきました。「人の和」と申しましょうか、1人1人の個性が完全に燃焼し、そしてぶつかり合う。そこにすばらしい和ができるいるのを、私達はどんなに羨ましく思った事でしょう。

お聞きしますと、30年前より「岩国高校マンドリンクラブ」という形で活動を開始され、そのO Bを中心いて「岩高プレクラム・ソサエティ」さらに「岩国市民マンドリン・クラブ」へと御発展の一途を巡られた、との事。そして、これまでには、数百名の方々の言葉に尽せぬ御苦労があった、との事。現在では広く岩国市民の団体として、全市民の心の糧とさえなっている事。

私達は「音楽」はもちろん「人の和」というものが、一朝一夕にして出来上がるるものでない、という事を改めて知らされる思いでした。そして、これは私達にはまねのできそうもない程、すばらしい、そして驚くべき事だと思っております。

これからもマンドリンの灯を燃やし続け、人の灯をともし続け、私達のよき師であられん事をお祈りして、「岩国マンドリン30年史」刊行のお祝いとさせていただきます。



岩国市民マンドリンクラブ京都特別演奏会 京都府立文化芸術会館 1976. 3. 21



岩国市民マンドリンクラブ京都特別演奏会 京都府立文化芸術会館 1976. 3. 21

定期演奏会プログラム



第1回 1950年6月25日(日) 13:00~ 横山講堂

第1部

1. 合奏
円舞曲 伊太利の花
2. 独唱 (山本政江)
嘆きのセレナータ
3. 独奏 (佐伯史郎)
セレナータ第2番
4. ピアノ独奏 (西野若美)
ソナチネ第1番
5. ギター三部合奏
雨だれの踊り
美しきモレナ
6. 合唱 (岩高混声合唱団)
美しき碧きドナウ

第2部

- | | | |
|-----------|---------------------------------------|-------------|
| K. ヴェルキー | 放浪 | 池ヶ谷 一郎 |
| トセリ一 | 西班牙狂想曲 | サルヴェテ |
| 平山 英三郎 | 松島音頭 | 山田耕作 |
| クーロー | ピアノ独奏
銀波 (米田美那子) | ワイマン |
| 池ヶ谷 一郎 | 独唱 (多賀谷輝枝)
わが宿 | ショーベルト |
| アテルラ | ギター独奏 (賛助出演・村本新一)
ワルツ
アラビア風の狂想曲 | カノー
ターレガ |
| J. シュトラウス | 合奏・合唱
幻想曲 麦祭 | M. マチョッキ |

第3部

☆ アコーディオン独奏 (三戸健史)



第2回 1950年12月3日(日) 13:00~ 横山講堂

第1部

1. 合奏

序曲 イ長調	K. ヴェルキー
組曲 支那の印象	吉田矢 健治
2. マンドリン独奏 (佐伯史郎)

セレナータ第3番	平山 英三郎
----------	--------
3. ギター三部合奏

淡き光に	E. ドナード
ラ・タンブラン	J. E. ラモー
4. 合唱 (岩高混声合唱団)

アヴェ・マリア	アルデカルト
眠りの精	ドイツ民謡
アンニーローリー	スコット
- ☆ アコーディオン独奏 (特別演奏 三戸健史)

2つのギター 他	
----------	--

第2部

5. 合奏

幻想曲 水車場のはとりにて	クーレ
6. マンドリン独奏 (吉岡良三)	
海辺の思い出	平山 英三郎
7. 独唱 (多賀谷輝枝)	
帰れソレントへ	クルティス
マリア・マリ	カープア
8. 合奏

幻想曲 ムーア人のグラナダ	ガルシヤ
☆ 箏曲 (特別演奏 衛藤公雄外)	
希望の曲 他	



第3回 1951年6月17日(日) 13:30~ 横山講堂

第1部

1. 合奏

序曲 山嶽詩

サルヴェテー

2. 合奏

春のノスタルジア

武井守成

青えんどうの踊り

前田正

3. ギター三部合奏

逝く春を想う

伊藤翁介

4. 合奏

山の曲

フィグリオリニイ

ミレーナ

M. マチョッキ

5. 合唱(岩高男声合唱団)

さつきの野辺

ジルヘル

なつかしのヴァージニア

アメリカ民謡

狩人の合唱

ウェーバー

☆ アコーディオン独奏(三戸健史)

クシコスボスト

ボルブタ

ラ・クンパルシータ

6. マンドリン独奏(吉岡良三)

ボレロ

ブッシュロン

7. 合奏

民謡「木曾箇」に基づく小狂想曲 池ヶ谷一郎

8. 独唱(大藤絹枝)

私の太陽

麦打ち

乾杯の唄

9. 合奏

幻想曲 村の祭典

ジュリアン

☆ アコーディオン独奏(三戸健史)



第4回 1951年11月11日(日) 13:30~ 横山講堂

第1部

1. 合奏

秋の哀傷

平山英三郎

人形のワルツ

玩具の兵隊の行進

2. 合奏

「秋三題」初秋の唄

武井守成

第2部

落葉の精

軒訪るゝ秋雨

3. ギター三部合奏

私の大いなる心

カステルラノス

7. 合奏

序曲 嬰へ短調

K. ヴェルキー

ゼネヴィアボルカ

バーク

8. ギター独奏(清水力)

ワルツ

カノー

4. マンドリン独奏(吉岡良三)

愛の喜び

ババレロ

9. 来春卒業生による五部合奏

ミリタリー・マーチ

シューベルト

5. 合奏

西域より

川崎貞利

10. 独奏(大藤絹栄)

ラ・スピニョラ

キアラ

フニクリ・フニクラ

デングザ

6. 合唱(岩高混声合唱団)

夜明けの森

リントル

11. 合奏

組曲 牧場にて

ジュリアン

春來たりぬ

メンデルスゾーン

☆特別演奏

・合唱(山パル合唱団)

ステンカラージン

ロシア民謡

☆特別演奏

・合唱(帝人合唱団)

村の婚礼

ハーモニカ

ハーモニカ独奏(三戸健史)

美しき青きドナウの流れ

モーメント・ミュージカル

・アコーディオン独奏(三戸健史)

ガボット

詩人と農夫

トルコ行進曲

ヘンデル



第5回 1952年11月2日(日) 13:30~ 横山講堂

第1部

1. 合奏
第三前奏曲「秋の譜」 平山英三郎
2. ギター三部合奏
雨だれの踊り 池ヶ谷一郎
美しきモレナ アテルラ
3. 合奏
夜曲 H. フンゲルランド
微風 小池正夫
4. ギター独奏(本田彪)
アルハンブラの思い出 ターレガ
5. 合唱(岩高女声合唱団)
故郷の秋に 福島淳
川 橋本国彦

第2部

6. 合奏
峠 鈴木静一
ミルタリア マチヨッキ
7. 六重奏(来春卒業生による)
落葉の精 武井守成
荒城の月 変奏曲
8. ギター独奏
幻想曲(ブランツオリーの主題) 平山英三郎
による)
9. 独唱(大塚経子)
サンタルチア イタリエ民謡
私の太陽
10. 合奏
朝鮮の印象 武井守成
11. 合奏(東洋紡岩国工場M・Oと
岩高プレアン合同)
序曲 イ長調 K. ヴェルキー

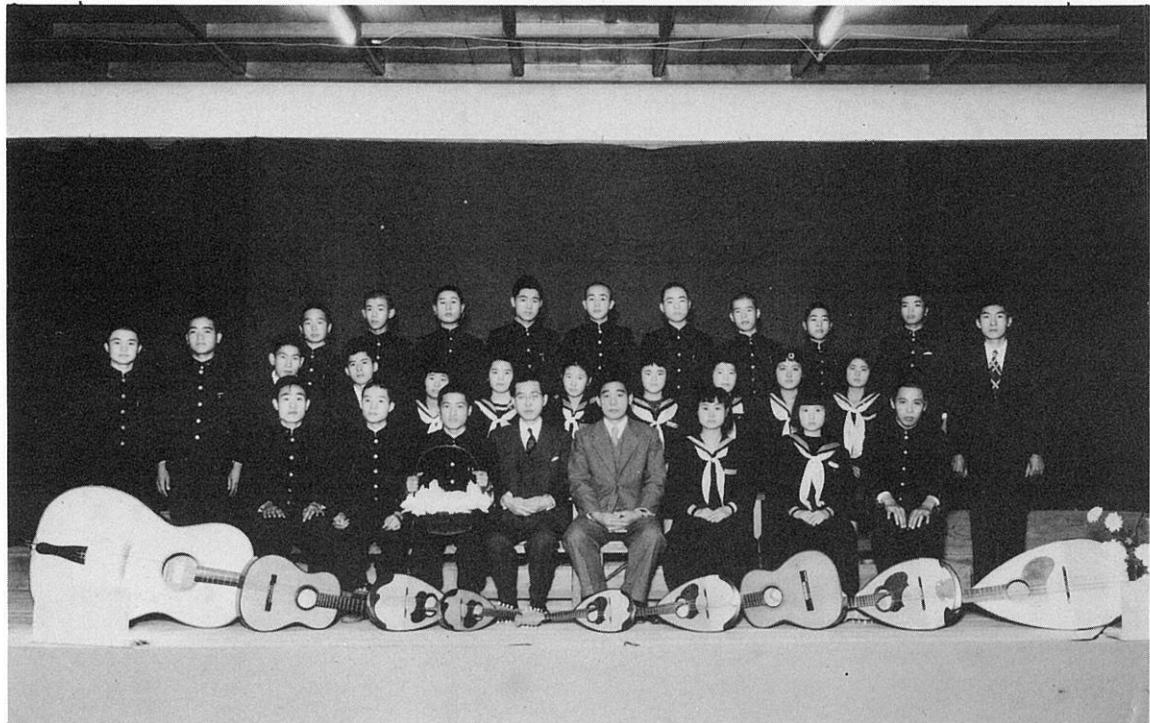
第6回 1953年11月25日(日) 13:30~ 横山講堂

第1部

1. 合奏
序曲 山嶽詩
2. 合奏
秋三題
初秋の唄、落葉の精、軒訪るゝ秋雨
3. ギター三重奏
淡き光に
4. マンドリン独奏(三浦孔司)
舞曲 二短調
5. 合奏
毬つき遊び
クシコスの郵便馬車
6. 合唱(岩高混声合唱団)
春の鐘
若者よ
スオミ歌

第2部

7. 合奏
サルヴェッティー
8. 独唱(中川孝夫)
サンタルチア
アヴェマリア
9. ギター独奏(吉岡史雄)
西班牙小夜曲
アルハンブラの思い出
10. 四部合奏(来春卒業生による)
甘き哀愁
マンドリニストの行進
11. 合奏
古戦場の秋
組曲 西班牙の印象
(行列、セレナータ、オレンジの木の下で、ボレロ)
12. 合奏
下総院
ロシア民謡
パリシウス



第7回 1954年11月7日(日) 13:30~ 横山講堂

第1部

1. 合奏
- 序曲 小公女
2. 合奏
- マズルカ・セレナーデ
- 放浪
3. ギター三部合奏
- 通りゃんせ
- 雨だれの踊り
4. マンドリン独奏(三浦孔司)
- 野にて
5. 合奏
- 幻想曲 風車小屋の下にて
(アランドール舞曲、愛の誓い、嗚咽の涙、翼の唄)

第2部

6. 合唱(岩高混声合唱団)
- 大空の
- 村の婚礼
7. 合奏
- イタリーの花
8. 独唱(大塚経子)
- 赤とんぼ
- 子守唄
- 浜辺の唄
9. 四重奏(来春卒業生による)
- 秋の哀傷
10. 合奏
- 幻想曲 ムーア風のグラナダ



第8回 1955年11月6日(日) 13:30~ 横山講堂

第1部

1. 合奏

行進曲 学友

阿部英昭

2. 合奏

寝つき遊び

中野二郎

糸杉の林にて

サルトリー

3. ギター合奏

マンドリンを持った男

(伊藤翁介)

4. 二重奏 (中村和夫, 藤中英機)

愁思

池ヶ谷一郎

5. 来春卒業生による合奏

ミレーナ

マチヨッキ

6. 混声合唱 (岩高混声合唱団)

サンタクロース

風に寄す

第2部

7. 合奏

序曲 嬰へ短調

K. ヴェルキー

8. マンドリン独奏

海辺の思い出

平山英三郎

9. 五重奏

たそがれ

武井守成

10. 合奏

組曲 牧場にて

ジュリアン

11. 合奏

セヴィラの碧空

マチヨッキ



第9回 1956年11月18日(日) 13:30~ 横山講堂

第1部

1. 合奏

- マンドリン行進曲
序曲 ガベラ
2. 合奏
第三前奏曲 「秋の譜」
3. ギター合奏
美しきモレナ
4. マンドリソ独奏 (宇野康夫)
ソルベークの歌
5. 四重奏
行進曲 英雄
放浪
6. 混声合唱 (岩高混声合唱団)
かやの実
聖史曲

カ ン ナ
ガランティー

平 山 英三郎

ア テ ル ラ

グ リ ー ク

ガ ル ガ ノ
池ヶ谷 一 郎

第2部

7. 合奏

- 序曲 イ長調
8. マンドリソ独奏 (平岡昌憲)
ボレロ
9. 来春卒業生による合奏
民謡「木曽節」に基づく小狂想曲 池ヶ谷 一 郎
10. 合奏
伊太利の花
11. 合奏
序曲 水車小屋の愛人達 マ チ ョ ッ キ



第10回 1957年11月24日(日) 13:30~ 横山講堂

第1部

1. 合奏
- 英雄行進曲
- 秋三題
- 初秋の唄、落葉の精、軒訪るる秋雨
- 感傷のマズルカ
2. ギター合奏
- 淡き光に
- ラ・タンブラン
3. マンドラ独奏(藤田正雄)
- たそがれ
4. マンドリン三重奏(福田勝, 山添修志, 山本建)
- ナポリ(タラントラ)
5. 来春卒業生による合奏
- ミルタリア
6. 合唱(岩高混声合唱団)
- あられふりける
- アヴェマリア

第2部

7. 合奏
- C. ムニエル
- 武井守成
- 古戦場の秋
8. 独唱(下島綾子)
- カロミオベン
- 乾杯の歌
9. ギター独奏(山本建)
- ワルツ
10. マンドリン無伴奏独奏(福田勝)
- 夜の鐘
11. 合奏
- 序曲 バグダッドの太守
12. 合唱
- 大幻想曲 麦祭(男声合唱つき)マチョッキ
(黎明、楽しき目醒め、麦の唄、祭りの後)





第11回 1958年11月23日(日) 13:30~ 横山講堂

第1部

- | | | | |
|-----------------------|----------|----------------------|--------|
| 1. 合奏 | | 第2部 | |
| マンドリニストの行進曲 | メッザカーボ | 7. 合奏 | |
| マンドリニストの円舞曲 | メッザカーボ | ルイ15世のメヌエット | メッザカーボ |
| 2. 合奏 | | 小夜曲(第1楽章) | モーツアルト |
| 放浪 | 池ヶ谷一郎 | 8. 男声四重唱 | |
| 「月の砂漠」を主題とする小幻想曲(赤城淳) | | バルカンの星の下に | ロシア民謡 |
| ペルシャの市場にて | ケテルビ | ステンカラージン | " |
| 3. ギター合奏 | | ヴォルガの舟唄 | " |
| 美しきモレナ | アテルラ | ともしひ | " |
| 2つのギター | ホーリック | 9. ギター独奏(村岡政美) | |
| 4. 四重奏 | | セレナーデ | シューベルト |
| 雪の夜道 | 川崎貞利 | 10. マンドリン無伴奏独奏(山添修志) | |
| 冬の花 | ブッシュロン | 愛の喜び | パバロッロ |
| 5. 来春卒業生による小合奏 | | 11. 合奏 | |
| 秋の哀傷 | 平山英三郎 | 序曲 イタリーの花 | ヴェルキ |
| 可愛いい召使い | メッザカーボ | 12. 合奏 | |
| 6. 混声合唱 | | 序曲 水車小屋の愛人達 | マチヨッキ |
| 菩提樹 | シューベルト | | |
| 羊飼いの歌 | メンデルスゾーン | | |
| ふるさと | 小山章三 | | |



第12回 1959年10月18日(日) 13:30~ 岩国労働会館

- | | | |
|---------------------------------------|--|-------------------|
| 第1部 | 7. ギター合奏
オリエンタル・ダンス
荒城の月 | (斎藤 勇)
(郷田 政次) |
| 1. 合奏
校歌
序曲 イ長調 | 8. 来春卒業生による小合奏
ミルタリア
マンドリン行進曲 | マチヨック
カーンナ |
| 2. 合奏
秋三題
初秋の唄、落葉の精、軒訪るる秋雨 | | |
| 3. 合奏
古戦場の秋 | 9. 合奏
序曲 小公女 | ハーデー |
| 4. 独唱(山内正樹)
帰れソレントへ
オオ・ソレ・ミオ | 10. 合奏
組曲 スペインの印象
(行列・セレナータ・オレンジの木の下で・
ボレロ) | ブッシュロン |
| 第2部 | 11. 合奏
序曲 天国と地獄 | オッフェンバック |
| 5. ギター独奏(巖城信行)
愛のロマンス | | |
| 6. マンドリン二重奏(川本良人、森見哲二)
愁思
麓を指して | | |



第13回 1960年10月9日(日) 13:30~ 横山講堂

第1部

1. 合奏

マンドリニスの行進曲
マンドリニストの円舞曲

メッザカーポ

5. ギター三部合奏

2つのギター
美しきモレナ

ホーリック
アテルラ

2. 合奏

秋の唄

阿部英昭

6. 来春卒業生による小合奏

マズルカ・セレナータ
愛のセレナータ

ムニエル
(川崎貞利)

渚にて

小島克己

第3部

秋の哀傷

平山英三郎

7. 合奏

ミリタリ・マーチ

シューベルト

3. 混声合唱(岩高混声合唱団)

かもめに寄す

ともしひ

ロシア民謡

牧場の我が家

ペンシルバニア・ポルカ

アメリカ民謡

マギー若き日の歌を

第2部

4. マンドラ独奏(富永勝之)

田園詩調

平山英三郎

8. 合奏

黎明序楽

静一

9. 合奏

組曲 牧場にて

ジュリアン

(朝・牧場・羊飼いの夢・祭りの思い出・
帰り)



第14回 1961年10月8日(日) 13:30~ 横山講堂

第1部

1. 合奏
マンドリン行進曲
瀬戸の風景
2. 合奏
案山子の歌
毬つき遊び
3. 合奏
イタリーの花

第2部

1. マンドリン独奏(塩屋浩二)
シシリアの思い出
2. ピアノ独奏(片岡佐蓉)
リナタOP.14 No2 第3楽章
3. 合唱
ジェッセ・ジェームズ
野は奏ぞ
バビロンの河辺にすわり

第3部

1. 合奏
カ ン ナ
(小島克己)
 2. 来春卒業生による小合奏
愉快な鍛冶屋
ピヤダル・ポルカ
 3. マンドリン四重奏(ヴィタリーチオ・マンドリーノ)
オーソレミオ
コーレイン・グラード
村の娘
マリア・マリ
 4. 合奏
古戦場の秋
 5. 合奏
田園詩曲
- ヴェルキー
(赤城淳)
(平山英三郎)
イタリ-民謡
" "
" "
" "
" "
" "
" "
" "
" "
- 小池正夫
平山英三郎



第15回 1962年10月14日(日) 13:30~ 横山講堂

第1部

1. 合奏

山彦の歌

(小島克己)

初秋の唄

武井守成

軒訪るる秋雨

"

落葉の精

"

3. ギター独奏

プランツォリーの主題による幻想曲 平山英三郎

4. 四重奏

たそがれ

武井守成

旅愁

池ヶ谷一郎

2. 合奏

白鳥の湖(情景)

チャイコフスキイ

大幻想曲 風車小屋のもとにて クーレ

(ファランドール舞曲、愛の誓い、嗚咽の涙、
翼の唄)

第3部

1. 合奏

序曲 バクダッドの太守

ポイワルディイ

小交響曲 マンドリンの群れ

ブルッコ

2. 来春卒業生による小合奏

楽しき夢

マルティーノ

スペイン狂想曲

サルヴェッティ

3. 賛助演奏

ギター独奏(小島紘一郎)

合奏(岩高ブレクトラム・ソサイティー)

四重奏(アンサンブル・ヴィタリチオ・マンドリーノ)

4. 合奏

序曲 ニ長調

ヴェルキー

ローラ

ラヴィトラーノ

第2部

1. ギター合奏

愛のロマンス

スペイン民謡

ラ・タンブラン

ラモー

ラ・クンパルシータ

ロドリゲス

2. マンドリン独奏(若松一)

野にて

平山英三郎

第16回 1963年10月13日(日) 13:30~ 横山講堂

第1部 合奏

1. 校歌	平井 康三郎	組曲「藏王」より どっこ沼、早春
クシコスの郵便馬車	H. ネック	第3部
2. 木の実は踊る	武井 守成	8. マンドリン独奏 ビザリア
虫の踊り	"	C. ムニエル
秋の哀傷	平山 英三郎	9. 四重奏 スパンッシュ、ワイゼン
3. ペルシャの市場にて	ケテルビー	O. シック
「月の砂漠」による小幻想曲	(赤城 淳)	F. フランチア
第2部		10. 来春卒業生による小合奏 荒城の月 (平山 英三郎)
4. 二重奏(竹本政生・藤井利和)	池ヶ谷 一郎	郷愁 (〃)
愁思	鈴木 静一	11. 合奏(岩高ブレクトラム・ソサイテ) イタリア民謡集
麓を指して		第4部
5. マンドラ独奏(新井義悠)	ノヴァノヴィッチ	12. 合奏 イタリーの花 (ヴェルキ)
ドナウ河の涙	E. メッザカーポ	カバレリア・ルスチカーナ間奏曲 (赤城 淳)
6. 四重奏		序曲 レナータ H. ラヴィトーノ
アンダンテとポロネーズ		13. 合奏 クワイ河マーチ (赤城 淳)
7. ギター合奏		史上最大の作戦 "
おてもやん(藤井利和)		聖者の行進 "
タブー(森脇祥文)		
☆ 賛助演奏(岩高混声合唱団)		
沼		
わが胸に		



第17回 1964年10月4日(日) 13:30~ 横山講堂

第1部

1. 合奏

- | | |
|----------|----------|
| 校歌 | 平井 康三郎 |
| オリムピア行進曲 | M. マチョッキ |
| 月光円舞曲 | メラーナ |
2. 合奏
組曲 果物の舞曲 武井 守成
(苺のパヴァーナ・柘榴のボレロ・
オレンジのホタ)

3. 合奏

- | | |
|------------------------------------|----------|
| 日本民謡集 | (池ヶ谷 一郎) |
| 茶切節, お江戸日本橋, 会津磐梯山,
木曾節に基づく小狂想曲 | |

第2部

1. 混声合唱 (岩高混声合唱団)
カスミの歌
来よ春
2. フラメンコギター独奏 (贊助・小島紘一郎)
3. マンドリン独奏 (広兼智之)
第一タランテラ スカラ
4. ギター合奏

月光 ソル

淡き光に ドナート

美しきモレナ アルテラ

新内流し 日本俗曲

5. 来春卒業生による小合奏

幼き日の想い出 赤城 淳

ロシア民謡 黒い瞳 中川信良

咲 鈴木静一

6. O・Bメンバーによる合奏

第3部

1. 合奏

カルメン前奏曲 (赤城 淳)

ドナウ河の鐘 "

2. テノール独唱 (河岡二雄)

海に来たれ (赤城 淳)

さらばナポリ "

遙かなるサンタルチア "

マンマ "

3. 合奏

序曲 水車小屋の娘達 M. マチョッキ

ミレーナ "



第18回 1965年10月10日(日) 13:30~ 横山講堂

第1部	AUNE AMIE	(M. マチョッキ)
1. 合奏	3. ギター合奏	
陽気な一隊	M. マチョッキ	2つのギター
嘆きの天使	"	エスパニアカーン
古き農民のポルカ	リッターノ	4. 新メンバーによる合奏
2. 合奏		ラ・アマカ
初秋の唄	武井守成	泉のはとり
軒訪るる秋雨	"	5. 来春卒業生による合奏
雨とコスモス	"	荒城の月幻想曲
3. 合奏		海の少女
案山子の唄	阿部英昭	第3部
三つの思い出	"	1. 合奏
わらべ唄	(池ヶ谷一郎)	組曲 蝦夷 鈴木静一 (朝, 牧場の歌, 秋の声, 黄昏の帰還)
第2部		
1. ギター独奏(河岡二雄)		2. 合奏
ASTURIAS	I. アルベニス	序曲 口短調 K. ヴェルキー
2. 四重奏		序曲 幸福の星 G. フレンド
SALUONS LES AMOURS	M. マチョッキ	



第19回 1966年10月9日(日) 13:30~ 横山講堂

第1部		郷愁	(平山英三郎)
1. 合奏		3. 新メンバーによる合奏	
序曲 HEIMREISE	K. ヴェルキー	イタリー民謡集	(平山英三郎)
2. 合奏 -日本の旋律-		4. 来春卒業生による合奏	
落葉の精	武井守成	CIELITO LINDO	スペイン民謡
茜	"	ESTUDIANTINA	ワルトイフェル
空をゆく	"	5. 合奏 (O・Bメンバー賛助演奏)	
3. 合奏 (謹んで小池氏の靈に捧ぐ)		第3部	
微風	小池正夫	1. 合奏 (フォークソング)	
古戦場の秋	"	PUFF	(赤城淳)
第2部 -アンサンブル-		バラが咲いた	(")
1. ギター三部合奏		序曲 悪魔の飾り	M. マチョッキ
オリエンタルダンス	(斎藤勇)	組曲 牧場にて	ジュリアン
月の砂漠	(宮島寅次)	(朝, 牧場, 羊飾の夢, 祭りの思い出, 帰り)	
2. マンドリン・アンサンブル			
糸杉の林にて	サルトリイ		



第20回 1967年10月15日(日) 13:30~ 横山講堂

第1部		コザックの子守唄による幻想曲	中川信良
1. 踊る小花	武井守成	花	(服部正)
2. 秋の哀傷	平山英三郎	第3部	
3. 日月譚の歌	鈴木静一	1. 合唱(岩高混声合唱団)	
4. ローレライ・バラフレーズ	ネスバドバ	島節	宮地良和
第2部		千曲川の水上を恋ふる歌より「水上」	小山章三
1. マンドリン独奏(小林義行)		2. O・Bによる合奏	
夜の鐘	ババレロ	古戦場の秋	小池正夫
2. ギター独奏(繁沢秀治)	リンゼ	ミレーナ	M. マチョッキ
雨だれ		序曲 イ長調	K. ヴェルキー
3. ギター三部合奏		第4部	
トルコ行進曲	ベートーベン	1. 序曲 小公女	P. ハーディ
宵待草	(宮島寅次郎)	2. 序曲 詩人と農夫	スッペ
久しき昔(変奏曲)	ハイネスベイリー	3. 幻想曲 ムーア風のグラナダ	M. ガルシャ
4. 新編成による小合奏		(前奏曲、ポアブデイル王のグラナダへの訣別)	
ロシア民謡集	(佐伯亮)	アラビア風小夜曲、舞曲と終曲)	
5. 来春卒業生による小合奏			





第21回 1968年10月13日(日) 13:30~ 向山校舎体育館

第1部 合奏

- | | | |
|-----------------|---------------|---------------------------|
| 1. 行進曲 小鳩 | G. Lavitorano | (赤とんぼ~夕焼け小焼け) |
| 2. 初秋の唄 | 武井 守成 | -来春卒業生による小合奏- |
| 3. 前奏曲 秋の譜 | 平山 英三郎 | 5. 草原 (平山 英三郎) |
| 4. 幻想曲 悪魔と天使 | H. Bert | 6. 鈴懸の径 (中川 信良) |
| 5. 序曲 水車小屋の愛人達 | M. マチョッキ | -OBによる合奏- |
| 第2部 -ギター- 三部合奏- | | 7. 軽音楽 |
| 1. L PLEA | J. V. Weter | 第3部 |
| 2. 愛のロマンス | スペイン民謡 | 1. 序曲 山嶽詩 M. S. Salvetti |
| 3. 2つのギター | (繩田 政次) | 2. ギリシャ風主題による序曲 N. Lavdas |
| -新編成による小合奏- | | 3. 序曲 第4番口短調 K. Wolki |
| 4. 童謡集 | (中川 信良) | |



第22回 1969年10月12日(日) 13:30~ 岩高体育馆

第1部

1. 古戦場の秋
2. 荒城の月による幻想曲
3. 案山子の歌
4. 小行進曲

小池正夫
服部正
阿部英昭
武井守成

1. マンドリン独奏(桂喜樹)

平山英三郎

海辺の思い出

2. ギター独奏(富永隆行)

アルベニス

アストリアス

3.O・Bによる演奏

村の娘

夢見る想い

海に来たれ

第2部

1. ギター三部合奏

ペルシャの市場

ドンナ・ドンナ

2. 新編成による演奏

幼き日の思い出

3. 来春卒業生による演奏

赤いサラファン

鈴懸の径

(斎藤勇)

(浜坂福夫)

(赤城淳)

(平山英三郎)

(中川信良)

第4部

1. 過ぎた日の熱情

川崎貞利

2. 組曲 山的印象

鈴木静一

(夜明け、山行く歌、高原の午后、麓をさして)



第23回 1970年10月11日(日)

13:30 ~

岩高体育馆

第1部

1. ロシア民謡による幻想曲
「ボルガは流る」

鈴木 静一

黒いオルフェ

禁じられた遊びより

Buree, アメリアの誓い

2. 狂詩曲 海

"

第3部

3. 劇的序曲 細川ガラシャ

"

5. 新編成による演奏

序曲 魅惑島

コック

第2部

4. 映画音楽へ御紹介

鉄道員

太陽がいっぱい

魅惑のワルツ

旅情のボレロ

モア

6. 来春卒業生による演奏

序曲 バグダッドの太守

ボイワルディ

7. O・Bによる演奏

第4部

8. 音楽物語「朱雀門」

鈴木 静一



第24回 岩高音楽祭 1971年9月26日 (日) 晴天 17時開演

第24回 1971年9月26日

13:30 ~

岩高体育馆

第1部

- 1. 過ぎた日の熱情 川崎 貞利
- 2. 序曲 イ長調 K. ヴェルキー
- 3. 組曲 山の印象 鈴木 静一

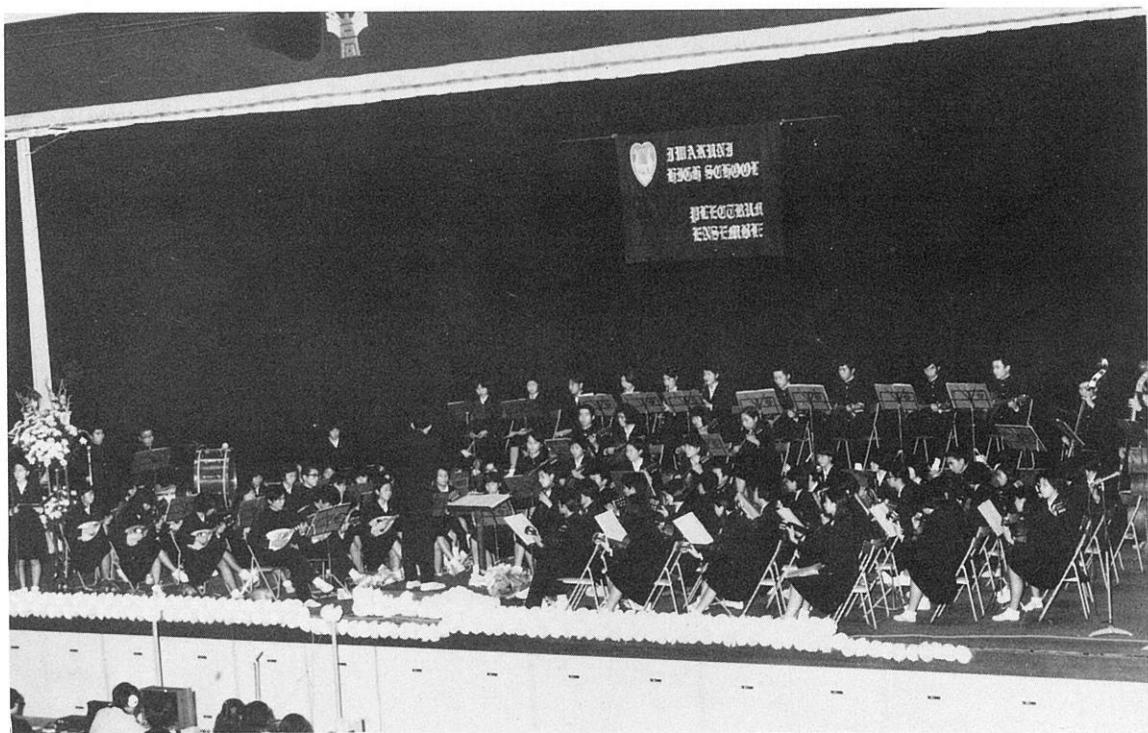
第2部

- 4. ロシア民謡 (高島 信人)

第3部

- 5. アンデルセン童話による諱詩と
マンドリンオーケストラ 鈴木 静一

人魚



第25回 1972年10月10日

13:30 ~

岩高体育館

第1部

- | | |
|----------------------|-------------|
| 1. 序曲 | I. Bittelli |
| 2. オラッティオ兄弟とクリアッティ兄弟 | D. Cimarosa |
| 3. 孤 独 | T. Koschat |
| 4. 帰 郷 | K. Wölki |

第2部

- | | |
|------------|---------|
| 5. 幻想組曲 銀河 | 尾 園 勝 善 |
| 6. 組曲 秋の詩 | 高 島 信 人 |

第3部

- | | |
|------------------------------------|---------|
| 7. アンデルセン童話「氷姫」より
水の精に魅入られたルディー | 鈴 木 静 一 |
|------------------------------------|---------|

第26回 1973年9月24日

13:30~

岩高体育馆

第1部

1. 田舎のまつり
2. 劇的序曲 細川ガラシャ
3. 宮沢賢治の童話による幻想曲
鹿踊りの夜

第3部

- | | |
|------------|-------------|
| G. Filippa | 5. 組曲 山の印象 |
| 鈴木 静一 | 6. 大幻想曲 幻の国 |
| 小林 清一 | |

鈴木 静一
鈴木 静一

第2部 (来春卒業生による演奏)

4. 日本のメロディー
 - 荒城の月
 - 叱られて
 - 月の砂漠
 - 童謡集より
 - 浜辺の唄



一 巻 本 載

ト音楽の世界へ

第27回 1974年9月23日

13:30 ~

岩高体育馆

第1部

1. 聖ジュスト
2. 雪
3. エサーブの嘆き

I. Bittelli
G. Lavitrano
N. Lavdas

第2部

4. カーペンターズ メロディー
トップ・オブ・ザ・ワールド
遥かなる影
イエスタデー・ワンス・モア
シング
- (尾園勝善)

第3部

5. 音楽物語「朱雀門」

鈴木 静一





第28回 1975年9月24日(水) 13:30~ 岩高体育館

第1部

- 1. 祝典序曲
- 2. グラウコの悲しみ
- 3. 序曲 第4番口短調

R. クレブス
A. マツヨーラ
K. ヴェルキ

第2部

- 4. ポセイドン
- 5. 「アルハンブラの想い出」を主題とする変奏曲

尾園勝善
高島信人

第3部

- 6. 町の祭典
- 7. 交響詩 比羅夫ユーカラ

V. フィリッパ
鈴木静一

第29回 1976年9月15日

14:00~

岩高体育馆

第1部

- | | |
|------------|----------------|
| 1. 序曲 イ長調 | K. Wolki |
| 2. ハンガリーの旅 | Menichetti |
| 3. ロンド | R. Calace |
| 4. ローマ・トリノ | D. De Giovanni |

第2部

- | | |
|-----------------|-------|
| 5. ホリデー・イン・ジャパン | 服 部 正 |
|-----------------|-------|

第3部

- | | |
|--------------------------|-------|
| 6. スペイン第1組曲 | 鈴木 静一 |
| 7. ロシア民謡による幻想曲
ボルガは流る | 鈴木 静一 |



第30回 1977年9月23日

14:00~

岩高体育馆

第1部

- | | | | |
|----------------------|---------------|--|-------|
| 1. 序曲 RENATA | H. Lavitrano | 3. ある愛の詩 | F. レイ |
| 2. LAST STAGE 最後の舞台 | F. Menichetti | 4. 「西部開拓史」より
牧場の我が家 イギリス民謡 | |
| 3. NOTTURNO 夜曲 | S. Copertini | 5. 「ジーザース・クライスト・スーパースター」より
私はイエスがわからない A. R. ウェバー | |
| 4. Suite Marinaresca | Amedeo Amedei | | |
- 海の組曲

第2部

- | | | | |
|--------------------|-----------|------------------------|-------|
| 1. 「世界残酷物語」より More | R. オルトラーニ | 1. 祝典序曲 栄光への道 | 鈴木 静一 |
| | N. オリヴィエロ | 2. 大組曲「日本」第三組曲
東への道 | 清水 保雄 |
| 2. ロミオとジュリエット | N. ロータ | | |

第3部





第1回 1958年8月24日(日) 19:00~

東共用講堂

第1部

1. 組曲「ロシア」より第一軍隊行進曲 鈴木 静一
2. 毯つき遊び 中野 二郎
3. スパニッシュワイゼン シック
4. 民謡「木曽節」に基づく小狂想曲 池ヶ谷 一郎
5. 組曲「支那の印象」 吉田矢 健治
3. ギター合奏 夜明け フィルボ

第2部

1. 二重奏 ロンド R. Calace ラ・クンパルシータ ロドリゲス
2. 四重奏 SERENATA № 2 平山 英三郎 ロマンス(弦楽セレナータより) モーツアルト
- SOUVENIR DE CATANE レオナルディー 4. マンドリン合奏(フレクトラム・アンサンブル) 序曲 山嶽詩 サルヴェティ

第3部

1. ポルガマーチ ロシア民謡
2. ピヤ樽ポルカ ブラウン
3. 水色のワルツ 高木 東六
4. 愉快な銀冶屋 ペーター
5. ミレーナ マチヨッキ

第 2 回 1959年8月23日(日) 19:00~

東共用講堂

第 1 部

1. 校歌紹介 平井 康三郎
2. 序曲 イ長調 ヴェルキ一
3. ともしひ ロシア民謡
4. 游にて 小島 克己
5. ルンバ「砂漠の哀愁」 平山 英三郎
6. 「月の沙漠」の主題による小幻想曲 (赤城 淳)

第 2 部

マンドリン三重奏 (ワルツ 3題)

1. 君の心を
2. 恋のかほり
3. キッス・ミイ・アゲイン

ギター合奏

1. 淡き光に
2. 美しきモレナ
3. ただ一度
4. ベサメムーチョ

マンドリン二重奏

1. 野にて

第 3 部

1. 小さい花 シドニー・ベシエ
2. 南国土佐を後にして 武政英策
3. 民謡調間奏曲 平山 英三郎
4. フォスター名曲集 (平山 英三郎)
5. 序曲 バグダッドの太守 ポイワルディー



第3回 1960年8月13日(土) 18:30~ 共立講堂

第1部

1. 山嶽詩 サルヴェティー
2. 「月の砂漠」の主題による小幻想曲 (赤城 淳)
3. ミレーナ マ・チョッキ
4. ペンシルバニア・ポルカ (平山 英三郎)
5. 勝利者に栄光あれ マ・チョッキ
6. ボルガ・マーチ 口シア民謡

第2部

1. マリネラ 吉田矢 健治
2. キエン・セラ
3. 黒いオルフェ
4. 死ぬほど愛して
5. 岩国よいとこ
6. 茶切り節 池ヶ谷 一郎
7. 会津磐梯山
8. お江戸日本橋
9. 木曽節による小狂想曲



春季臨時演奏会 1961年3月23日(木) 18:30~ 共立講堂

第1部

- | | |
|----------------|-------|
| 1. 春陽 | 小池 正夫 |
| 2. 蝶々を主題とする変奏曲 | 服部 正 |
| 3. 春のノスタルジア | 武井 守成 |
| 4. 踊る小花 | " |
| 5. 青豌豆の踊り | 前田 正 |
- 第3部(四部合奏)

1. ゴンドリエ
2. 旅愁
3. 南国の夜

第2部

- | | | |
|-------------|------------|----------|
| 1. 太陽がいっぱい | ニノ・ロータ | 4. 海の少女 |
| 2. 真珠採りのタンゴ | サントス | 第4部 |
| 3. 鉄道員 | カルロ・レスティケリ | 1. セレナータ |
| 4. リトル・ボーイ | ニーサ | 2. 峠 |

モーツアルト
鈴木 静一

第5部

- | | |
|------------|-------|
| 1. 西域 | 川崎 貞利 |
| 2. 序曲 嬰へ短調 | ヴェルキ |



第4回 1961年8月19日(土) 18:30~ 共立講堂

第1部(合奏)

1. マンドリニストの行進曲
2. 軍隊行進曲
3. 放浪
4. 序曲 水車小屋の愛人達

第3部(四部合奏)

1. メッザカーポ
2. 鈴木静一
3. 池ヶ谷一郎
4. マチョッキ
1. オ・セニオリータ
2. ジブシータンゴ
3. ダーク・アイズ
4. 2つのギター

第2部(合奏)

1. 南国の夜
2. 真珠採りのタンゴ
3. 聞かせてよ 愛のことば
4. 浜辺の唄

第4部(合奏)

1. 序曲 バグダッドの太守
2. 古戦場の秋
3. ムーアのグラナダ
1. ポイワルディー
2. 小池正夫
3. ガルシャ

第5回 1962年8月18日(土) 18:30~

共立講堂

第1部

- | | |
|-------------|----------|
| 1. マンドリンマーチ | C. カンナ |
| 2. クシコスボスト | H. ネック |
| 3. 山狹 | 川崎貞利 |
| 4. 序曲 イ長調 | K. ヴェルキー |

第2部

- | | |
|-------------|---------|
| 1. 五ツ木の子守唄 | (中川信良) |
| 2. 白鳥の湖 | (服部正) |
| 3. 月の砂漠 | (中川信良) |
| 4. カチューシャの唄 | (平山英三郎) |

第3部(四重奏)

- | |
|-------------|
| 1. スペインの花 |
| 2. タンゴ・ロジタ |
| 3. ジプシー・タンゴ |
- 第4部
- | | |
|------------|----------|
| 1. 序曲 ニ長調 | K. ヴェルキー |
| 2. アンダルーズ | P. ラコム |
| 3. 序曲ミルタリア | M. マチョッキ |



第 6 回 1963年8月17日(土) 18:30 ~

労 動 会 館

第 1 部

- | | |
|----------------|----------|
| 1. 序曲 イ長調 | K. ヴェルキー |
| 2. 序曲 小公女 | ハーデー |
| 3. 聖者の行進 | (赤 城 淳) |
| 4. クワイ河マーチ | " |
| 5. 史上最大の作戦のマーチ | " |

第 2 部

- | | |
|--------------|---------|
| 1. 箱根山 | (赤 城 淳) |
| 2. ラ・クンパルシータ | ロドリゲス |
| 3. 夏の想い出 | (赤 城 淳) |
| 4. マカレナの聖女 | " |

第 3 部 (四重奏)

- | | |
|---------------|---------|
| 1. ピギン・ザ・ピギン | (赤 城 淳) |
| 2. マイ・ショール | " |
| 3. パーフィディア | " |
| 4. マイアミビーチルンバ | " |

第 4 部

- | | |
|---------------------|---------|
| 1. 序曲 魅惑島 | コック |
| 2. 「月の沙漠」の主題による小幻想曲 | (赤 城 淳) |
| 3. 組曲 スペインの印象 | ブッシュロン |
- (行列、セレナータ、オレンジの木の下で、ボレロ)



第7回 1964年8月14日(金) 18:30~ 労働会館

第1部

- | | |
|-----------------|----------|
| 1. オリンピア行進曲 | M. マチョッキ |
| 2. 黎明序楽 | 鈴木 静一 |
| 3. 童謡集「幼き日の想い出」 | (赤城 淳) |
| 4. サンタ・ルチア | (平山 英三郎) |
| 5. 黒い瞳 | (中川 信良) |

第2部

- | | |
|------------------|--------|
| 1. ヴィオレッタに捧げし歌 | (赤城 淳) |
| 2. ワシントン広場の夜は更けて | " |
| 3. ジャングルドラマ | " |
| 4. スワニー | " |

第3部

- | | |
|---------------|--------|
| 1. ラ・クンパルシータ | (赤城 淳) |
| 2. ラ・コンパルサ | " |
| 3. マリヤ・マイ・オウン | " |
| 4. マラゲーニヤ | " |

第4部

- | | |
|----------------|----------|
| 1. セレナータ | モーツアルト |
| 2. 糸杉の林にて | サルトリ |
| 3. 序曲 水車小屋の愛人達 | M. マチョッキ |



第 8 回 1965 年 8 月 14 日 (土)

18:30 ~

市 体 育 館

第 1 部

1. 序曲 ロ短調 K. ヴェルギー
2. 序曲 イ長調 "
3. アディオ・アディオ
4. ノ・ノ・レタ
5. チャオ・チャオ・バンビーナ
6. ロマンティカ

第 2 部

1. ウナセラディ東京
2. 何も言わないで
3. 城ヶ島の雨
4. Never on Sunday
5. よさこい節
6. エスパニア・カーニ

第 3 部

1. 新内流し
2. タブー
- (四重奏)

1. 鈴かけの径
2. 寒い朝
3. そよ風

第 4 部

1. ベルシャの市場
2. 古戦場の秋
3. 序曲 レナータ

ケ テ ル ビ 一
小 池 正 夫
ラ ヴ イ ド ラ ー ノ

1965 年 3 月 同窓会



第9回 1966年8月14日(日) 18:30~ 労働会館

第1部

- | | |
|--------------------|-------------|
| 1. POESIA ALPESTRE | M. Salvetti |
| 2. 西域より | 川崎 貞利 |
| 3. ミレーナ | M. マチョッキ |
| 4. 序曲 口短調 | K. ヴェルキー |

第2部

- | | |
|--------------------|--------|
| 1. 叱られて | (服部 正) |
| 2. 日本抒情歌集 | " |
| (ヤシの実、夕やけ小やり、七つの子) | |
| 3. エスパニア・カーニ | (服部 正) |
| 4. タブー | (山口吉雄) |
| 5. マカレナの乙女 | (赤城 淳) |

第3部

- | | |
|---------------------------|-----------------|
| 1. Eine Kleine Nachtmusik | W. A. Mozart |
| 2. 序曲 バグダッドの太守 | F. A. Boieldieu |
| 3. ORPHEUS | J. Offenbach |

1966年7月 第5回交歓会





第10回 1967年8月14日(月) 18:30~ 市体育館

第1部

- | | |
|----------------|--------------|
| 1. 序曲 ローラ | G. Lavitrano |
| 2. 序曲 イ長調 | K. Wolki |
| 3. 序曲 水車小屋の乙女達 | M. Maciocchi |
| 4. 古戦場の秋 | 小池正夫 |

第2部

- | | |
|-------------------|--------|
| 1. サウンド・オブ・ミュージック | (赤城 淳) |
| ドレミの歌, エーデルワイス | |
| サウンド・オブ・ミュージック 他 | |

第3部

- | | |
|--------------|---------------|
| 1. ペルシャの市場にて | Ketelbey |
| 2. 白鳥の湖 | J. Chaikovsky |
| 3. 序曲 天国と地獄 | J. Offenbach |



第11回 1968年8月10日(土) 18:30~ 市体育館

第1部

1. 序曲 要へ短調 K. Wolki
2. 愛の喜び マルティニ
3. 「荒城の月」を主題とする
2つのマンドリンの為の変奏曲 服 部 正

第2部

1. 序曲 聖 ジュスト N. I. ピテリー
2. 孤独 T. コスタット
3. 幻想曲 イ短調 高島 信人

第3部

1. 夢のタンゴ
2. 真珠採りのタンゴ
3. タンゴアルヘンタ
4. エルチョクロ
5. マンボNo 5
6. 黒い瞳のマンボ
7. 関牛士のマンボ

第4部

1. 組曲 山の印象 鈴木 静一
2. 序曲 過去への憧憬 フォクト



第12回 1969年8月9日(土) 18:30~ 市体育館

第1部

- | | |
|--------------|-------|
| 1. 黎明序楽 | 鈴木 静一 |
| 2. 日月譜の歌 | " |
| 3. 楽劇 細川ガラシャ | " |

第2部

- | | |
|-----------------------------------|--------|
| 1. 浜辺の唄 | 成田 炳三 |
| 2. ローレライ・パラフレーズ | ネスバードバ |
| 3. 「荒城の月」を主題とせる
2つのマンドリンの為の変奏曲 | 服部 正 |

第3部 (塩見一郎)

- | | |
|-----------|---|
| 1. 村の娘 | |
| 2. 海に来たれ | " |
| 3. オレソミオ | " |
| 4. 夢見る思い | " |
| 5. アルディラ | " |
| 6. ラ・ノヴィア | " |

第4部

- | | |
|------------|-----------|
| 1. 序曲 ニ長調 | K. ヴェルキー |
| 2. 序曲 レナータ | H. ラヴィトロー |



第13回 1970年8月22日

18:30~

市体育館

第1部

1. 峰 鈴木 静一
2. 楽劇 細川ガラシャ "
3. ロシア民謡による幻想曲
「ヴォルガは流れる」 "

第2部

1. 夜のタンゴ
2. 夢のタンゴ
3. マラゲーニア
- 4.マイアミビーチルンバ
5. ベサメムーチョ
6. タブー
7. 花
8. 叱られて

第3部

1. アンデルセン童話による譚詩と
マンドリンオーケストラ

「人魚」

鈴木 静一



第14回 1971年8月28日

18:30 ~

市体育館

第1部

- | | |
|---------------|------------|
| 1. 過ぎた日の熱情 | 川崎 貞利 |
| 2. メリアの平原に立ちて | G. Manente |
| 3. 序曲 ロ短調 | K. Wolki |

第2部

1. マドンナの宝石
2. ワルツ「女学生」
3. 白鳥の湖より 情景
4. 愛の歎び
5. 火祭りの踊り

第3部

1. 音楽物語「朱雀門」

鈴木 静一

第15回 1972年8月19日

18:30~

市体育館

第1部

- | | |
|-----------------|----------|
| 1. 序曲 イ長調 | K. ヴェルキー |
| 2. ギリシャ風主題による序楽 | N. ラウダス |
| 3. 交響詩 比羅夫ユーカラ | 鈴木 静一 |

第2部

- | | |
|--------------------|---------|
| 1. 交響曲 第8番ロ短調「未完成」 | シューベルト |
| 第1楽章 | |
| 2. 交響詩「はげ山の一夜」 | ムソルグスキイ |

第3部

- | | |
|--------------------------------------|-------|
| 1. アンデルセン童話「氷姫」より
「氷の精に魅いられたルディー」 | 鈴木 静一 |
|--------------------------------------|-------|





第16回 1973年8月17日(金) 18:30~ 市体育館
 第1回 同 8月18日(土) 18:30~ 青少年センター
 (広島演奏会)

第1部

- | | |
|------------------|------------|
| 1. 恵まれた結婚 | G. Manente |
| 2. 楽劇 細川ガラシャ | 鈴木 静一 |
| 3. 聖ボニファチオのオベルト伯 | A. ヴェルディー |

第2部

- | | |
|--------------|-------------|
| 1. ギター協奏曲ニ長調 | A. ヴィヴァルディー |
| 2. スイスの牧人 | P. モルラッキ |

第3部

- | | |
|-------------------|-------|
| 1. マンドリンオーケストラの為の | |
| 群炎 I, II, III | 熊谷 賢一 |



第17回 1974年8月16日(金) 18:30~ 市体育館

第2回 同 8月17日(土) 18:30~ 郵貯ホール
(広島演奏会)

第1部

1. 序楽 今と昔 G. マネンテ
2. グラウコの悲しみ A. マツォーラ
3. ダンテ序曲 N. リ・カウシ

第2部

1. 合奏協奏曲「四季」より「秋」 A. ヴィヴァルディー
2. G線上のアリア J. S. バッハ
3. ルーマニア狂詩曲第1番 G. ユネスコ

第3部

1. マンドリンオーケストラの為の

ヴォカリーズ

(I) 晓の歌

(II) 街の歌

(III) 夜の歌

熊谷 賢一

2. マンドリンオーケストラの為の

群炎 III

熊谷 賢一



第18回 1975年8月16日(土) 18:30~ 市労働会館

第1部

1. 序曲 イ短調
2. 祈り
3. 夜の印象

G. Claufznitzer (クラウフニッサー)

U. Bottacchiari (ボッタッチャーリ)

D. D. Giovanni (ドン・ドン・ジョ万ニ)

第2部

1. ミュージカルへのお誘い
(サウンド・オブ・ミュージックより)

第3部

1. 狂詩曲 海
2. オアシスにて
3. 交響的前奏曲

鈴木 静一

E. Marti

U. Bottacchiaro



京都特別演奏会 1976年3月21日(日) 18:30~ 京都府立文化芸術会館

第1部

1. Imperia (皇帝) M. Maciocchi
2. Romanza e Bolero ~Nieves~ G. Lavitrano
(ロマンツァとボレロ ~雪~)
3. Oberto Conte di S. Bonifacio A. Verdi
(聖ボニファチオのオベルト伯) (C. Munier)

第3部

1. Preludio S infonico U. Bottacchiari
(交響的前奏曲)
2. Danza delle Lucciole A. Amadei
(螢の舞曲)
3. Ouverture su Temi Ellenici N. Lavdas
(ギリシャ風主題による序楽)

第2部

賛助出演 (チルコロ・マンドリンスティコ・
フィオレンティーノ)

1. 古戦場の秋 小池正夫
2. 線香花火・明滅する広告塔 中野二郎
3. てんとう虫の嘆き 松本譲
- かまきりのり
4. マンドリンオーケストラのため
の一樂章「くもの糸」 田島孝一

第19回 1976年8月15日(日) 18:30~ 市体育館
第4回 同 8月14日(土) 18:30~ 青少年センター
(広島演奏会)

第1部

1. ト調 序楽 D. D. Giovanni
2. モスクワの真昼 D. Berruti
3. 交響的間奏曲 G. Manente

第2部

1. 序奏とファンダンゴ L. Boccherini
2. 愛の喜び G. P. Martini
3. ツゴイネルワイゼン P. Sarasate

第3部

1. 組曲 山の印象 鈴木 静一
2. 平家物語 西海の挽歌 "



第20回 1977年8月14日(日) 18:30~

市体育館

第1部 ICMC 想い出の曲

1. ミレーナ M. マチョキ
2. 楽劇「細川ガラシャ」 鈴木静一
3. グラウコの悲しみ A. マツォーラ
4. メリアの平原に立ちて G. マネンテ

第2部 マンドリンによる "郷愁のメロディー"

1. 丘を越えて
2. 浜辺の唄
3. 荒城の月幻想曲
4. 鈴懸の径
5. 民謡「木曾節」に基づく小狂想曲

第3部 第20回記念ステージ

1. パストラール・ファンタジー 藤掛広幸
 - ☆ 委嘱作品発表
 2. マンドリンオーケストラのためのボカリーズ 第五番
-すばらしい明日のために- 熊谷賢一
- I 青葉の歌
II 君の歌
III 青春
IV すばらしい明日のために



一 般 寄 稿

14世紀

830年卒 三浦孔司

いよいよ最終〆切の迫った10月の中旬、ようやく自分の原稿の筆が取れたかという実感がしています。私の想い出も、年代の差こそあれ、大方の皆様方と同じ部類に入りますが、特徴的な2~3に触れ、大半は、岩国市民マンドリンクラブを主体とした出来事を綴ることによって、学園外の活動の歴史をまとめてみたいと思います。

史上最少の卒業生

私が一年生の時です。例年通り新入生歓迎演奏会が行なわれていたはずなのに、担任の熊谷先生（親しい生徒間では、ミキさんと呼んでいた）は、事ある毎に、今年はプレアン入部者が少ないと言って落胆の繰り返しでした。それもそのはずで、昭24年にプレアンが創立されようやく各パートにバランスがとれ始めた矢先のことであり、2年半にしてもう衰弱するのかと思われたに違いありません。授業中のPRが効を奏してか、夏休みにはやっと数名がオデルをやっている程度でしたので、史上最少の3名の卒業者になってしまいました。

行進曲“若人”

そんなチーム力の合奏ですから、現在のような大曲は望むべくもありません。力量にあった、こじんまりした曲を選んで頂いていたわけで、その中に若人があったのです。

あれは確か2年生の時です。3年生の吉田弘子さんと交代でプリモトップをしていた頃、厳しい練習の合い間に息抜きに「何をやろうか？」と先生に希望を聞かれ何のためらいもなく「若人」と叫んだのがきっかけで、その後事ある度に使われ、先生と私達、部員同志、現役とOBのかけがえのないパイプとなりました。

この曲は、作曲者の赤城さんも忘れかけていた曲だそうですが、私達にとっては、不思議な魅力と魔力があり、まさに一級品の音楽（芸術とは異なる）であって、神がかり的に言えば、ミキさんがこの曲に魂を入れたものだと言えましょう。

プレアン夜明け前

昨年51年3月の京都特別演奏会のご挨拶のために2月に上鉢した時、先方から声をかけて頂いた西村二郎さん（岩国在任昭4~8）が、本誌のメッセージにもありますように、岩国で初めてMC（帝人MC）を作った方ではないでしょうか。厚生活動ですから、直接岩高PEとも岩国市民MCとも繋がりはないのですが、私の老母も若い頃メンバーの方にマンドリンを持たせてもらったと言っていますので、岩国に種を蒔いたお一人に違いありません。

昭8年といえば、熊谷先生が岩中を卒業され早稲田に入学された年です。ご近所に今もご健在の三浦武人さん（この方にもメッセージを頂きました）等と、ミドリ会という合奏団を作つて校外での情操教育に力を入れられたそうですが、この会が後の岩中ハーモニカ・アンサンブルから岩高PEへの伏線となっているのです。そして師が、昭21年母校に赴任されてPEを創設されましたが、15年間については前回の記念誌にご自身で詳しく述べいらっしゃいますし、その後のことは、各年代の方々の寄稿に委ねるとして、岩高PS、同窓会等について回想してみましょう。

岩高プレクトラム・ソサエティ

昭29~37年の間には、色々な名称が出て来ます。岩陽フィルハーモニック・マンドリン・オーケストラ、岩高OBプレクトラム・フレンド、岩国マンドリン同好会等です。これ等はまだ、PE同窓会ないしは岩高PSの組織ができる前とか、確固たる形になるまでの仮の名とでも言えるもので、前回の記念誌の出された昭38年からは統一されたものとなりました。

岩陽PMOは、帝人・東洋紡・岩高・OBによって、つまり熊谷先生の指揮によるお弟子さんのオーケストラですが、活発に続いた5年間も職場の人事異動で衰微していく反面、岩高PEの卒業生は年々が多くなり、帝人の練習の往き帰りや、休みに先生宅で話し込む時等次第に卒業生による舞台での同窓会をやろうという雰囲気ができてきて、夏休みで学生が帰岩する昭33年8月歴史的な第1回定期演奏会が開かれたのです。丁度プレアン創立10周年目の夏の事でした。

岩高プレクトラム・ソサエティ、この懐しい名称は、昭31年卒中村和夫君の発案によるものです。このようにして創立された岩高PSの定演以外の活動は、岩高OBプレクトラム・フレンドとか岩国マンドリン同好会の名称で出演していましたし、先生に連れて帝人・東洋紡・広島のアンサンブル・ヴィタリチオ・マンドリーノの賛助に度々出かけておりました。昭37年に広島の沢村さん等が中心になって結成された広島マンドリン・フェスティバルにも出演していますが、これっきりで何年頃解散されたかは知りません。今では、池永さんの肝煎りで同じような形の広島プレクトラム協会というのがあり、歴史は繰り返しているようです。

同窓会と交歓会

昭30年代の前半と言えば全学連華かなりし頃で、とりわけ、国会議事堂前の警官隊との衝突事件で圧迫死を遂げ、鉄の扉の前に白菊の山に囲まれライトに照らし出された、東大生樺美智子さんの大きな遺影を想い出しますが、私の在学した

工科系大学でもその前後は、毎晩のように討論集会や学校サイドとの交渉が続き、議長団の一員として異状な雰囲気の中での統率と收拾に少なからず身の危険を感じた程で、今も出張のあい間にその辺を歩けばせっぱ詰った自分を見出します。

そんな社会情勢での学生生活であったし、もちろん生来の質なのでしょうが、組織することにえらく関心と興味があり、色々な名前で色々な所で活躍しているプレアンOBの母体を作りたいものと思い、昭35年3月末横山校舎の部室に20~30名のOBと先生に出席して頂き同窓会を発足させました。初代会長は、富沢元生先輩に頼み以来宇部に転勤される昭45年10月初めまで長い間迷惑をおかけしました。特に、先生の亡くなられた昭43~45年は、主帆のなくなった帆前船のように浮んではいるが、どう進むのか弱っている私達を、奥様のご協力で家庭まで開放され、心強いご指導を頂きましたので、現在のICMCが花を咲かせたものだと感謝しています。

先日、妻と資料探しと整理をやっていた時のことで、かって私が書いた同窓会発足趣意書の余部が大分残っていたのですが、何回目かの転勤の時どうやら処分してしまった見つかりません。無ければなおさら欲しくなり、若々しい情熱あふれる文面でしたよと煽られるものだから、ついに懸賞つきとしたのですが、まだ…………。

発足の準備には、現副会長の山添修志君はほか数名の方々と、電報電話局前の珈琲館アローで会則と名簿を作りましたが、会則ははゞ原形のまゝICMCの会則となり、名簿は、その後の各幹事さんご苦労で、昭和39年富永勝之君が編集したものまで私の手許に保存しています。

同窓会発足3年目の昭37年、プレアンとOBは、会としての交流を深め、PEは秋の定演の、PSは夏の定演のリハーサルも併せて行なう案に先生の大賛成を頂き、就職一年目の私は、岡山県北の湯原からせっせと郵便を発信したものでした。そして6月29日第1回目の交歓会が開かれ、フォークダンスに打ち興じられた若々しい先生の姿は、厳格な印象に厚みを加えているようです。

I 5回定演記念誌発刊

その1年前の春、就職したばかりの中村和夫君にせがまれて唯一の春季演奏会を開きましたが、その時2人の間では記念誌の青写真ができ上り、彼は、後輩の清水義章君の献身的な協力を得て苦労の末、昭38年12月貴重な記念誌を発刊してくれました。

この年から、富沢前会長の後を継ぐ昭45年頃までは、私が遠方に勤めていたこともあり私の資料や記録も少ないし、当時の幹事さん達は、今は他地に勤務しているということで、資料の収集も意のまゝにならなかったので、彼等の寄稿に期待致しましょう。

熊谷先生急逝

先生のご逝去に至るまでを少し遡ってみたいと思い、昭32年10月第10回定演のプログラムを開いてみて思いを新たにしたのですが、そこには、先生の大好きなそしてやりたくてたまらない曲がずらりと選ばれていることでした。どうして今までそれに気がつかなかったのでしょうか。秋三題をはじめ、ナポリ、古戦場、夜の鐘、バグダッド、終わりには、合唱つきの麦祭と、メンバーを見てもお気に入りばかり、おそらく10回記念を堪能なさったに違いありません。続いて昭37年10月第15回定演でも三部には大曲を配され、その中のコングレッソは10数年余り前からの垂涎の曲でしたので、その喜びもひとしおだったと思います。

昭38年秋のこと、岡山の山奥に居た私に、NHKの放送コンクールに出たのでラジオを聞いてくれというお便りを頂いたし、この頃は徳山を中心とした職場のマンドリン・クラブ周音連との交流が盛んであったし、RCC-TVやNHK山口TV「150万人の顔」に出演されたりで、東奔西走休むことがないほどのご活躍だったので、岩国市も先生のご活躍を認めるとことなり、昭42年教育委員会は文化功労賞を授与してその功績を称えています。

しかし、もともと体力の無い神経質な先生は無理が重なっていたのでしょうか。

昭43年春、校舎が向山に新築移転すると病床に就かれ、國病に入院されてからは、沢山のOBが集まって広島に採血に行ったり、とにかく、富沢前会長の指揮のもとに慌てふためき、何度もお見舞いに参りましたが、食事は一切とれなくなり衰弱はひどくなる一方のところに梅雨明けの暑さに耐えかねて、ついに7月16日不帰の人となられました。

まだまだやりたい事も多く、とりわけ孝行な先生には、93才のお母さん独りを残して先立たれることは未練であり、無念のことでしょう。



第4回 同窓会

お母さんも昭47年97才で愛息のもとに身まかれ普済寺山に静かに眠っておられます。つい最近、編集委の席に山本芳生君が見つけて持って来てくれたのですが、熊谷先生の最後の胃部のレントゲンと色紙があり、辞世の詩と思われるので、我が子を先に送るお母さんの匂と共に載せておきましょう。

老いらくの春一番に 奮い立つ 今年限りの 猫の声すも

日盛りを 木かけ 逝きませ永の旅

私も辞世を詠む位の余裕をもって三途の川を渡りたいものです。

岩国ブレクトラム・ソサエティ

先生の亡くなられた年の第11回定演は、追悼曲イ長調をローソクの灯で演奏し遺影にスポットをあてる演出もあって、PTAは思わず涙を流したと申します。

こうして私達の集まりの寄り所であった先生を亡くしたことから、以前にも増してサークルは強固になりましたが、いつまでも同窓会の殻に閉籠っていないで、門戸を開いて同好者との交流を深めようということから、賛助出演したり、慰問演奏したり、新井義悠君の仲介でフィオレンティーノ岩国特別演奏会を開催したり、安田英雄君の仲介で東洋工業MCと姉妹縁組等をいたしました。

つまり、昭45～47年は、岩高PSから岩国市民MCへの脱皮中の活動です。とはいえる、思想的には大きな転換の時期ですから徒や愚にはできません。自由刷新の気風を吹き込み、10年余りの精進と蓄積によってサークルはみずみずしく、力強い萌芽は将来の大樹を彷彿とさせるものがありました。曲目もオーケストレーションの大きなものが増えてきましたので、いつも借りていたティンパニーを購入することにしましたが、蓄はなく急遽の一策でティンパニー基金として35名の方から無利子の借金をしてやっと昭47年に購入することができました。

また、同窓会は昭40年頃から岩高PE第20回定演を祝して部室を贈ろうということで定演を有料で行ないましたが、部室は色々と問題があるということで、昭46年、ドラ、チエロを寄贈したのです。

岩国市民マンドリン・クラブ

先の過渡期も、山添修志君、高島信人君、和久本忠史君、田中正充君、沖永匡君、中原悦子さん、兼本静江さん、山根義広君等、枚挙に暇がない程熱心なメンバーによって順調に事は運び、お陰で五日市町に社宅住いをしていた私が、会長の重責を全うすることができたのです。

昭48年、いよいよICMCの登場となるわけですが、同窓会総会で種々討議の末、ブレクトラム音楽の普及発展を考えるなら、呼称も一般市民に判りやすく憶えやすいものにすべきだとする大勢の意見に従って、伝統のブレクトラムを廃したのですが、もちろんプレアンとの関係は変えるべくもありません。したがって、従来の同窓会形式から一般市民を意識した同好の志との帶同による活動に発展的に移行し、地域と密着したサークル活動を目指しながら、近づく数々の歴史的な活動を予感しつつ不安の入り混じる思いで改称いたしました。会則も見直し、当面の方針を市民ベースの活動は一時預けにして、高度な音楽性を追求する（ひらく言えば、演奏面に力を入れる）ものとして益々広域活動を強化しました。

その頃私の頭には、20周年記念のスケッチができ上りつゝあったのです。

そんな中で、昭48年1月8日「亞土」に集った私達は、本格的な他地での単独演奏会を計画したのですが、その時の決断は組織をかけてのものであり、失敗すればもともとなくなる覚悟をしてかゝりました。時の蓄は247千円でした。



第1回東洋工業M.C.合同演奏会

広島公演

こうして決定された第1回広島公演ですから、メンバーもその辺は良く心得ており、聴衆もPTAとは違うのだという認識と自覺をもって、例年の直前の合同合宿のほかに5月頃から臨時の合宿をしたり、自発的にパート別の合宿をしたりで着々と練習を重ねておりました。また当時は、岩国在住のメンバーが随分少なくなった頃で、幹事長と指揮者という二足のワラジを履いた高島信人君は、原動力となって良く働いてくれました。

一方、広島での準備は、山根義広君はチケット関係、私はスポンサー関係を担当したのですが、彼は、余暇の全てを岩

国での練習、広島での諸準備にあて孤軍奮闘真に良くやってくれました。私もこの時は、今年基礎を作つておけば、次からは割に楽にできるものと思って、仕事そっちのけの日も何日かありましたし、一番激しかったのは、真夏の炎天下3日間連続で広島市内を自転車でかけ廻り、ついにくたばって安田英雄君に一日自動車を出してもらった程でした。

初回の公演ですから当然知名度もなく、尋ねるは岩中、岩高のO Bばかり、またまた無理を言って司会をお願いしたR C C アナウンサー田中克佳先輩から、広島の同窓会「五橋会」を教えて頂き、五橋会の幹事になって名簿作成を引受け、作業しながら知らない同窓生にも援助を頼むことも致しました。まるで芝居がかつっていたのですね。

その他、東洋工業M Cや広マン、広島市民M Cの方々にも多大のご協力をいたさきましたので、この機会を借りて御礼申しあげます。また、これだけスポンサーに頼らなければならなかつたのは、200円のチケットでは、到底、会場費、運搬費、印刷費等の諸経費は貯えませんので、せめて、印刷費は広告代でペイするよう予算を設定したからです。

プログラムも、メインに群炎I, II, IIIを配し、従来のものしかもつていなかった私達は、東海地区に新しい音楽活動があることを知り、早速、作曲者の熊谷賢一先生に直接ご指導を仰ぎ、新しい分野に一步踏み込んだのです。また因縁の曲となつた「失なわれた都」は、毎年毎年第一候補に上り、来年は来年こそはと、ついに20周年を迎えてしました。よほど縁のない曲なのでしょう。

お陰をもちまして大成功をおさめましたことは、沢山の方々のご援助ご協力の賜物と感謝しています。

ペナント、プログラムのデザイン等に関しては、共同広告社長佐々木唯夫さん（岩高32年卒）が「任しんさい」と全部考えてくださいました。

もともと広島公演はじめ定演以外は、余力のある時にやろうということでしたが、一旦良い思いをすると止められなくなるのが人情で、昭51年第4回まで連続して開きましたが、第2回は、前年秋のオイルショックの影響で非常に苦しい財政となつたし、第3回はコムラード（東京）と新井君のリサイタルとのスケジュール調整と急成長の歪から、直前に中止となり幻の演奏会となりました。

これからも広島他での演奏会を考えますが、諸般の情勢判断の中で最も大切な事は、メンバーの意志が那辺にあるかをつかむことではないでしょうか。

2人のマンドリン日本一

日本マンドリン連盟主催日本マンドリン独奏コンクールに於て、昭49年9月第4回では新井義悠君が、昭51年第5回では田村隆司君が見事金賞を獲得されました。心からお慶びを申し上げます。新井君は当クラブでも山添君に次ぐ古参で、定演にはプレアン現役時代から欠かしたことなく、大学時代から京都という恵まれた環境の中で精進を重ねて来られました。一方、田村君は、プレアン一年ではチェロを弾き3年でプリモトップになり、ICMCではチェロ、ドラ、2nd, 1stと変り、マンドリンの年数は割合に短かいにもかゝわらず、彼の得意とする狂想的な練習と大阪に転勤してからの研鑽によって今日を得ているわけです。

新井君は、昭和43年第1回には第4位に入賞されて、亡くなられる年の熊谷先生を大喜びさせており、田村君は、先生の追悼演奏会をした3年生という因縁があるわけで、もし先生がご健在なら（追悼したという因縁はないにしろ）どんなにか慶んで下さることでしょう。

これからも、研鑽を積まれるとともに、後進の指導と合奏に活かされるよう切望いたします。

文化功労賞

昭和48年からは、新しい形での広島との交流が始まり、演奏活動に於いては、むしろ広島公演が活動のイニシアチブを取ったといつても過言ではなかったのでしょうか。東洋工業M Cとの合同演奏会・広島プレ協参加、J M U中国支部マンドリン・フェスティバル、和久本忠史君の活躍している岡山G M C、藤本匡孝君が始めたコムラードM E（東京）、京都特別演奏会等それ等の練習を含めると年中無休のスケジュールとなり、時間的、財政的、肉体的によくもやって来たものだと戰慄さえ覚えます。数年の間の活動と成長は目を見張るものがありましたので、歪が現われクラブの運営にも色々と障害が起り、深刻な顛状態が度々ありました。お互いに理解と友情でなんとか乗り切ってきました。

個人的にもさき程のマンドリン日本一が輩出したし、創設以来19年間一度も休むことなく定演を続け、多数の愛好者を育成したこと等が市文化協会から認められ、昭51年11月文化功労賞を受賞するに至りました。



S. 51年度文化功労賞表彰式

記念事業

昭和48年頃から頭に描き初めっていた私は、前回の記念誌発刊の反省から、時間と人手をかけ収集を結集して、できるだけ沢山の人の参加したものを考えていきましたので、第18回の定演の案内旁々記念事業に対するアイデアを募集しました。9月に入ると、チーフに藤本匡孝君を任命して粗案を練って頂き、その後、石川善久君、山本芳生君、山根義広君、中須賀弘明君と私で幾度か打合せを重ね、ICMC幹事会の了承を得ながら京都特別演奏会、交歓会、第20回定演、第30回定演、記念誌発刊を記念事業の一環とすることに致しました。本来なら、岩高P.E.、ICMC、O.B.の三者で進めるべきところ、実質的に活動のできるICMCの幹事会がイニシャチブをとったという説です。

昭51年3月、京都特別演奏会は、フィオレンティーノのリーダーである塩見一郎さんと、フレット楽器店主尾崎暎右さんの熱心なお説いて実現することになりました。決定までには、全メンバーのアンケートをとったり、電話、手紙で打合せたりで、石川幹事長を中心に幹事諸君の盛り上がりと、これまでの成果を発表するのだという全員の意欲によって、京都側の受入れも万全がとられていましたので、演奏面に於いても、団体行動に於いても、申し分のない爽快な気分を満喫することができました。こゝで改めて、先のお二人に衷心よりお礼申しあげます。

またいつの日か、岩国地方でフィオレンティーノの演奏が聞かれる樂しみにしております。

そして、昭52年8月岩国市民MC第20回定演のメインには、20周年記念として熊谷賢一先生に作曲を委嘱しましたが、当初は、鈴木静一先生に、ご自身で非常に興味を示された岩国の怪談「無頭馬の騎士」を題材とした音楽物語を作らうことで進んでおりました。ところが、この怪談は一頁位の超短編であるために、ドラマチックなところが欠けており、音楽物語にならないということから白紙還元となりましたが、真におしいことをいたしました。

一方、岩高プレアンは、昭52年9月第30回記念定演を行ないましたが、三部に校歌を終りに入れた祝典序曲栄光への道を鈴木先生に作曲して頂きました。ICMCからは、打楽器をお祝に贈りました。

独り思うこと

どうしてこんなに夢中だったのか夢中になるのか、自分でも解らない。何ものかさせしむるとしか言いようがない。……故熊谷先生か、青春の1スタイルか、人恋しさか、他に夢中になるものが無いせいか、プレアンの懐藍時代のシミなのか、創立の責任感か、処世感か……プレアン、同窓会、ICMCと聞けば手足が脳が動き出す。

O.B.諸君をみていると、彼等は本当に音楽が好きで好きでたまらないのだなあと感じます。ですから以前は、マネジメントは私がやるから、君達はプレーに専念しなさいと言ったものでした。ところが、どうやらこれは間違っていたようです。

こんな話を聞いたことがあります。薬学部の女子大生が2人で下宿していましたが、或る日掃除をすることになり、一人は手際よく仕事を進めているのに、もう一人の方は怠や塵取りや叩の使い方は知っていても手順が分らず、片隅でボカソと立っていたのだそうです。

うちのクラブでもよく見かけますね。同窓会時代は、新卒業生はお客様として坐っていてもらい、卒業2年目の人々が労力を提供していました。今のが会則の第9条 従来の習慣に従うこととする がこれも指しているのです。

クラブは、営利を目的とせず、利害、権益によって動かされない数少ない場ですから、反面拘束力も弱く、お互の信頼と友情と奉仕によって支えられているわけで、勝手気まゝをしたり、思遺りのないことをしたり、誰かするであろう等と無責任な事をした時から、クラブには隙風が吹き始めることになります。

どこのクラブも「和」とか「協調」とか「ハーモニー」という言葉を使い古し、もっと人の心をつかむ言葉はないのでしょうか。君達は錯覚している。一生懸命くり返し繰り返し、時には喧嘩しながら練習をする。これを間違っていると言っているのではない。それだけミスのない演奏をしたから「和」があると思い込む。つまりミスのない練習をしたからであって、紛うことなくそれは「マンドリン馬鹿」でしかないのです。世の中には、何とか馬鹿が本当に多過ぎる。賢明な諸君なら、本物は何か判るだろう。

また、クラブに対して「何かあるだろう」と思って期待しても何もないことに気がつくばかりで、求めるなら働きかけてみることです。働きかけの度合によって、何かが大きくも小さくにもなりましょう。

今後の活動

20年間を簡単に振り返ってみると

#1～#10 P.E.同窓会、恩師、旧友と合奏を楽しむ、懐古的

#11～#15 集まりの寄り處の師をなくし、どんな事をどうやるか模索しながら演奏会だけは立派に

#16～#20 高度なプレクトラム音楽追求、広域的活動、活動的

ざっとこんなことになります。

これからは、今一時預けにしている市民レベルの活動と高度な音楽活動とを背と腹にした活動が望まれます。市民レベルの活動の目的とするところは、現在一部の人々の間にしか存在しないフレクトラム音楽の理解を広く普及して行くことです。これが難かしく生易しいものではありません。ともすると、プログラムにはプレーヤーの自己陶酔、自己満足の臭がブンブンとする場合が非常に多く、あれでは自分で垣根を作り誰も来てくれないとやっているのと同じだと思います。この市民レベルの活動こそが、現在のクラブがしなければならない急務のような気がするのです。

そして年々若い人の参加を得て順々に新しい考え方でクラブを運営し発展させて頂きたいものです。

最後に、記念誌の発刊にあたり、多数の方々のご協力により想像以上のものが完成したことを心からお礼申しあげます。

戦後の岩国のマンドリン

S.26卒 守田史郎（旧姓 佐伯）

戦後間もなく、食糧難にあえぎながら、城山のふもとにハーモニカの音がひびきだしたのは、何故だったのだろう。無論、熊谷先生のご尽力は言うまでもないが、我々が音楽に傾いた動機の本質はハッキリしない。空腹を一時忘れるためだったのか、それとも、すさんだ心をいやすためのものだったのか。

昭和23年には、ハーモニカに混じってマンドリンとギターの音がきこえるようになり、間もなく、三重奏が少しづつ花をそえるようになって来た。この時の各パートは先生を入れて2人づつであった。やがて10数人と増えて、本格的なものになるのだが、その間の記憶は全くないのである。

昭和25年頃は、まだ演奏して楽しむのではなく、聴いて楽しむ時代であったのか、現在のような音楽サークルはあまりなく、我々のような存在は特異なものだったのだろう。コンクールは勿論出演したが、岩国を中心とした演奏旅行（？）も盛んであった。玖珂の祖生には演劇部と一緒に小学校に泊って、昼夜2回の演奏をやったり、河山、広瀬方面にはバスで行き、地元の婦人会か有志の人のお世話をうけながら楽しい演奏会をしてあるいた。

こうした我々の活動が県外にも聞えるようになったのか、NHK広島放送局からも要請があった。この時はたしか昭和25年5月5日の子供の日であったと思う。曲目はテフテフ外数曲で、初めての放送というのに生放送であった。先に他のスタジオで合唱があり、その後が、我々の演奏であった。ヘッドホーンをつけた人が「今、合唱が始まりました。」、「二曲目に入ります。」などと経過を教えてくれる以外、何も解らない不安な時に興奮はだんだん高まり、とうとう部員の1人は鼻血を出す有様であった。

この頃、放送は3回ばかりあったが、次回からは録音になり、気持の上では大分楽になった。当時の録音技術は現在のような進んだものではなく、レコードのような録音盤をぐるぐるまわすものであった。部屋もクーラーなどなく、氷柱を立てゝ汗を拭き拭きの悪戦苦闘のものであったが終ったあとは壮快であった。

数年後、岩国東中学校の講堂で行なった演奏会が、今の市民マンドリン・クラブの前進のマンドリン・ソサエティの定期演奏会のはじまりであったのではないかと思うが、もう20数年昔の話となってしまった。



S.25 夏

岩高プレクラム・アンサンブル創立

S 27年卒 富沢 元生

去る8月、岩国市民マンドリンクラブの、第20回定期演奏会が開催されましたを機会に、久方振りに、岩国高校の旧横山校舎跡を訪れてみました。しかし、昔の跡は全くなく、講堂も、部屋も、思い出にのみ残すところとなりました。

岩高プレクラムアンサンブルの誕生からもう四半世紀を過ぎて、遠い過去の事となりつつありますが、当時の模様がさまざまに、思い出されて来ます。

昭和25年と云えば敗戦の混乱からようやく落着きを取り戻して来た頃だったのでしょうか……。前年から練習を始めておりました。プレクラムアンサンブルが、故熊谷先生の情熱とご指導により、何とか音楽会を開くところまでになり、6月25日に横山講堂で、第1回の定期演奏会を開催しました。何分にも楽器は揃わず総勢も15人で技術的にも今のとは、比較になりませんが、とにかく皆がまとまって成し遂げたわけです。メインは合唱部との協演による“麦祭り”でした。

楽器を揃えたい希望は、当時は大層困難な事で一本、手に入れるのにも随分と苦労し、方々探し歩きました。呉の中山楽器店でマンドラを初めて手にした時の感激は今でも忘れることができません。故大野繁さんにお願いしてチェロとギターネを製作していただき、低音部を補強して、12月3日に第2回定演を行いました。

石神校長先生（当時）のご尽力により、お琴の名人、衛藤公雄先生の賛助演奏が実現して、講堂狭しと観客がつめかけた流れ、今に無い盛況でした。

この年に統いて翌26年も春秋二回の定演を開催しました。部員も25名となり、楽器も一つづつ充実されて、形も整ってきました。この間、市内の小中学校、近郊の和木、玖珂、広瀬等の学校の訪問演奏、FKからの全国放送、駐留軍放送への出演等、数々の校外活動も熱心に行い、苦しい練習の中にも張りのある楽しい部生活でした。駐留軍の放送局ではテープ録音でした。今ではカセットが一般化されて小学生でも持っている時代ですが、初めて見るテープレコーダーに驚いたものです。又当時の録音が保存されていればと、つくづく残念です。

この様に活動出来た私達の頃は幸運であったと思います。石神校長先生をはじめ先生方のご理解とご援助、三戸武、故村本新一先輩の日々ならぬご指導ご協力、早稲田マンドリンクラブ先輩の故安富信義氏の楽譜などのご支援、等々、皆様の暖いご厚意に、感謝の念でいっぱいです。そして何よりも現在の基礎を作った下さった、今は無き故熊谷先生の熱情の賜が今日をあらしめたものだと思います。

マンドリン音楽を通じての結び付き、熊谷先生の熱情を受け継いで活動している岩高プレクラムアンサンブルの後輩達、又弛まなく発展を続けている岩国市民マンドリンクラブの諸君、お互に結び付を大切にしつつ、このクラブ活動を大いに盛りたてて行こうではありませんか。

息の永い活躍を祈念します。

行進曲「若人」

S 29年卒 熊沢 偉全

月日の過ぎるのは早いもので、熊谷先生が亡くなられ10年近くなりました。しかし今でもマンドリン愛好者の活動が引継がれていることは、よろこびにたえません。このことは、いまさらながら先生のマンドリンに対する情熱の大きかったことを物語るものだと思います。

私が入学したときの担任が先生でした、そんなことが楽器との結びつきのきっかけとなったわけです。当時の曲目で思い出深いのは「ミレーナ」「山嶽詩」「古戦場の秋」等忘れられない曲でしょう。又、行進曲「若人」のあの軽快なリズムが当時の部員にうけたようで、練習の時、アンコールの時等、好んで演奏したものです。そして各パート全員、この曲だけは暗符し符面なしで弾いたものです。

現在はもう楽器を弾くことはできませんが「若人」だけは今でも弾けるような気がします。

最後にマンドリン同好会の発展を心より祈っています。

プレアン入部の頃

S 31年卒 稲 田 勝 彦

昭和28年、岩高入学。思えば、もう遠い昔のことだ。

桜咲く錦帯橋を渡って（もっともその頃は一年生は川西、二年以上は横山の校舎だったが）入学式に臨み、当時の石神校長が「下駄をはいて錦帯橋を渡ると、橋が早くすりへるので、高下駄登校を禁ずる」と言わされたことが強烈な印象として残っている。

入学して、さて何のクラブに入ろうか、という時になった時、もともと音楽は好きだったので、華々しい活躍をしていました合唱団に入ろうか、と迷ったが、マンドリンクラブがいち早く新入生歓迎演奏会を開いたので、もう一も二もなく飛び込んでしまった。

もっとも、その前の年だったか、岩高プレクトラムアンサンブルが、ぼくの出身中学である、あの悪名高き？和木中学に演奏に来たことがあって、その時、はじめて聴いたマンドリン音楽の妙なる調べと、熊谷幹雄先生の伊勢海老のごとき指揮ぶりに呆然としたのだった。

まあ、そういうわけでプレアン部員となり、毎日、放課後、川西から横山へ行くことになった。途中、上級生に出会って挨拶を忘れたりすると、呼びとめられて「おまえ、わしにや挨拶せんでもええが、他の上級生におうた時は挨拶せえのう」と、背中がぞくぞくするようなやり方で注意をされたりしたものだ。

山側の古い校舎の二階にあった部屋に着くと、その頃は文字通りまだ紅顔の美少年であった三浦孔司現会長が、オーダーメードのマンドリンを目にもとまらぬ早技でひきまくっている。それを横目で見ながら、新入部員一同、オデル教則本などをドドレードドドとたどたどしくひく。まあ、マンドリンクラブがあるところでは、どこにでもある風景があったわけだ。ただ、違いがあるとすれば、あの頃は相対的にみんな貧しかったことだろうか。特にぼくの家は、赤貧洗うが如しで、練習を終って暗い道を自転車で帰る途中、栄養不良からくる鳥目（ご存知か？）のためよく見えず、どぶ川の中へ頭から突っ込んで、同行の嘉屋政雄君にひどく迷惑をかけたこともあった。

春秋の定期演奏もやった。演奏旅行にも行った。テニス大会もしたし、クリスマスもした、などと思い出せばきりがない程だが、それらがすべて熊谷先生のあのキラリと光る眼と少し鼻にかかった、あの声と共に思い出されるのだ。ぼくが二年生の二学期の終りに、家庭の都合で広島に転校しなければならなくなった時、先生はぼくの額に額を当てて「元気でな」と言われたっけ。ぼくが大学へ入り、英語の教師になる道を進んでいることをきくと、「卒業したら岩高に来てプレクトラムの世話をしてくれないか」という手紙を下さったこともあった。その後数年、マンドリンを手にする機会がなかったので、ぼくの技術は中途半端のまま、とまってしまったが、それでも、行く先々で、マンドリンクラブに関係してきたし、広島大学で教えるかたわら、マンドリンクラブの顧問をしたりしているのも、熊谷先生のまかれた一粒の種のおかげだ。先生は、草葉の陰で冥しておられるだろうか。

自分のことばかり書いたが、今は顔もさだかには思い出せなくなった昭和28年度入部、第6回生の同期生の皆さんが懐しい。それぞれ40才のおじさん、おばさんになってしまったが、どうしているだろうか。

前回記念誌編集

S 31年卒 中 村 和 夫

記念誌出版が、私の怠慢により遅れていることを申し訳なく思っています。もっと早くから準備したかったのに、仕事が思うように行かなくて大変残念に思います。三浦さんからも色々と叱りの言葉を受けたりして、本当に申し訳なく思っています。

現在、原稿は15人位集まっていますが、中には、原稿用紙でなく、たゞのメモ用紙に書いたものとか、原稿用紙であっても赤で訂正、添削があり、字数を数える面からも書き直しの作業で大変苦労しています。また、題名のないものがあり、どうしようかと頭を悩ませています。できるだけ多くの人に連絡していますが、原稿はなかなか来ません。

池ヶ谷先生も申されるのですが、こうして記録を残すことは、とても大切な事だと私も思います。P Eの歴史は、今ま

でに出ていないし、できるだけ多くの人の意見だと、今までのP Eの歩みを、この辺で出版物にするということは非常に大切な事だと思いますので、私も全力をあげて立派なものを作りたいと思っています。

寄付も原稿も若い人からは出ていますが、もっと古い人に書いて欲しいと思っていましたので残念です。この出版することについて隅々まで徹底していないということがあれば、私の責任なのですが、間もなく割付けして印刷に出すまでにもっと色々な人からの原稿が頂きたいと思います。

私の集める原稿は、比留間先生、池ヶ谷先生、在京の諸先輩ということになっていましたが、先輩からの原稿はまだ全然ありません。池ヶ谷先生と比留間先生は、テレコを持ち込んで訪問記の形にします。大分予定より遅れ期日に出版できそうにないので、そのつぐないと言ってはなんですが、より多くの人々の原稿を集めて立派なものにしたいと思います。

岩国地区では、東洋紡、帝人の方々にも書いて頂きたいし、P Eにご協力下さった方々にも書いて頂きたいと思いますので後日、中原さんに先生宅に伺ってもらいますからよろしくお願いします。或る程度、私の方で内容を決めませんと、非常に偏ってしまいまして、皆、現役時代の想い出ばかりになってしまいますので、できればそういうバラエティをもたせる意味で、色々な人の投稿を期待しています。

次に、本の題名で一番困っているのです。何かよい題名を考えてみて下さい。

それで出版予定ですが、今のところ、Xマスには遅れないようにやろうと思っています。

三浦さんから、定演の飾りつけ等についての連絡があり、今回の募金の一部をそれに当てるよう中原さんに手紙を出しますので、何か有意義な物に使ってほしいと思います。

定演を前に何かとお忙しいと思いますが、先生もお体を大切にして下さい。P Eの方々には、より良い演奏をするように、また、P Sの方々にはよろしくお伝え下さい。前後になりましたが先生にお借りする写真の簡単な説明もよろしく。

(この原稿は、前回の記念誌の編集をされた中村氏が、出版の3カ月前の昭38年9月に、熊谷先生にあてた録音テープから探ったものです。氏は唯今、中東に海外出張中なので無断で載せることになりますが、ご了承お願いします。三浦拝)

二昔前

831卒長島啓

先輩、三浦さんから思いもかけず電話をもらった。第一回の卒業生演奏会について何か書けと云う事だ。電話の向うから記念誌編集の御苦労がひしひしと感じられた。

三浦さんは、プレアン同窓会々長にはもってこいの人だ。これからも仕事が忙しいから等と云わせず、会長に祭り上げて置き度い人だ。

二昔も前の事だから詳しく覚えてはいないが、その頃の事を思い出すと、すぐ自分の現役の頃が目に浮かぶ。一年生の時、同級の松井君から「長島、お前こんど練習さはるとクビだと部長が云っていたぞ。」と、おどされて、やむなく部室へ行った事があった。なにせマンドリンを習い始めて2、3ヶ月なので面白くない事この上ない。秋には演奏旅行があったが、もちろん連れて行ってはもらえなかった。そんな時、友人宅で古めかしいフラットマンドリンを見つけ、自宅練習用として借りて来た。自分の楽器は学校へ置き、帰ってくると、このフラットでよく練習したものだった。当然、練習量が増え面白くなってしまった。練習意欲は加速度的に高まり、卒業してもあき足らず、東京で比留間先生に付いた。そんな年の夏、私は学校の夏休みで岩国に帰り、熊谷先生を訪ねた。確か昭和33年だった。私は、まだまだマンドリンへの意欲は旺盛で先生との話の途中に「夏休みの間、どこかで合奏に加えてもらえるところはないか」と知らず知らずに無言の圧力をかけた様に思う。私と同じ気持を持っていたのは他にも何人かいて、2、3日後、先生に誘われて帝人のマンドリンクラブに行ってみると、帝人社員よりもプレアン卒業生の方が多く、どこの練習かわからない雰囲気だった。こんなに大勢、押しかけては帝人の方に申し訳ないと、云う先生の気遣いが感じられて我々は落ち着けなかった。帝人の方は歓迎してくれたのだが。

久し振りに会ったプレアン卒業生だが、先生も我々も口数少なく帰途についた。今の三笠橋附近まで、こんな状態で歩いていたが、それぞれの頭の中で同じ様な構図を描いていた。

「君、これだけいたら出来るよ。何かやってみたらどうだ。」先生のおっしゃる意味はすぐ解ったし、先輩の吉岡さんもうなづいていた。「演奏会と云うのも大きさですから、マンドリンのタペ位がいいですね。」後輩の平岡君の意見で、その場でタイトルが出来上った。

それから後の事はあんまり覚えていない。現役プレアンにも一曲弾いてもらい、もちろん帝人有志の方々には、我々と一緒に弾いてもらつた。私はさぞかし満足感を持って東京に帰つた事だろう。

その後も毎年この催しが行われている様でとても嬉しい。私はこの一回目以降は参加しておらず、「今年もあったよ。」と噂を聞くと三笠橋附近の事が思い出されて懐しい。夏になると大挙して帰岩する若いマンドリン野郎に熊谷先生は目を細められたに違ひない。

37年、大阪に来て「堺マンクラ」を創つた。定期演奏会は11回まで来ているが、そんな事より、多くの友人を持つた事に喜びを感じる。プレアン当時の私の意欲は積り積つて生活の一部にまでなつてゐる。これからも、もっと曲を覚えて、もっと譜面を集めたいものだ。

“第一回記念誌発刊の思い出”

833年卒 清水義章

皆さまにおかれましては、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。又、今般の記念誌発刊に際し諸兄のご苦労に対しより感謝申し上げます。

私とマンドリンとの出会いは、高校二年の秋、三原高校より転校し音楽的才能がないのにかかわらず、森見君に引きつれられて入部したのが始まりであります。与えられたポジションがマンドラであり、それ以来、現在に至るまで愉快な同期の仲間での交誼を得て、数多くの楽しい青春の思い出が出来、その一つ一つが私の血となり肉となり、今もなお、力強く体内をかけめぐっております。又、今は亡き熊谷幹雄先生の厳しい指導と、すばらしい人間性に接する機会が多かった為だと思います。卒業後も、春夏秋冬、帰省の度に同期の仲間と自宅に押しかけ語り明かしたこと等、すべての出来ごとが走馬灯のようになつかしく思い起こされます。

さて、第一回記念誌発刊の苦労話と之の指示でございますが、本来ならば中村和夫先輩が編集長として、その苦労を披露されるはずであります、私にとっては運悪く、丁度、中村先輩が海外勤務中の為、止むなく当時の編集の一端を思い出しながら筆を走らせたいと思います。当時、中村先輩より下宿に連絡があり、授業のない日に会社（千代田化工）に寄つて記念誌発刊を手伝うように依頼がありました。経験のないことだけに不安でしたが、先輩の意欲に圧倒され二食晩酌付（貧乏学生にとっては魅力）にて、ほとんど連日、授業を終えて千代田化工へ出勤するはめに落入りました。

当初は、原稿の整理からだったと思います。各種各様の原稿を統一した文章の流れに書き直し、更に一ページ二行のレイアウトの為、字数を数え一ページづつ仕上げる作業に相当の時間を要しました。その中でも、比留間絹子先生との対談テープを原稿化する作業が一番大変だったと記憶しております。ある縁でマンドリンを通じて、ご交友いただいた中尾靖夫氏の下宿に数日居候し、テープを廻しながら一字一字書き上げて行きましたが、比留間先生の校正を願わざに印刷した為一ヶ所、全く逆の表現が生じたことが、一番残念に思っております。編集も徐々に進み校正をする頃になりますと、一日も早い完成をと急ピッチで進みました。表紙のマーク、横文字も余白のカットも全部手書きであり、その中に熊谷先生の愛称であるミキネコを入れるゆとりも出てまいりました。

最後に、表紙のデザインの決定については、編集長とずい分、議論したように思います。演奏会風景を入れスマートな出来上がりに、手作りの味が出たと自画自讃致しました。完成品を手にした喜びは今だに忘れることが出来ません。

それも、中村先輩にとっては多忙な仕事をしながらの編集であり、一層感激も大きかったのではないかと思います。

私自身、初めは単なる手伝いから出発しましたが、完成に至る道程を通じて、中村先輩との心のふれあいが、その一ページ一ページに刻まれており、今もなお鮮明に思い起こされる心の金字塔として生き続けております。暖かい人生の教訓をいただいた中村先輩の今後の活躍を心よりお祈り申し上げます。

最後に、皆さん方のご健康、ご多幸、心よりお祈り致します。上京の折りはぜひお立寄り下さい。

あるマンドリンOBのこの頃

S 33年卒 中尾雅子（旧姓 中村）

八丈島に台風が来ているとかで、今日は朝からひどい雨と風、傘をさしていても洋服はずぶぬれ、子供達はぬれた服のまま教室で、おもしろくもない勉強をしているのかと思うと同情したくなる。そこで私も雨を横目に主人の机を拝借して仕方なく、三浦さんのため？にペンを持った。マンドリンの事について、と云うことであるが、高校時代のマンドリン狂も、今や自称、良妻賢母、マンドリンも曲ったり、弦は錆びたりでお話にならない。でも私からマンドリンを取ってしまうと、現在の私は存在しないわけで、これのお陰でオールドミスにもならず、素的なダンナさんと、素なお友達にも恵まれたのである。マンドリンの音楽会のような結婚式を挙げた私達に皆は、いつも二重奏をしているのでしょうか等と云われるけれど、この13年間二人で仲良く弾いたことはほんの数える程しかない。先日なんの気まぐれか、二人で弾いてみて思ったことである、二人共、技術は落ちたけれど、下手は下手なりに気持が良かった。私のつっぱりが取れたのか、自分の実力を知られても良いと言う安心感からか、とても楽しかった。これからは子供達に留守番をさせて二人で、練習に行きたいと思う。

先日、親友がメキシコから帰って来て清水さんと三人で、銀座でデートをした、同じ様に年を取った三人は、互いに「あなた、ちっとも変らないわね」と喜びあった。いい気なものである。彼女の名前は木村康子。高校の行き帰りは、いつも一緒に、マンドリンの曲を大きな声で歌いながら、自転車のペダルをふんだものである。そして二人仲良く遅刻、原因はいつも私だった。これは本当に申し訳なく思っている。12年振りに会って、いつもの様に、お互いに勝手な事を言い合って笑った。私も是非一度、親友の住むメキシコを見たいと思う。

三浦さんの「ミキオですが……」の電話に、先生を感じ、ついに筆無精の私が書かされてしまった。



S. 34 . 6 連合音楽会

20年間の断層

S 34年卒 山添修志

ふと数えてみました。一体、私は何年マンドリンを弾いて来たのかと。――

高校入学と一緒に、あの白いクリシマの楽器を手にして以来、13才の娘を持つ今日まで。そこに20年を越える歳月が経っていることを知つて若干の驚きと感慨に似たものを覚えます。生まれて此の方、今日に至るまでの猶に半分以上を、マンドリンと共に送った生活が占めていることになります。

楽しかったこと、悲しかったこと……。思い出の中の喜怒哀樂の殆どが、マンドリンと二重写しになっています。高校2年で入手し、今なお愛器としているVINACCIAと、ステージの模様を記憶している70余葉のプログラムが、過ぎた20年余を備に語ってくれることでしょう。

誰もが口にする「あの懐しい青春時代」を考えてみると、私には余り明確にその時代が思い浮びません。即ち私のその時代の全てがマンドリンとフレートラム音楽であり、今なお、その軌跡を歩んでいるつもりです。これからも、マンドリンを手離さない限り、その時代の連続の中に居続ける様な気がする今日この頃です。

現役時代の主演・部室等々の思い出を別にして特に残る印象の一つとして、熊谷先生に連れられて通つた東洋紡MCとの交流があります。なにぶん高校生の頃なので交流の趣旨とか、先生とメンバーの方々との大人の話は、全く理解できず、ただ何處へ行ってもマンドリンが弾ければ楽しい位の気持でした。そんな練習の中で、ピアノを弾いておられた阿部英昭氏のイメージが今なお、当時の合奏にひとあじ異なった音楽性を加味した印象と連つて想ひ浮びます。

また高校の体育祭では、当時プラスバンドがなかったことから、開会式の音楽をプレアンが担当し、『山嶽詩』の莊厳な響きが体育祭の幕開けにまさにふさわしく、マンドリンを弾きながら、胸がジーンとしたこと、そしてまた入場行進の為の例の「飛べ飛べ、白雲――」を演奏したものでした。この曲の1コーラスは僅か40秒くらいのものですが、入場行進は延々10数分続き、その結果繰返すこと20数回となり指先が痺れた訳です。そのほかに、比留間ぎぬ子先生がお弟子さんを連れて部室に見えたこと、早稲田大学MCの皆様が来られたことなど思い出は枚挙にいとまがありません。そんな高校3年間の中で何故か、先の二つの印象が、熱のない秋の日射しと紺碧の空、そして深緑の城山が背景となった空間に浮んでくるのは、青き日の感傷が持たらすものでしょうか。

ICMCの第1回定演が開かれたのはS33年、私が3年生の夏でした。三浦先輩のご尽力により開催にこぎつけた様でしたが、何分にも初回のこととメンバーも20名余でした。またパートバランスも必ずしも充分ではなかった様で、そこで私共現役が、助人としてステージを踏まして頂くことになりました。これが始まりで、現役メンバーの応援出演という習慣がつき、爾後数年間ICMCのメンバー、実力ともに充実するまで続きました。

岩国高校マンドリン学(樂)部?を卒業した頃から、ICMCの活動の主流は近郊各社のMCとの交流でした。特に帝人MCとの交流活動は深く長く続き、むしろ当時のICMCの定常活動の基盤となっていました。これはひとえに、帝人に勤務しておられる熊沢先輩のご努力によるものでした。この頃、帝人八本松病院に幾度か慰問演奏にてかけこともありました。一緒に合奏させて貰つたメンバーの上森一乃氏、吉森静生氏、石丸健二氏……と皆様の顔が浮んできます。

またこの時代とオーバーラップした頃からS40年頃にかけて、沢村泰昌氏をはじめとして広島市で盛んな演奏活動をしておられたヴィタリチオマンドリンのメンバーの皆様と交流の機会を得ました。何度もステージに出させて頂いた記憶の中でいまも浮ぶのは、コンマスの前田幸重氏のイメージです。立派な体格の氏に包まれたマンドリンが一まわりも、二まわりも小さく見え、そこから出てくる繊細な音色が、氏の大きな体格と妙にアンバランス(失礼)なのが今でも印象的です。

一方時代を同じくして、徳山市の山口孝彦氏が結成された周音連マンドリンクラブとの交歓も熊谷先生の人柄をもの語る歴史でしょう。何と言つてもスケールの大きかったのは、周陽工場音楽連盟主催の第6回周陽工場音楽祭に出場したときのメンバー数です。東洋鋼板、日立製作所、武田薬品、徳山曹達、日新製鋼それにICMC等々と総勢111名と言う数で、ステージを埋めたものです。S43年までの10余年、徳山~広島という近郊地区でのマンドリン音楽活動を盛んにしたのは、熊谷先生の人柄とエネルギーッシュな活動の賜でしょう。

S42年(第10回定演)迄が、ICMCの今日までの歴史のまさに半分を占める訳で、ICMCの今日の姿を見ると当時は揺らん期であった感が強い。S43年以降は部員も増えていますし、本誌にも多くの寄稿もあると思われますので省略します。今年の夏に第20回の記念演奏を終えて、過去20年間を回顧し、その断面を垣間みました。

廊下でのトレモロ

S 34年卒 山田 耕一郎（旧姓 江見）

私とプレアンとの出会いは不思議な偶然であった。私は昭和31年9月相生高校から岩高へ転校した。そして、新しいクラスで学習が始まった時、同じ列の一番前が山添氏（第1マンドリン）で一番うしろが村岡氏（ギター）で、真中にいた私は両氏よりプレアンの入部をすすめられた次第である。中学校時代、吹奏楽部に在籍し、クラリネットをかじった経験から、少なからず音楽に関心はあったが、まったくの音痴で、むしろ音楽は苦手だったので、両氏について部屋に入り先輩たちのかなでる演奏風景を見て、その動きの早さと、譜面の複雑さにはまったく驚嘆し、とても自分にはできないと辞退した。しかし、不幸なことには、この年、つまり、昭和34年卒生の（男子）部員は、山添氏、村岡氏と村中氏（第2マンドリン）後に入部する定金氏（チェロ）と私の5人しかおらず、熱心なすすめにとりあえずなるべくゆっくりと演奏できるものでという希望で、マンドラをやってみることになった。

およそ一月、部室の外のあの横山校舎の二階の廊下の隅で、一人、ポロポロ、トレモロ練習が始まった。苦手な上に不器用な私は、仲々トレモロの連続音が出ず、練習曲も遅々として進まなかったが、先輩、同輩の暖かい励ましたと熊谷先生のお人柄に引かれ、どうやらこうやら部室に入り、みんなと一緒に演奏できるようになった。私は今もって、この廊下でのトレモロ練習がなつかしく思い出され、苦しい時のげみになっている。俗に、枯れ木も山のにぎわいというが、私など、上級生に調律を全てお願いし、最上級生になったら、こんどは下級生にお願いするといった次第で、まったく自信もなく、役にも立たない部員であったが、ちっとも違和感なく、プレアン一家として暖かく大きかえられていたところに、我部の伝統というか持ち味があったように思え、いつまでもその暖かさが忘れられない。きっと、師なきあとも、この精神は受けがれ生かされていると思う。

不思議といえば、私の勤務する学校はちえおくれの子どもの養護学校であるが、その卒業生の会に日本女子大のマンドリンクラブが友情出演をして演奏してくれたが、あとでこの一部の人に指導したのがプレアン出身の人ときき、本当に縁というのか、つながりの深さに驚かされた。

演奏に際し、内に厳しく自分のテクニックを高める修練と、外にプレアンとしてのハーモニーをより美しくまとめあげる人の和が、あの高校時代の日々の実践を通じた栄養剤であったと感謝している。そして、その気持を仕事の上に、人生の上にこれからも生かしていきたいと念じています。熊谷先生の十回忌に慎んでご冥福をお祈りするとともに、ICMCの益々のご発展を心からお祈り致します。

在部二年余の雑感

S 35年卒 浦 武 克

プレアン時代の思い出……、いざ、ペンを取ってみると、ペンが思うように進まないのは、どうしたことか。在部2年半の間に、色々な行事等々があったにも拘わらず、どれも、これも断片的に頭の中に浮ぶだけで、まとまりがつかない。

私がプレアンに入部したのは、一年の二学期で、しかも、後半になってからだったと思う。というのも、三池高校から転校して来て、しばらくしてからことで、自身としては、野球部で野球をやることが夢で、プレアンに入る迄は、野球部に入るため、色々と工作を進めていたわけで、両親の了解が得られずに、野球部を断念したというわけです。

そうした意味からすると、まさに、他の部員とは、入部の動機そのものに違いがあり、プレアン部の不協和音といった存在であった。とにかく、プレアンに入るなり、体格的に、かつ無器用差を見込まれて、マンドローネを受け持つことになり、埃りをかぶったマンドローネを手渡され、しかも、マンドローネが加わるのは、創部以来のことだったと思うし、また、それだけに、私達の年次は、フルメンバーということで、大いに期待されていたわけです。

入部早々、定演か、なにかがあり、“練習もそこそこに、ぶつけ本番で、初舞台という、離れ業をやった”ということ、聞えが良いが、熊谷先生の指揮のもと、「何もせずに、演奏するような格好をして、ごまかしなさい」ということで、ステージの片隅で一生懸命、ごまかしに汗を流したわけです。

以来、この経験は、演奏会の都度、大いに役立たせることになるわけだが、ただ、二年の夏だったか、灘小か、

灘中に、模範演奏会といった、調子の良い振れ込みで、演奏会をやったことがあった。この時は、ある程度、色々な面で慣れて来た時だけに、やる気十分でステージに上ったわけだが、この、やる気十分が災いして、とんだ不協和音を披露することになり、日頃のごまかしのテクニックすら忘れてしまい、ワンステージ終了後、熊谷先生から、こっぴどく、怒られたことがあった。

この時は、さすがに、"俺は、やっぱり不協和音"とがっかりするとともに、つくづく"クラブを間違えたか"と考え込んでしまった記憶がある。

県連合音楽会では、山添先輩等と共に、山口市へ行った事があったが、この時は、朝日新聞の地方版に"伝統ある岩高プレアン"といった調子で、演奏を評してあったが、翌年の徳山市での県連合音楽会では、何一つ、批評がなかった。いささか、ショックであったが、今から考えてみると、無理な注文とも言える。山添先輩等が去った後、我々の年次は、チームワークを良り強力にするため、練習外の部外リクレーションを良くやり、また、良く遊んだ。この傾向は、二年の時からようであったが、三年になって、より具体化したと言えそうだが、当時の副部長であった川本氏は、非常に頭を痛めていたようだった。春、夏、冬といった休みが来ると、自動的に、誰れとはなしに、企画担当者が、リクレーションの計画を練り、実施に移していたが、参加者も、必然的に決っていたようだった。

この傾向は、卒業後も数年、続いたが、我々の年次は、プレアンというクラブ活動をよりエンジョイした年次で、その点、他の年次に比べNo.1だったとも言えるのではないか。

こうした部外活動の行過ぎか否かは、別として、各部員ともに個人技として、非常に高いレベルに達した人達が多かったにも拘わらず、全体的に、演奏会では、鋭さに欠けたきらいがあれ、また、特に好評を買うこともなければ、絶賛を拍手するようなこともなし、まず、まず、無難のステージを繰り返していた、といった印象がある。

いずれにせよ、我々以後の後輩諸氏にとっては、秩序の回復等々、色々な面で苦労をしたのではないか、と、今更ながら、恐縮している。

マンドリンとの出会い

835年卒 岡本裕子(旧姓 大江)

あれは、そう、岩高入学式の後行われたプレアンの新入生歓迎演奏会でした。

熊谷先生の真剣な眼差しとタクトにあやつられるかのように、部員の皆様がひとつになっての演奏は、本当に素晴らしいものでした。

厳しいものをピリピリ感じるので、だんだんと楽しく溶け込んでゆける雰囲気は、聞く者全てを引き込まずにはおきませんでした。

あこがれの県立岩国高等学校の入学式の日というだけで、充分過ぎるぐらい幸せだった私の心の中に、それはすごい迫力で飛び込んできました。

「もしかして……？教えていただければ私にも……？」弾けるのではないかと、恐る恐るのぞいた部室でしたが、既に廊下では同じ思いの一年生のボロンボロン、ガチャガチャという大合奏が始まっていました。

何を買うにも仲々「ウン」と言わない厳しい父が、「マンドリンが欲しい」とねだった時は、あっさり買い与えてくれたことも意外でした。

それからは、もううれしくてうれしくて毎日、川西校舎から通うのも苦にならず、部室への階段を駆け上っては廊下の椅子に座って練習に励んだものでした。

どうやら教則本が弾けるようになって、いよいよ部室の中での練習の仲間に入れていただき、楽譜を手にした時の感激は、如何ばかりだったか、今でも思い出せる程です。同時に、何やら恐くて落ち着かなくて隅っこの方で小さくなっていたものでした。

そんな私でしたが、いつの間にかすっかり慣れて、部室へ出入りする度に震えていた足も自由に動くようになり、先生のタクトにもついてゆけるようになり、適当におしゃべりもし、何よりも少しづつでも難しい曲が弾けるようになるのがうれしくて、夢中で過した三年間でした。

私達がしていただいたように、春には新入生歓迎演奏会、秋の定期演奏会、そして高校器楽演奏県大会、運動会の行進曲を演奏したことありましたネ。

その度に、「この演奏会、何が何でも成功させなければ！」という、先生を初め部員全体のあの張りつめた気持と熱気は本当に懐しいものです。何度も弾き込み親んだ曲も、勿論大切に思っていましたが、新曲を手渡され、各々のパートが繰り返し練習を重ねてだんだん一つのものに作り上げてゆく喜び、できることならもう一度味わってみたいものです。

教科指導だけでも、どんなにかお忙がしかったでしょう先生が、例え、ホンのわずかしか時間のない時でも許される限り部室のぞいてタクトを振って下さったお姿に、私達部員の気持がいつもひとつにまとめられていたといってもいいでしょう。

あの先生のダイナミックで正確な指揮がもう見られないということは、この上ない寂しさを感じます。

卒業以来、あまり手にすることもないマンドリンですが、長男がカブスカウト（ボーイスカウトの年少隊）に入隊した時は、隊員の子供達の歌唱指導に大活躍したものでした。

「近くに同好会でもあればなー」と思いながら偶に一人で、ひっそりした音色を楽しんでいるこの頃でございます。

思い出多い横山校舎がなくなってしまったことも寂しいことの一つですね。

思　い　出

836年卒 富　永　勝　之

演奏会に出なくなつてからもう何年になるかなあ……

20回の定演のうちの半分位には出たかなあ、などと思い起しながら筆をとってみました。

私が初めてマンドリンを手にしたのは、今から19年前（昭和33年）の高一の夏休みも終りの頃でした。当時プレアンに入部していた中学時代の友人に誘われて練習を見に行ったところ、熊谷先生に練習用のマンドリンを渡され、早速持ち方から教わり始めることになったのです。

それから毎日廊下での練習でした。少しづつ弾けるようになり、オデルに進むのが嬉しくて毎日自転車で通つたものでした。

初めての演奏会は秋の第11回定演でした。当時は横山講堂で部員がステージを作り、演奏会を開いていました。そのステージの一番後ろの隅で「放浪」とか「水車小屋の愛人達」などを夢中で弾いたが、途中でどこかわからなくなってしまったの覚えています。

それから暫くして自分のマンドリンを買って貰つて嬉しかったこと、これも忘れることが出来ません。

こうして入部してから、マンドリンも弾けるようになるにつれ合奏の楽しさもわかりだし、通学しても部室に行くのが一番の楽しみでした。

2年の時の定演は講堂が使用出来ず労働会館で行いました。

3年になると、春は新入生歓迎の演奏を行ない、6月には連合音楽会で防府に行き「ミレーナ」を演奏しました。一番の遠出なので大変楽しかった。

秋の第13回定演は改築後の横山講堂で、自分達3年生が中心となり準備から演奏会まで行ないました。

そして演奏会です。3年生だけの合奏、マンドリンで独奏したこと、後片付けが遅いと熊谷先生に叱られたことなどが、懐しく思い出されます。

また、部室の隣りでピンポンをしたり、ソフトボールをしたこと、「丘を越えて」を皆で競つて練習したこと、試験が終ると直ぐ部室に行って弾いたこと、夏休みの練習後にブルで泳いだこと、広告とりに歩いたこと、などが熊谷先生の厳しかった練習とともに思い浮かばれます。

昭和36年に卒業し山陽パルプ岩国工場に入社しました。卒業後は毎週金曜日が岩国在住OBの練習日でした。

当時はOBだけの練習場所もなく、人数も少なかったので帝人のマンドリンクラブの練習に熊谷先生が指導に行っておられたのと、熊沢先輩が部員だったので、そこにOBも加わって一緒に合奏練習をしていました。

だが何と言つても、一番の楽しみは夏のプレティーの定演



部屋へ行くには、まずこの道を

でした。それまで少人数だった練習も演奏会が近づくにつれ、先輩諸氏が帰って来られ、人数も増え盛上って來るのでした。プレアンの時とは違った和やかな雰囲気の楽しい練習でした。

そして演奏会の暑かったこと、これは毎年のことでした。プレアン時代の曲を主体に同窓会と一緒にしたような楽しい演奏会でした。

その年の秋のプレアンの定演には熊谷先生が急病で出られないと言うことで、初めて指揮をしました。その時の部員の真剣な眼差しも忘れることが出来ません。

また会社でも、こうした合奏の楽しさを一人でも多くの人に知って貰いたくて、現在活躍中の柴田さん達と社内にマンドリンクラブを作ったりしました。

また翌年には、帝人マンドリンクラブの人達と一緒に八本松に慰問に行つたこと、プレアン、プレティの親睦を深めるために第一回交歓会を始めたこと、広島で第一回マンドリンフェスティバルが行なわれ、岩国地区OBも合同演奏に参加したことなどが思い出されます。

その後は例年のごとく、春の同窓会、7月の交歓会、8月の定演、秋のプレアンの定演などの行事と応援出演で広島に行つたりしていました。

また思い出されるのは、宮島にキャンプに行ったこと、正月に集まって遊んだこと、広瀬で初めて合宿をしたこと、幹事で名簿作りに苦労したこと、それから定演の中で、兄弟4人で四重奏をしたこと、など……

これらの思い出が当時のメンバーの顔と一緒に思い浮んで来ます。

現在私は富士山の麓、御殿場に住んでいて演奏会などに行くことが出来ませんが、この記念誌を機会に当時の仲間でいつの日か集まって「若人」など合奏したら楽しいだろうなあ、などと夢みながら当時を振り返ってみました。

最後にプレアン、岩国市民マンドリンクラブの今後の発展と熊谷先生のご冥福を祈りながら筆を置きます。

ク ズ

S 36年卒 松 前 浩 久

先日「動植物歳時記」という本を買って読んでいたら、「秋の七草の中にはクズという植物があつて……」という書きだしで、クズ粉は高級なお菓子をつくり、その纖維からは、クズ布、花からはねっとりしたおいしいあんこ、根は葛根湯という漢方の風邪薬になる。また植物全体は、森や林のふちに生え、それを保護する重要な役目を持っている。などと、いいことばかり書いてありました。しかし、私にとってクズは名前のとおりクズで、山の木を育てるには大変困る植物と常々母から言われ、クズ退治にかなり労力を使わされたニクイ植物なのです。

一昨年山に桧木を植えたところ、大きなクズの株があり、それが四方にツルをのばして、桧木をおおってしまいました。そこで一本一本堀りとりました。その株の地上部は私の腕くらいの大きさですが、地下部は太腿ほどもある大きさで長さ3mもありました。さっそく家に持ち帰り、デンブンを作つてみたら、ジャガイモの倍以上のデンブンがとれました。

3~4年前までは、クズという名も知りませんでした、なぜなら、私の村ではクズのことを「かずら」と呼んでいましたので、私も「かずら」と認識していたのです。ところが3~4年前から、生物の授業をやるようになりしらべて確認したのです。

クズを確認した時、15年前川西の熊谷先生のお宅で、先生が話されたことがやつとわかったような気がしたのです。というのは先生の御存知の方が、九州のどこかへ行かれるのでクズ餅をたのまれたのだそうで、「本モノのクズ餅は、そこにしかなく、この近くで売っているものは、ニセモノばかりだから、わざわざたのんだのだ」というようなことを、もっこくわしく大事なことのように話されました。その時の私には、本モノクズ餅などわかりませんでしたし、甘いお菓子なら本モノもニセモノもなく、食つて腹がふくれればいい位にしか思つていませんでしたので気にもとめませんでした。最近になって本モノの重要性を述べられた先生の気持ちがわかるような気がするのです。年齢が近くなったせいかもしれません、当時の自分をふりかえつてつくづく思うのです。

私は、当時部長をやつたのです。代々プレアンの部長は、楽器が上手で、人徳のある方がやられていたのですが、私は楽器の下手なイナカ者でした。本来なら選挙で選ばれた名手、後にプレティでも活躍された、富永勝之君がやるところでした。彼は頭のいい男で先見の明があったのでしょう、選挙の日に限つて部をサボつたのです。そして案の定、熊谷先生の「いない者を部長にすることはできない」という言葉で私にお鉢が回ってきたのです。楽器をやる部で楽器の下手なり

ーダーというのは、なきもので、一級上の川本前部長さんからは「棒を振る時は、もっと自信を持って」と言われ同級生からは「お前のカメラにうつっているのは、女性ばかりだ」と言われ、女性からは「もっと公平にやれ」と言われたりしました。それもこれも、楽器のうまくひけない、音楽のセンスのない部長の、17才の胸をいためた氣使いだったのです。

最近では、本モノに何となく心を引かれ、本モノの教師になろうと思うようになりましたが、オデルをしっかりやらなかったマンドリン弾きと同じで、基礎ができていないもので、しばしば限界を感じています。したがって自分の子供はクズにさせてはならぬと教育ママならぬ、教育パパぶりを發揮しています。はたして本モノのクズになりますかどうか。

一杯のコーヒーから

S 37年卒 小東孝幸

十有余年経た今年の雨期、マンドリンにつながる総ての愛憎の気持を払拭し切れて精神的にも愛穏な状態になっていたところ、突然、某先輩が閉じていた戸を押してこられた。

私は高度なテクニックを要求する曲は好まなかった。要するに下手なわけだがそれでも楽しくマンドリン合奏に集っていた。このたび三浦先輩等の御尽力により今回の記念諸出版ならびに行事等催されるとのことと関係者各位の御労苦に深く感謝するとともに久し振りにマンドリンについて考えるひとときを今こうして持っているわけです。

私は「ペルシャの市場」と「ムーアのグラナダ」が好きだった。いつにこの二曲に魅せられて広商大へいった時も、同志と語らってあの楽しい演奏をより多くの人々とわかつ合いたいとの思いでクラブを結成した。高卒後、一度としてのんびり語らったこともないプレアン同期生は今、どこの空で何を想い、何を語らっているのかな。後輩思いの心情は自然と、拓郎の商大生気質丸出しのメロディーが浮んでくる。

一つに熱中するあまり、まわりの人々の善意、苦労、友愛もともすればわからないままに過し勝ちの今日、やはり音楽は一服のタバコでありオアシス的なものだろう。

私のかよった鈴かけの道は今はない。しかし、熊谷幹雄先生が何時だったかその時は思い出せないが、頑張れよ！と肩をたたいてくれた手応えは今もなつかしく思い出される。

命は尽きても永遠に続く生命、私は生命を大切にしたい。
あいた戸を閉めるかそのままにしておくか、それはわからない。

プレアンの三年間」私の想い出

S 37年卒 中田繁子（旧姓 三浦）

卒業して15年にもなってしまいました。月日の経つのが早すぎて、昨日の事の様に思えたことが、今少しも思い出せないもどかしさに、あせりさえ感じます。

入学式の後、新入生歓迎音楽会で、先輩の素晴らしい演奏と古戦場の秋に魅せられて、入部したのは私だけではなさそうでした。部室前の廊下にズラリ椅子を持ち出して、三年生の方に教えていただきました。部室から流れてくる合奏に、早く教則本を卒業したいものと、何度も溜息をついたことでしょう。疲れて窓の外を見るとお城山の緑がとてもきれいでした。やっと合奏に入れていただいたのは、梅雨も明けかけた頃でした。オデル教則本の36番を上ると入れていただける訳です。合奏に入れたのが嬉しくて、夏休みの練習も熱心に通ったものです。二学期、定期演奏会がありました。小さな紙の招待券を配った事、プログラムに自分の名前を見つけて、何となく嬉しかった事、前日の夜は眠れず夜中に練習して母に叱られた事、そして何よりも当日沢山の方々に聞きに来ていただきたいと思いました。初めての演奏会でした。舞台に上がる前からドキドキしました。演奏会が始まると意外に落着いて、客席にお友達の姿を見て安心しました。タクトを振られる熊谷先生の顔が汗でびっしょり、汗が玉になってライトにキラキラ光っていたのが印象的でした。

（熊谷先生が逝去されて九年になります。私に長男が誕生しまして里帰りの時でした。今も子供の誕生日を迎える度に、御元気な頃の先生がしのばれてなりません。）

二年生 春 新入部員を迎えるました。七月頃連合音楽会が大島郡の安下庄高校で開催されたと思います。いつもの講堂から離れて、汽車、船、バスと、ちょっとした演奏旅行気分を味わいました。大島の海の景色は抜群でした。のどがかわいて飲んだ水が、少し塩辛かったのを思い出します。秋、定期演奏会が近づく頃、私達の練習があまり進まなかったのでしょう、先生にひどく叱られた事がありました。みんなで先生のお宅にお詫びに行きました。その時皆んなすごく真剣な気持だったと思います。当日先生に来ていただいてホッとした。これは本当につかしい思い出です。

定演の後、部室はガランとした淋しさに占領されます。三年生が引退?される訳です。でも、人数が少なくなれば少ないので、すぐにアンサンブルができるのも素晴らしい事でした。男子生徒が楽しそうに、調子の良いルンバやポルカの小曲、武井守成氏のオリジナル曲を弾いておられました。

三年生 新入生の皆様を厚かましくも指導させて戴いた訳ですが、さてどんな上級生だったでしょうか。自分に関しては残念な事が多くて、思い出の数々に苦笑してしまいます。連合音楽会は山口市で行われました。時間の都合上市内の旅館に一泊した訳ですが、申し訳けない事にこの時の会場や曲目等、さっぱり思い出せないです。しかし早朝、すぐ近くのサビエルの塔を訪れました。朝陽に教会のステンドグラスが素晴らしい絵を見せてくださいました。私事になりますが、卒業後も同志社大学でマンドリンクラブに入り、演奏旅行で各地に行きました。しかし思い出す事と言えば特別な事情を除き、景色や電車内でカード遊びをしたとか、楽しかった事ばかりなのです。長い間練習した曲目とか、会場とか、思い出せないのを口惜しく思います。

秋、熊谷先生はこの頃から御身体の具合が悪くなられたのでしょうか。練習にもあまり来て下さらなくなり、殆んど塩屋さんが指揮されておりました。その春卒業された諸先輩や大先輩の方々が毎日のように練習場に来て下さいました。当日々熊谷先生の代りに音楽の福島先生が指揮して下さいましたが、私達が何とか定演を無事終える事ができたのも、福島先生や諸先輩方々の暖かい御支援と熊谷先生のそれ迄の御指導があっての事と、今も深く感謝して居ります。定演後三年生は受験勉強に方向を変える訳ですが、15年すぎた今振り返って見て、三年生は苦しい事も、後悔の残ることもありました。しかし、夢中で過した一年生、順調で楽しかった二年生と、総合的に見て、この三年生時代こそ「青春」にふさわしいものと、貴重で内容のある年に思えてなりません。

昨年京都でO・Bの皆様が演奏会を持たれたと聞き、御活躍の様子に一員として慶に耐えません。その時交際のできました塩見一郎氏は、同大マンドリンクラブ現役中、幹事長、コンマスと活躍された方で、人柄も素晴しく、はじめて誠実な方でした。又時々ました顔で面白い事を言われるユーモアもある方でした。今も音楽関係のお仕事と聞いて、「さすが」と思って居ます。

今後共皆様の増々の御活躍、御発展を、遠方ながら祈り居ります。

メキシコから

838年卒 海野 加代子（旧姓 森本）

第13回卒業生の一人です。あまり熱心に練習したわけでもないので思い出はクラブのことばかり、高校時代 誰でも味わうだろう初恋、又反対に失恋、その中でもみくちゃにされながらもやっぱり楽しい思い出が多いようです。音楽が趣味というには程違ひ知識でも、オタマジャクシを見つめているとなんとなく優越感を味わいわかったような顔をしていましたのだと思います。全く高校時代とはいひものです。ひょんなことから結婚してメキシコに渡り、当時、こんな所に連れて来られた、だまされた、とツツツと言つて居りましたが近くに高校プレアン出身の奥さん（旧姓 村本康子さん）がやはり結婚して来て居られ4～5回合奏のまねごとのようなことをしましたが、ガチャガチャという程度の合奏でも心が晴れました。メキシコに来てから10年になりました。こうなるとどちらがだましたのかだまされたのか、そんなダンナ様にギターを聞かせなぐさめてあげたい気持はいっぱい。でも、プレアン三年間の気ままな練習ではギターを持つ手さえふるえてしまう今日この頃です。

青 春

S 38年卒 田 屋 敏 子(旧姓 今井)

青春の思い出といえばすべてクラブ活動を通しての思い出ばかり。一、二年の頃毎日川西校舎から横山へ通ったこと、演奏の為に山口へ行って一泊したこと、大島へ行く船の中での楽しかったことなど、懐しく思い出されます。その中でもとくに心に残っているのは、たぶん三年の時、秋の演奏会で弾いた“白鳥の湖”なんだか自分一人で弾いているような錯覚がおきるほど1st マンドリンが一体となっていたような気がしたことです。あとで客席で聞いていた友達がやはり同じような事を言っていました。10年余り経った今も忘れないのは余程印象が強かったのでしょう。

今ではギターはともかくマンドリンなどはほとんど手にすることのない毎日ですが、マンドリンに限らず楽器を手にするのは本当に心をなごましてくれます。家庭の中で合奏できたらと思ってますが、親の心子知らずでなかなかうまくいかないようです。

想 い 出

S 38年卒 山 田 槟 子(旧姓 朝枝)

何年前だったのか……お手紙をいただきて一生懸命思いました。ずいぶんと昔になりました。中学生時代から、人伝に聞きあこがれていたプレアンに、入学するとすぐに入部。でもあのスバルタ教育には驚きました。

廊下に椅子を持ち出し、並んで練習。向うの方から順番に上級生が教えに来られると、手はふるえ、胸はドキドキ、なかなか実力(?)を発揮出来なかったのを良く覚えています。でもその厳しさも今ではとても懐しく……。のんびりとした主婦業にドボンとつかっている私は大いに反省。

でも十月にある秋季演奏会には、隅っこながら参加させてもらいうれしくてうれしくて。それも盲腸の為ダメになってしましました。本当に我身の不運を嘆いたものです。不運といえば、熊谷先生が亡くなられた時も、丁度岩国に帰っておりましたのに、お葬式にも出られず、今にもパンクしそうな大きなお腹をかかえていました。あれから10年、早いものです。

下の子も手が離れ、岩国にいたらマンドリンを手にすることも出るかも……と淡く期待を抱いている今日この頃です。

美 と 和 と 愛

S 39年卒 新 井 義 悠

今さらの様に時の流れの早さを一抹の寂寥感と感慨を持ってつくづく思い知らされたのもこの雑文を書こうとペンを執った事がキッカケである。それでも小生の青春はマンドリンを取ったら……何もない!と自信を持って断言出来る? その間——何の迷いもなく一途に且つ、悠長にダラダラと時々まじめに弾き続けて来た。

高校時代は朋友藤沢君コンマス小生ドラトップ(他にいなかったので)宮崎君チェロトップ藤井君ギタートップ他マンドリンの竹本君と女子数名で熊谷先生厳しく且つ熱のこもった指導の下、和気合々でチームワーク完璧、互いに切磋琢磨、士気高揚、品行方正——と言った状態に少しでも近づく様努力したかった。しかし、現実は先生に対する依存心も手伝つてか個々間のコミュニケーションや交流はスムーズだったがアンサンブル全体の和を意識しての積極的働きかけは残念なが



らなかった様に記憶している。

唯、先生を頂点として先生に対する畏敬の念という共通意識による何がしかの連帯感は漂っていたように思う。そう考えてみると高校卒業後プレクトラムアンサンブルの活動をしなくなつて夫々の事情があるにせよ、大半がバラバラで交流音信も途絶えがち～～と言う事態になってしまったのも自明の理と言える。それにしても残念至極、大学のクラブは入部当時は小規模で高校プレアンの先輩川本良人氏が卒業後、指導にあたられていた。岩国くんなりから花の京都に赴いた私にとってはそれは心強い存在であった。それから4年間マンドリンの練習とクラブの活動の為に学校に通い、たまたま時間があれば授業に出ると言った極めて文化的、主体的、能動的、且つ独創的の学生生活もすごした。この間に世の通念や常識にとん着せずにロマンを追いかけ現実や生活に立脚した堅実な発想の出来ない今日の私の萌芽があったのかも知れない。今思うとその表れと思われる4年の最後の冬、第一回の独奏コンクールに自分だけの力でどの程度通用するか今までのマンドリン生活の一区切として誰にも内緒で応募した。ところがコンクール直後、鈴木静一先生（3年の時から無理をお願いして御指導を仰いでいた本邦斯界の巨匠）に叱られてしまった。その時、折角身近貴重な人物と接する機会に恵まれながらそれを活かせなかつた自分の軽率さに気がついた。先生はさぞはがゆい思いをなさうだらうとただただ恐縮の至りだった。でも過ぎた事だし、決して無意味ではなかつた様な気がそれを契機に謙虚に勉強して行きたいと言う気持が湧いて来た事も事実である。それから卒業して塩見さんをリーダーとしたフィオレンティーノの仲間とクインテットとジョイントリサイタルを皮切りにアンサンブルとして岩国や高松に遠征したり、レコードィングしたり定期演奏会を開いたり合宿したり、その一つ一つが貴重な素晴らしい体験だった。第一回のコンサートの時には藤沢君も一緒にそのファイトは皆の士気高揚に多大な影響を与えたものだった精緻なアンサンブルの妙味、音楽を創る時の前提であり、又音楽によって生まれる“和”的深遠さ、尊さを実感したのはこの頃だった。そしてその頃の岩国のアンサンブルもその和の土壤となるべき年令や環境を超えた連帯感や仲間意識があった。ふとどうして色々な環境や状況の違う者同志がしばらくぶりに会っても毎日顔を合わせているかの様に何のてらいもなく和氣合々と仲間としての付合いが出来るのか？と考えてみてその理由らしきものが解ったような気がする。それは今さら言うべきものではないかも知れないが音楽（マンドリン）を愛する純粋な心が他の何をも超えると言う共通の意識がメンバー相互の心の絆となって息づいているのではないか――と言う事である。しかしこのアンサンブルもまた未完成でむしろ薄氷を踏む感を免れない。それは何故か？私は考るに確かに仲間意識や連帯感や共通意識は部分部分を見ると確かにあるが、全員がひとつにまとまると言ったアンサンブル全体の言わゆる“和”が出来上がってない様に思う。この“和”はどんな卓越したテクニックでもどんな盛大なコンサートでもどんな多彩な行事でも出来るものではない。メンバーの一人一人が心をこめて純粋な精神活動である音楽を通じて、美を求めるなら、自からそこに自然な虚飾のない真実の“和”（一体感）が生まれて来る。それはかけがえのない崇高な“愛”と言えるのではないだろうか。

広い心と強い責任感と熱い情熱があれば明日にでも出来る事だと信ずる。勿論私も含めて各々が自らを謙虚に反省し、このアンサンブルが脈々と血の通う“愛”的生命体となり我々の生甲斐であり宝となる様、奮起しようではありますか。ネエ ミナサン！

プレアン・ICMCと私

S 39 年卒 藤 沢 幸 昌

私がプレアンを巣立つて以来、早いもので、13年が過ぎてしまつて、ICMのメンバーの中でも知らないうちに平均年令を高する部類に属するようになってきている。

今日は、プレアン在籍当時（S 37、38年の頃）のことを、できるだけ思い出しそう――といつても、もう既に殆どのこと忘れてしまつてゐるが――同年代の仲間達といつの日か、当時の思い出話しが出来るよう、書き記してみたいと思う。

私の出演した定演は第14～16回であるが、定演のことよりも仲間と必死で練習したことや、親睦を図るといつてはソフトボール等の遊びに興じたこと、帰りがけに有楽食堂で皆と素ウドン他を食べたことなどが思い出される。

昭和37年度は第15回の定演であり、記念演奏会ということで、熊谷先生以下部員も練習の取り組み方が、一味違つたよう思う。私は2年生で、その頃は、マンドラを弾いていた。練習仲間には、高島さん、山中さん、新井君、竹本君があり、練習も他の、どのパートよりも多かったし、技術的な面でも、どの時代のマンドラにも負けない自負を各自、持っていたようである（但し、第三者から、そのような批評は一切、聞いていないが……）。夏休みも相当な日数を練習に充て

たように思う。練習の合い間に錦川で泳いだりしたのは懐しい思い出である。

第15回定演は盛り沢山であった。「ローラ」、「バクダッダの太守」、「マンドリンの群れ」等であり、当時としては、大曲であった。16分音符から成る早い、メッセージに指がついて行かず、授業中居眠りをしなければならない程の練習を重ねたものである。その甲斐あってか、演奏会は大成功であった。

明けて、S38年は、我々（新井、竹本、藤井、宮崎の各氏と、それに石井のチヨコ）が、その年の男性主力メンバーであった。各自、第15回の定演に劣らない立派な演奏会にしようと、大いに練習に励んだ。

この年、忘れないのは、NHK器楽コンクール山口県予選に出演し、非常に幸運なことに、最優秀校に選ばれたことである。その時の演奏曲目は、「レナータ」であったが、この曲は、今までに、何度も演奏したけれど、その度にいつも、その日の事を思い出す思い出深い曲である。

帰り途、例の有楽食堂で祝杯のジュースや素ウドン（この時は、カレーライス程度だったかもしれないが）を大いに食べたり、飲んだりして祝ったのが頭に浮んで来る。

中国地区予選では、然しながら、プラスバンドに一位を奪われてしまった。非常に残念ではあったが、純粹のマンドリン音楽が正当に評価されなかった為の結果だと、各自、その結果を解釈し、その報を聞いたように記憶している。プレアンは、翌年も、その次の年も山口県代表になったが、中国地方の壁を破れず、何回目かの後、出演を中止したと聞いている。

秋の第16回定演は、今、考えてみると、個人プレーが若干、多過ぎたような傾向があったようで、残念ながら、完全な大成功とは言えなかったように思う。マンドリン、ギター、マンドラ独奏ほか、重奏類が稍多過ぎたようである。但し、奏者の技術は、相当なものであったようである。中でも、新井君は、その後、立命大に進み、その指導を行ない、レベルを高め、更に、卒業後は、マンドリン独奏コンクール一位となり、素晴らしい演奏家に成長して来ている。高校時代と一緒に頑張った仲間の一人が大成してくれていることを、非常な誇りに思う。

卒業と共にプレクトラムソサエティに加入したが、あちこちに移り住んだために、定演にも2～3回出ただけで、10年余りが過ぎた。ソサエティは、その間に色々と組織変更が成され、強化され、現在のICMCへと発展成長し、今年20才の誕生日を無事、迎えたわけである。ここに至るまでに、先輩後輩の各氏が並々ならぬ御努力をされ、現在も続けられていることに対し、先ず、深く御礼を申し上げておきたい。私は、3年前に一応、カムバックという形でICMCに加わり、毎年の定演を楽しみにしている。東京にも行き、京都の記念演奏会にも出た。今は、10代の時程の情熱は、率直にいって失なってしまったが、できるだけ、長い間、ICMCのメンバーでありたいと考えている。

ICMCの今後の進む方向として、今年の定演は一つの典型だと思う。市民大衆に或る点で同調し、且つ、自らの高い音楽性を探究する。又、市民の参加（昨年の詩の朗読などは、その一例）に対しても積極的な姿勢で臨む。このようなことを今後も続けていって戴きたい。

最後に、我々のICMCが回を重ねて一層発展して行くことを同志と共に祈りつつ、思い出の記を終えたい。

プレアンの想い出

S39年卒 松井恵子（旧姓 大原）

合掌 皆様方、お元気でお過ごしございましょう。

私が、高校を卒業してもう十余年の歳月が過ぎ去りました。

今、先輩から在学中の思い出をとのことで、つたない文章にて失礼ではございますが、筆を取りせて戴きました。

あれはまだ男性の方が受験等余り気になさっていなかった時ですから 二年生の頃だったと思います。

いつものように合同練習を終えた後、そのまま帰ってしまうのが物足りない位、気分が乗っていたのでしょう。

同級生の有志十名位が居残りを決め、手持ちの楽譜を片っぱしから演奏し始めました。もちろん、みんな一生懸命ですから、外の様子を気にする者はいませんでした。

かなりの時間が経ってふと外を見たら、もう真暗で何も見えませんでした。（多分、七時半前後だったと思います。）

それからはもう後片付け、戸じまり等、夢我夢中で済ませ、女子が先に校庭に出、男子が電灯を消して、“さあ帰ろう”と校舎を横切っていたら（その頃は横山に校舎がありました）そこに生活指導の先生が待っていましたから大変です。

それからはもう皆様の想像におまかせしますが……

学年、組、名前を控えられ、きっちりとご注意を戴いて、みんなしょぼんと帰宅しました。

次の日、朝礼にて再度注意を受け、これにはいさゝか参ってしまい、以後は時間厳守を心がけました。

この事件で、先生や部員の方々に迷惑をかけてしまい誠に恐縮した次第です。

でも、このような苦い体験も、今、この歳になって、高校時代の思い出として一番先に浮かんでくるのは、ギターを手にした一時がとても満たされていたからこそだと信じています。

現役で活躍中の皆様、大いにハッスルして、悔いのない青春時代を過ごして下さいませ。

最後に、私達に多くの教えと、思い出をくださった今は亡き熊谷先生のご冥福を心よりお祈り致しまして終りにさせて頂きます。

再拝

歓びのハーモニー

S 40 年卒 大 谷 恵 子 (旧姓 大江)

あれは確か高校二年の夏の終り、残暑のきびしい頃だったと思います。宇部の渡辺翁記念館のこと、部員一丸となって、肩をたたき合い、感激に浸ったことがありました。全国器楽コンクールで山口県代表に選ばれたのです。第三位入賞は何とか……と、各自自負していたものでした。所が、その期待をはるかにうわまわって、なんと第一位！その時、誰もがその目、その耳を疑い互いに確め合い、そして、本当だと分ると、ただただ無言で抱き合い、感激の涙にむせんだものでした。全体の和、ハーモニーの美しさ、貴さを、あの時程快く感じた事はありませんでした。思えば、マンドリン馬鹿の三年間はそのまま、私の青春の日々であったと、思い返します。あのピーンと張りつめた緊張感、各パートとの共和を基礎とした連帯感……思い起せば、一コマ一コマが、今も私の脳裏に焼きついていて、又とない一途な青春の炎であった、と、懐しく憶っています。今は、そのマンドリンとも縁遠い存在となっていますが、つたない私達の歴史を若い皆様方に永遠に受け継いでいって欲しいと、今はただ祈るだけです……。

熊谷先生のことなど

S 40 年卒 森 繁 英 雄

岩高を卒業して、もう12年になります。大学に在学中の頃は、マンドリンをつまびく機会も多かったのですが、大学卒業後、あちらこちらと放浪してからは、マンドリンとも縁はなかったように思います。けれども、雪国の街角を歩いていると、どこからともなく聴こえてくる懐しい音色に、ふと佇み、「ああ、マンドリンだ」と呟きながら、ある哀しみに似た感情に震えること也有ったと思います。スナックの止まり木に坐って、水割りを飲んでいるとき、あるいは、喫茶店の片隅で珈琲を飲みながら、好きな人のために恋文を綴っているとき、ふと流れる流行歌が、マンドリンのイントロで始まるとき、思わず、魂がゆさぶられるような気がしたものでした。

大学時代に買ったマンドリンも、放浪には邪魔だ、と思い人にあげてしまったので、マンドリンに触ることもない生活を続けてきました。が、先日、妻が「これ、友達に借りたんだけど、弾いて呉れない」と言って、マンドリンを差し出しました。7年近くもロクに弾いていない私のことです、ピックをつまんだ指や手が、思うように動きません。弦を押さえる左手の指も痛む……。「昔は、こんなことはなかったんだがなあ」と思いながら、「郷愁」を弾きました。四苦八苦しながらも弾き終えると、妻が「もっと、弾いて」とせがむのです。私は、曲も忘れたし、指が痛いから、とそれ以上弾



きませんでした。

このように、マンドリンとは縁遠い生活をしている私がプレアンに入部したのは、昭和37年の4月のことでした。自分から進んで入部したのではなく、幼い時からの遊び友達であり、中学時代のブラバンの先輩でもあった竹本さん（現在、アメリカ在住）の勧めで何の気もなく入部したわけあります。

さて、何の気もなく入部しますと、そこ待ち構えていたのは、厳しい練習と怖い先輩たちでした。生来の資質が不器用な私は、怠け心も手伝って、思うようにピックが弦をはじきません。手に力は入り姿勢は悪くなるし、何度も真剣に退部を考えたものです。けれども、上達しないまま、するすると時間が経ち、秋になりました。秋には定演があります。しかし、幸か不幸か、この大切な時、指に豆ができ、そこが化膿したのです。おかげで、定演にも出られず、練習もできませんでした。

虚弱だった私は、こんな風によく怪我をし病気をしたので、熊谷先生に「おまえは、よく病気になるなあ」と笑われたこともあります。

その熊谷先生のことですが、先生は怖い、という印象が卒業するまで残りました。眼鏡ごしに、ギョロリと睨まれると、臆病な私などは、まるで蛇に睨まれた蛙のように身を縮こませたものです。しかし、人間には多面性がありますから、ただ怖い先生というイメージだけでなく、先生は、優しさや淋しさも兼ね備えておられた、と今になって思うのです。

あれは確か、三年生の冬だったと思いますが、先生のお宅へ伺おうとしたことがあります。その時、先生は風邪で寝込んでおられ、「風邪をうつしてはいけぬから」という先生らしい配慮で、またの機会に、ということになりました。

思えば、それが先生のお話を伺う最後のチャンスだったのです。

先生が旅立たれて10年、私は故里に戻り、塾などをやっておりますが、塾へ来る生徒の中にプレアンの部員がいまして昨年の定演には10年ぶりで聴きに行く機会を得ました。

「立派になったなあ」

これが私の感想でした。

立派な演奏の舞台裏には、必ず日々の厳しい練習があるものです。それは何事にも通じる筈です。私のようにマンドリンとはあまり関係のない文字を、30年になってから志すようになった人間でも、それを日々感じています。

高校在学中、あまり熱心に部活動をやらなかった私が、このような雑文を載せることは、実におこがましい話なんですが、部室の片隅にいた一人の元部員として、クラブの発展を祈りつつ、敢えてペンを執ったわけであります。

おもいで

S 41年卒 坂井和子（旧姓 十時）

熊谷先生の厳しいお顔と、甘い鼻にかかった様なお声と……。先生のお陰で、私はマンドリンと出会うことができて思い出多い学校生活を送ることができました。横山の緑深き静かな環境の中で、マンドリンの音の流れはピッタリでした。入部して早々、一年生は先輩にことば使い等の注意を受けたこと。数々の演奏会、コンクール。往復のバスの中ではしりとり歌がガイドさんにほめられたり（あれだけ練習すりゃあネーの声がありました）日が暮れて帰りのバスの中での先生の怪談。ねこの鳴声を発せられたり、ヒャー、キャ。交歓会、クリスマス。会場準備は講堂の重い長椅子をよしてうっすらと泥で白く粉吹いていた床板を掃き、そこへバケツで水まき。秋の定演のポスターを皆で書いて床に並べて、各学年3等迄かナ、先生がチョコレートを下さったり、レクレーションで根笠へ行き、先生がドラ焼を下さり、帰りの山道は、英語の名詞のしりとりをしたっけ。忘れかけていたのを思い起こすと尽きないものです。卒業しても、マンドリンとの縁は益々深くなりました。大島の養老院に慰問に行き、お年寄から「山嶽詩」のアンコールを受け、特にその曲はよく練習していたので、耳に感心しました。寒い時で、足が寒くありませんかと慰められました。

43年、先生の突然の入院と死で、皆は深い驚きと悲しみに沈みました。それをのり越え、先生の偉業を継ぐには、さらにクラブを盛りたてることだ、夏の定演を一層充実しよう、ということで、広瀬高校をお借りし、合宿をすることになりました。私はついでいくばかりでしたが、スケジュール表を渡されて、皆歓声をあげました。何と、土曜の屋から夜遅く迄、日曜の朝早くから（これ位は朝メシ前）少しの休憩だけで、一日中びっしりの練習です。初めてのことで行く迄は不安でしたが、汗を拭きながら練習する度に息が合ってくるのが感じられ、好きな事が思ひだけて幸せい氣分でした。休憩時間が、氷を食べに行って少々長くなったとかどうとかいう噂がチラホラ（その頃のクラブの流行語）。合宿を終え

て帰りの岩日線のディーゼルの中で、誰かまだ一人マンドリンを弾いた人がいました。その時はだれもさすがマンドリンの音にはうんざりして、耳をふさぎたかった位なのにです。さて弾いた人は誰だか覚えている人ありますか。演奏会一週間前は毎晩練習で、私の恒例の夏やせが特にひどかったのですが、気持は張切っていました。その年の定演の開幕は「落葉の精」で、真暗な中で譜面台にローソクをともして、先生の御冥福を祈りました。今までのよりはより充実していたと誰もが思ったことでしょう。

左の四本の指は、年中タコができていて、ハードな練習をすると堅くなり、じゃまになり爪切で切っても痛くありませんでした。マンドリンの弾き方も、私の場合は、高校の時はがむしゃらな、強弱に気をつける、早くならない様に位でしたが、卒業して感情の表現に気をつけだした様です、もっとも手の方が動かなくて、くやしい思いでしたが。

数々の演奏会や、きびしく楽しい練習も、主婦となった今はなつかしい思い出ですが、引込み思案の私が、友達の結婚式のお祝いに弾いてあげられたし、子供のエレクトーンの教育ママになっていますが、今の生活に何らかのプラスのつながりがあるだろうと思っています。

トレモロのひびき

841年卒 福地佳子(旧姓 村重)

私が卒業致しましたのは、41年だったと思います。岩国を出ます時、思い出の品を箱いっぱいにつめ実家に残してまいりましたから、はっきりとは致しません。その大半はマンドリンにつながるものでした。今から考えますと、私の青春はマンドリンに始まりマンドリンに終ってしまった様な気が致します。中学2年生の時、はじめて岩国高校のマンドリン演奏会を聴きました。中学生の女の子をどんなにあこがれさせたことでしょう。高校に入学したら、必らずマンドリンクラブへ♪とその時決めた事を覚えております。念願かない、あこがれのあのマンドリンの入ったケースを持ちました。そのうれしさ、きはずかしさ、みなさまにもお心あたりがおありと存じます。2年間、川西と横山の長い道のりを片手に重いカバン、片手にマンドリンをさげよく通ったものだと思います。最初は横山の講堂の地下のうす暗い所でのトレモロの練習。家が近いせいもありまして、勉強そっちのけでマンドリンを家に持ち帰り、音階の練習を。とりあえず目をつむって「日の丸」からと、ドドレミミレ……と目くらめっぽうに、うちならし、音階を手で覚えようと必死でした。元々、音楽的センスのない私は練習でカバーしようと、上手な方の音を聞き、練習したものです。あの時のあのやる気は、どこから出て来たのでしょう。今では考えられません。はじめて先輩方々の練習に入れてもらいました時は、うれしさと緊張と興奮で、熊谷先生の指揮をみますどころか、指を弦の上で踊らすだけでした。どなたか見ていらっしゃったら、きっと吹き出しておられたことでございましょう。そうそう言葉使いが悪いからと、板の間にすわらされ2年生の方からお説教を受けた事もございました。言葉使いが気になりますのはその為でしょうか。

レナータを奏きましたNHK器楽コンクール、連合音楽会、定演とあっという間に1年が過ぎました。そう、クリスマスは感激でした。熊谷先生のゴンベエの唄。私は決して忘れる事はないでしょう。時ある事に歌いますが、その都度、先生の強烈な印象がよみがえってまいります。「バカになることも必要だ。仲々できない。」とおっしゃって「ごんべえが種まきや、からすがはじくる。3度に1度はおわねばなるまい。ズンダラズンダラズンダラズ。」と歌われたあのお顔、身ぶり、手ぶり、熊谷節も、はっきり浮んでいます。3年間に3度聞きました。今もなお歌っておられるような気が致します。

やはり私は、音楽はだめなんです。1年生、2年生、3年生の時にどんな曲をやったかほとんど覚えておりません。ただ、無我夢中で奏きましたレナータ、口短調、ミレーナ。間奏曲のように気分がのり体がゆれ動くような曲。蝦夷のように場面が目をつむると浮かんでくるようで、つい弾き忘れた曲。(実は、ボーとしていて、とちったのでしょうか)これらの曲は、今も気分的には弾けそうです。ピックを持ってばとでも弾けないでしょうが。3年生になりました1年生に教えたことも……。怖わかったでしょう。1年生だった方。ごめんなさい。怖わかったと人づてに聞いたことがあります。

(ションボリ。こんなにもやさしいのに。)そして3年生。「幸福の星」で山口高校に器楽コンクールの優勝をゆずりました。すばらしい出来でしたのに♪予感してか発表の前から涙が出、発表と同時に、ドッと流れ、額中涙です。バスに乗りこむみんなの顔は?うつむき、目が赤いのです。仕方のないやしさでした。それほど2校ともすばらしかったと思いました。その時でございましたか、ファースト・トップの松田さんが、安定剤を飲まれ、ねむくなり、熊谷先生がトイレに行って来いとおっしゃったのは。「幸福の星」といえば高校最後の最後の曲だったと覚えております。体いっぱい指揮

棒をふっておられる熊谷先生の眼鏡に涙が……。熊谷先生は、私達に喜怒哀樂をはっきりぶつけて下さった先生がおありでしょうか。それにとてもこわかったんです。裏がえせば、もっと先生に近づきたかったのでしょう。卒業の時、先生がやさしい目で握手して下さった時は、偉大なものにふれたような感動を覚えました。それにしても、卒業してはや10年余り。部員1人1人でかもしだした人間模様（ちょっとオーバーですが）、出来事はどうしてこんなにも今なおはっきり浮んで来るのでしょうか。定演のはじまる前のあの緊張感。こうして書いていますと胸が高なってまいります。すばらしき3年間でした。これらはクラブでの思い出です。またちょっぴり、もっと勉強しとけばと後悔もしておりますが。

へたな文をだらだらと書いてしまいました。でも思い出のはんの1つかみなのです。書かずにそっと心の奥にしまっておきたいこともありますもの。曲を通して、楽器という媒体を通して部員全員が一体になれるマンドリンクラブ。入っていて良かったと思います。「マンドリン 弾くにはじめて 我忘る」などと手帳に書いてありました。悩み多き青春時代どうにかきりぬけたのもマンドリンのおかげでしょうか。それともマンドリンを手にしたから悩みも多かったのやも知れません。そのマンドリンを、子供たちの手が離れましたら、どこかの小さな同好会で手にしたいと思っております。

最後にプレクトラムアンサンブルと市民マンドリンクラブの発展を祈ってペンを置きたいと存じます。

拝啓 熊谷先生

S 41年卒 藤本匡孝

拝啓 熊谷先生にお会いしましたのは、そう昭和43年春、臥竜橋の袂だったでしょうか。あれから早いもので10年が過ぎようとしています。この間いろいろな事があり、何からお話ししてよいか迷っています。

兎角、プレクトラム・アンサンブルの3年間に教わったことは、今日でも非常に心の支えとなっていることは事実です。マンドリンの技術のみならず、人間にとって最も重要な礼節・協調と書けば際限がありません。

大学入学後、最初にしたことはM・Cの扉を叩いたことです。そのM・CのO・BにP・Eの米本先輩がおられ、「お前も岩国か」と言われ、翌日から合奏に入れていただき、5月春の定演、その夏の演奏旅行と、メンバーとしてよりも楽器運搬の頭数の性格が強かったのですが、多忙なスケジュールでした。辛くても楽しい毎日でした。2年の時、比留間絹子先生のお弟子さんの杉原里子先生とお話しする機会を得まして、岩国来訪の話の数々を聞きました。風光明媚な横山、錦帯橋が強く印象に残っておられるそうです。これが縁で杉原門下発表会で、私としては初の指揮棒を持たされ、大変勉強になると共に、指揮に興味を抱き始めました。この頃から鈴木静一先生に親しくしていただき、「音楽とは何ぞや」と、音楽について教えを受けました。丁度立命館大M・Cで新井先輩、日本女子大M・Cで岩見女史が頑張っておられ、鈴木先生を通じまして、先輩同輩の活躍を知り、参考に刺激になりました。3年次の夏、演奏旅行で広島に帰った際、多数の先輩後輩が激励に駆けつけて下さり、大変心強く、又P・E同窓を嬉しく誇りに思いました。大学4年間、学内学外を通じて得ました数多い楽友は今日でもそれぞれ歩んでいる方向は異っていても、強い絆で結ばれており、有難く思っております。

大学卒業後も、マンドリン合奏の妙味が忘れられず、「コムラード・マンドリン・アンサンブル」なる社会人サークルの結成を呼びかけまして、当初20数人の予定のアンサンブルが80余名の大編成にふくれあがり、嬉しい悲鳴をあげました。これも「コムラード」（マンドリンの好きな仲間達）の名付け親でもあります鈴木先生の陰陽での御支援御指導、又当時東京出張中の山添先輩、新井先輩、和久本君、瀬村君等、P・E O・Bの方々の絶大なる御協力があったことを記しておきます。」又慶應義塾M・Cの育ての親でもあります服部正先生の御支援も忘れられません。「コムラード」は年2回春秋の定演を行ない、第3回の昭和50年3月、岩国市民M・C40余名の上京、賛助出演を得まして大成功をおさめることができました。

第1部コムラード・マンドリン・アンサンブル 邦人作品より

- ・「全ては去れり」を主題とする8つの変奏曲

堀 清 隆

・雨とコスモス

武 井 守 成

・交響詩「北」

鈴 木 静 一



ヒロソーコンサート音楽会(T V)S. 40.7.11

第2部 岩国市民マンドリン・クラブ外人作品より

- | | |
|----------------|-----------|
| ・ローラ序曲 | H. ラヴィトーノ |
| ・悲しい時嬉しい時 | G. アネリ |
| ・聖ボニファチオのオペルト伯 | A. ヴェルディー |

第3部 コムラード・マンドリン・アンサンブル マンドリン協奏曲より (マンドリンソロ 新井義悠, 田村隆司)

- | | |
|-----------------------------|--------|
| ・アンドンテと変奏 | ベートーベン |
| ・「荒城の月」を主題とする2つのマンドリンの為の変奏曲 | 服部正 |
| ・チゴイネルワイゼン | サラサーテ |

第4部 合同演奏

- | | |
|---------------|-------|
| ・交響詩「比羅夫ユーカラ」 | 鈴木 静一 |
|---------------|-------|

この定演を最後に私は広島にUターンしましたが、現在も新井先輩、藤岡君、藤島君等頑張っておられます。

今年昭和52年は、P・E第30回、岩国市民M・C第20回(創立20周年)と忘れられない年となりました。2年前より微力ながらP・Eのお手伝いをさせていただくようになり、久し振りにP・E現役諸君と接する機会を得ておりますが、時代の推移はありますても、P・E精神は脈々と継承されていることに驚いております。これも熊谷先生の播かれたプレクトラムの種が順調に育っている証拠でしょう。山深い坂上より藤沢先輩に続きP・Eに入部し、熊谷先生、諸先輩、同級生、後輩に巡り会えたことに感謝の意を表すると共に、今後も出来る限りマンドリンを弾き続けていきたいと思いを新たにしております。

ひょんなことから「岩国プレクトラム30年史」の主査を引き受けまして、試行錯誤すること約2年、三浦先輩他実行委員の方々から、煽て賛され励まされやっと今日こうして発行のめどがつき、私自身の原稿を認めていたる訳ですが、準備段階の資料を捲りますと、あの日あの時の出来事が一つ一つ脳裏をかすめます。振り返ってみると約2年前、偶然の経緯から記念誌発行の話しが持ち上がり、安直、素直、朴訥な発想でのスタートでした。「さらい年は20回じゃけー、何かせんにゃーいけまーのう」単純な気持でした。半年くらいは途中の準備作業は忘れて、やる限りはいいものをノと夢ばかり際限なく拡がり、收拾のつかない状態でした。完全を期した住所録、蔵譜リスト、年譜、ラジオ・テレビ・新聞・週刊誌にと、当初の計画は遠大なものでした。しかし、感情論だけでは作業は進展せず、約1年半前、大筋の計画を立案し、如何なる方法で、内容でと策を練ってきました。そして計画表、趣意書の作成を開始し、岩高P・E第30回定演記念、岩国市民M・C第20回定演(創立20周年)記念、熊谷先生没後10年と3本の骨子の下、資料関係、関係方面からのメッセージ、寄稿関係、住所録と具体的な内容作業に着手しました。「岩高P・E15回定演のあゆみ」が大変参考になり、P・Eのその後15年のあゆみ、岩国市民M・Cの20年のあゆみを記し、そして熊谷先生の人間像を描き出そうというのが目標でした。しかし、残されている資料と言えば、プログラムと前回のあゆみくらいで、その他は殆ど現役、O・Bの記憶に頼る方法しかありませんでした。当初、殆ど三浦先輩一人の手により進められて参りましたが、何分にも少人数の人力では限界があり、今年8月27日記念誌実行委員会の発足、各卒業年次、岩国市民M・Cの代表制を探るに至りました。諸般の事情を考慮して、岩国、岩国近辺在住の有志の方々に御尽力をいただき、やっとめどがついたる訳です、その後、より具体的な編集作業に入り、編集委員の選出、9月4日第1回の編集委員会を開き、山添編集長の就任、詳細な部分の作業に移って参りました。編集作業においても省力化、合理化を図り、各作業の分担制、縦横可能な限りの細分化を行ないました。そして回を重ねること十余回の編集会議で、各位からお預りしております貴重な原稿、資料を3本の骨子の下、いかに編集するか討論の末、このような形でやっと誕ぶ声を上げることが出来ました。心より御協力に感謝申し上げたいと思います。又、毎回夜遅くまで、心良く会場を提供して下さいました石川君の御家族、編集委員の御家族の御協力無しでは考えられません。

何の強制力、束縛力をも持ち得ないアマチュアのサークルで、これ程まで青春の炎を燃やす原動力、卒業後お盆になると各地から帰省され、楽器を持って練習会場に三々五々集うこの妙な現象、又約2年の月日を要しましたが各関係方面各位から心温まるメッセージ、寄稿、寄金と呼べば応えるコミュニティ、とこれらは何であろうかと、つくづく思ひざるを得ません。熊谷先生のお人柄でしょうか。マンドリンの持つ魔力でしょうか。それとも一ローカル都市、岩国になせる業でしょうか。作業が進展するにつれて、この事が私の脳裏を掠めるようになりました。自問自答しつつ、書いておりますが、それにつけても熊谷先生がお元気でいらっしゃればと思ひは募るばかりです。もう5年でも10年でも長生きしていく下されば……………と

「30年史」編纂も大詰を迎えてデザイン、装丁の段階になってきました。これまでプログラム位の編集経験のないもの

ばかり、寄って集って「あーでもない、こーでもない」と議論を重ねましたが、前回15回あゆみの諸先輩の御苦労御苦心が身に染みて分かりました。スタート当初の目標よりかなり軌道修正をしながらの作業でしたが、この小冊子が今年12月24日発行されること、昭和24年12月24日岩高プレクトラム・アンサンブルの誕生と相俟って、感きわまりありません。願わくは、50年100年と岩高P・E、岩国市民M・Cの発展と、熊谷先生の御冥福をお祈りしてベンを置くことにします。

岩高プレクトラムソサエティから 岩国市民マンドリンクラブへ

841年卒 和久本 忠 史

高校を卒業して早くも11年経過、ほんとうに早いもので、私達の年代も30才、なんとも、信じられないような、気さえします。高校の時から、ずっとマンドリン、ギターを続けていれば、14年のキャリアということになります。しかし私の同級で、今だに続いているのが、私と、2年前より趣味が好事、仕事とし広島楽器を営んでいる藤本君と、二人だけです毎年欠かさず定演に参加し、又現住所の岡山での演奏活動を続けられることに、自己満足をしている、この頃です。あと何年できるだろうか、などと考えますが、おそらく、今演奏活動を、やめることは、考えられません。地理的な問題がありますが……それは仕事を持ていれば、どうしようもないことです。ところで、私の年代は、卒業後岩国に在住するものが、男性では、私と角君、中川君、あと女性は、ほとんどの人が、岩国に居てくれて、私の同級生がクラブの中心となっていました。このごろのOB会の活動は、現在、鉄筋のりっぱな公民館ができていますが、この建物の前にあった岩国小学校の分室の跡が、市立公民館となり、古い木造の建物の一室を、週一度の練習場所としていました。私は幹事を仰せ付かり人集めに苦労をしたのをよく憶えています。冬の寒い日は、練習場に行くと一人だけの時もよくあり、いつも幹事会では、どうすれば人を集めることができるか?そのことばかりでした。人集めの手段として、年一回の定演だけでなく、なにか活動をと思い、親しかった、昭和町に開業されている、中本外科病院の院長先生の紹介で、大島郡の養老園、母子寮、又徳山の肢体不自由児の施設鼓ヶ浦学園等に慰問演奏に行き始めたのがこの頃です。このような活動を取り入れながら、定演までの長い一年を繋いでいました。定演は、同窓会的な感じが強く、今から比べると練習も厳しさが、あまりないように感じていました。その頃はそれによかったのかも知れません。2年後、長い間の音楽活動の功績を認められ42年の秋岩国市文化功労賞を受賞された、私達の恩師熊谷幹雄先生が胃癌の為他界され、私達卒業生が告別式の時号泣したことを見忘れることができません。その後、富沢会長、現会長の三浦さんをはじめ先輩が立ち上り、先生の偉業を継いで、岩高プレクトラムアンサンブル、岩高プレクトラムソサエティをより充実したものにする為努力されたのです。短い期間のうちに、実力のある、マンドリン合奏団に育て上げる、動力となったのです。43年の定演は追悼演奏会として、全員一致協力し、以前のどの定演よりも強い団結力で、最高の演奏をしたと、だれもが感じたに違いありません。この11回の定演より高島さんが岩国に帰って来られ、指揮者として、熱心に活動を開始され、今日ある市民マンドリンクラブの、大きな原動力となったことも忘れることができません。44年45年とメンバーも急増し、岩国近辺、広島、徳山あたりに影響力の大きい団体と成り始めてきました。私自身45年の12月より仕事の関係で岡山へ行くことになり、中心的な幹事の仕事をすることができなくなりました。しかし後任がおらず、48年頃まで、岡山から、よく岩国へ通ったものです。岩国を離れる一ヶ月前45年11月京都のフィオレンティーノの岩国公演を催すことになり、当日広島から三浦会長と、車で会場に行く途中、会場の1km手前で追突され、二人共、顎打ち症となり、演奏会の開演時間に遅れる破目になりました。幸にも軽い怪我で済みましたが、このことは、私に岩国を離れるな…。と言うことだったかも知れません。その後4年間に岩国市民マンドリンクラブと改名され、三浦会長、山添副会長、幹事の石川君等の御努力で、組織も充実して来ましたが、幹事の仕事は、ほんとうに大変なものです。どんどん若い方が中心となって、やっていたべきたいものです。社会に出てからも、役に立つことがありますから、よろしくお願ひ致します。最後に、今私達と同年代の人は企業の中においても中堅の位置をしめ、家庭があり、重要な時期にあると思いますが、学生時代盛練習に汗を流したこと、演奏会が終って緊張から開放された満足感の時を思い出し、近い将来又岩国で集い合奏しようではありませんか。

想うもの

S 42年卒 荒木和枝

早いもので10年も経った。アンコール曲の「若人」を最後に、横山にあった講堂の舞台を降りてから……

先日、第20回岩国市民マンドリン演奏会を聴いた時、ほのかに湧き出た郷愁が、ばあーっと開き、木曾節、浜辺の歌と曲目が進んで行くうち、自分も演奏している錯覚に陥ってしまった。

「木曾節」の快よいリズム、ギターパートだった私は、出だしの所が余りにも同じ音符の繰り返しで、今、どこを弾いているのか解らず、マンドリン、ドラのかけ合いの所を頭によくたたき込み、今は亡き熊谷先生の指揮をよく見ていたものだった。

また「浜辺の歌」は、その当時、RCCの番組で、記憶は定かでないが「仲良し子供音楽会」というのがあり、そのゲスト出演で演奏した曲であった。

当時はクラブ員が多く、3年生は一体誰を連れて行こうかと頭を痛め、結局、テストという名の恐しい人選が始まった。今ではテストなんてなーんだ！なんて思っているけど、当時はまだうら若き乙女、先輩の前で一人弾くというのはどうなものか、胸はドキドキ、足はガタガタ、指はブルブル、思うように弾けず、どういう訳か顔の筋肉は突張るやら緩むやら……誰でも一度は経験済みのことだと思うけど。

私達の年代は割と幸運で、1年の時は萩へ演奏旅行、2年の時は先に述べたRCCへのテレビ出演、防府へのコンクール2回、最後にNHKへのテレビ出演、この時は15分番組なのに、リハーサルに4、5時間かけたように思う。又、熊谷先生だけドーランなるものを塗り、いやに若くハンサムにテレビに写っておられたような気がする。又学内では、秋の定期演奏会、春の予餞会と、活動の方も内外共に著しく、クラブクラブで高校3年間が華麗に幕を閉じたようだ。その華麗な仲間とは今でも交流があり、楽しく人生なるものを詠歌している。しかしその中で、不幸にも昨年6月末、過労から倒れた同期の「ミスター・ドラ」こと山口孝彦さんの再起を一日も早く願い、やがて一緒に「若人」の演奏出来る日が遠くでないことを信じてやまない。

主婦とギター

S 42年卒 石崎悦子(旧姓 中原)

私、現在、20代後半の主婦。結婚して3年くらいクラブを休んでましたけど、子供にかかる手が少しあいて、甘い新婚時代もすぎたのか家事以外のことをやってみたくなり、2人の子供をつれて練習会場に顔を出してみました。

2・3年の間で、顔ぶれは大部変わってましたけど、やはり同じ楽器を持つ仲間は、すぐとけ合ってとても楽しく過ごしました。さっそく次の土曜日から、当然、子供は主人にあづけ、ギターをかかえて通うようになりました。そのころは、子供が1才と2才だったので、2人の夕食を食べさせ（もちろん主人はひとりで食べる助かるけど）、2人のおむつをかえて出かける（私の食事は、子供がこぼしたのをひろって食べる程度）こんな調子で、急いで出かけても8時過ぎになります。1時間練習に参加できたら良い方でした。しかしこんなに忙しいめをしても、頭痛がしていても、みんなと合奏するとすぐ忘れてしまいます。練習を終えて、9時過ぎに帰宅すると、まず子供の泣き声の大合唱がきこえ、子供を抱いてやるとおむつはビショビショ。主人はどうしているかと見ると、テレビをつけたままで、大合唱の中で高いびき。それからおむつをかえて、おふろに入れ……いそがしい。もちろん、主人に一言の苦情も言わず、「お父さんごくろうさま、ただいま帰りました。」と一応お礼を言う。（来週のためにも。）一言でも文句を言うと、「いやならやめ！」と言だけ帰ってくるので。

まだまだ定演になると、連日の練習で、練習会場へ行ったり来たり、帰宅した時は、休みなく食事のしたく、子供の世話をぐたくた。主人の休みの日は、昼はレジャー。（いつもならうれしいけど、その日はできればゆっくり寝がしたい。）夜は練習。（他の人も仕事を持っていたりで、みんな同じだと思いますけど）。だから、定演になると、いつも来年はやめようと思うのですが、やめられないで次の年もまた手を出してしまいます。

昨年の春の京都公演の時は、宿泊したので家事いっさいからはなれて、合宿の間は久しぶりの楽しい3日間でした。

岩国だったら食事の世話等で、休憩時間は家に帰らなければならないので残念です。（みんなとの対話の時間なのに。）しかし、演奏会当日だけは、1日中、家事いっさいから解放してくれます。

私の場合は、地元に住んでいて、車も自由に（自称）乗れるので、練習会場に通うのには楽です。そして、子供も成長して手がかかるなくなり、（と云っても、現在2才と3才ですが）主人も、昼食ぐらいは自分でする等、最近は家族も慣らされたのか、慣れたのか、大分協力的になり、私も年々、楽に出かけられるようになりました。

とても理解ある主人に、私はものすごく感謝しています。もう少し言わせてもらいますと、私の主人は、クラブを続けることについて、こう言っています。「おまえのしたいことについて、おれはとやかく言わない。今やっていることは、良いことだし、おまえの好きなことは続けなさい。しかし、それによって他人に迷惑をかけてはいけない。（おじいちゃんおばあちゃんに、子供の世話を押しつけるとか、家事をおろそかにする等）」

私は、好きなことができて、とても幸せです。結婚前から、いや現役時代から、クラブはできる限り続けてゆきたいと思ってましたけど、それが実現するとは……。

男性はともかく、女性、特に主婦にとっては、こういうことは夢だと思います。世間で、よく“ママさんバレー”とか“ママさんコーラス”とかありますけど、私が実際に経験してみて、とてもたいへんなことだと痛感しました。しかし、反面、とても楽しいことです。主婦にとって、家事以外の好きなことに熱中できる時間があると言うことは、とても幸せなことです。近所の奥さんが、みんなうらやんでいます。

これからも、続けられる限り、がんばって続けたいと思っています。

青　　春

842年卒　田　中　正　充

青春とは　心の若さである

信念と希望を持って

日々新たな活動を続ける限り

青春は永遠に

あなたのものである　　「松下幸之助　60才」

よく「青春とは何だろう」といわれるが、一般的には年令で区別されるようで、十代後半から二十代、これが青春だと呼ばれているようである。この一般的の見解によると、私の青春も、もうすぐ終りを迎えようとしている。しかし、私は前記の詩のように、私の人生は永遠に青春のままでありたいと願っている。

マンドリンと全く関係のない事を、先に書いてしまったようだが、実は大いに関係がある。私の青春時代（一般的）を語る場合、マンドリンやICMCのことを除くと、もう何もなくなってしまいそうである。夢と希望に満ちた16才、桜の季節、高校の門をくぐった私は、そこにすばらしい音色を聞いたのである。多感な少年はその妙なる調べに、すっかり魅了され、それから3年間というもの、勉学に励むかたわら、クラブ活動もいっしょにやったつもりなのだが、あまり上達もせずとうとう卒業。その時には、音楽的才能のなさに親を恨んだものだが、こればかりはどうすることも出来ず、上達もしないのに、よく3年間も続いたと我ながら感心している。それだけプレクトラム・アンサンブル（略してプレアン）にはひかれる何かがあったのだろう。そんな状態であったにもかかわらず、卒業後10年間もマンドリンとのつき合いが続いている。今、その高校時代を思い出し、「思い出は？」と問われれば、やはり「プレアン」この答えしかない。故熊谷先生のきびしさ、やさしさ、秋の定演、思い出は多い。しかし、これという思い出もないでなぜだろうと思ってよく考えてみると、やはりプレクトラム・ソサエティ（現ICMC）での活動の方が充実しており、それなりの思い出が多いようである。

プレクトラム・ソサエティと初めて出合ったのは高一の時。熊谷先生の「OB談」は、しつこいほど詳しく、これがほんとうに耳にタコが出来るというやつ。そのせいでプレアンのOBは、すばらしい人ばかりでソサエティもすばらしいクラブだという気持ちを持ったのは、私だけではないでしょう。当時は卒業と同時にソサエティに入部という習慣があり、ごく自然にソサエティのメンバーになった次第で、新入部員になったという感じはまったくなく、あくまでもプレアンの延長のようであった。それというのもやはり、熊谷先生の人柄によるものだとつくづく感心している。

さて、私もソサエティのメンバーになったわけだが、当時ソサエティには精神的に若い人が多く、ユニークな人ばかりであった。もちろん現在もその感は多分にあるのだが。この話は、あまり出すと自分にも被害が回って来そうなので止めにして、当時の活動から話を始める。ソサエティは当時、夏の定演以外にもいろいろな活動があり、なかなか忙しい毎日であった。毎週土曜日の練習はもちろん、老人ホームやその他施設の慰問演奏、プレアン定演の応援、交歓会、同窓会、ハイキング等のレクリエーションと2ヶ月に1度はこのような行事があったように記憶している。定演の為の合宿も、どちらかがいい悪いは別にして、今はどきびしくはなくなごやかムードの楽しいものであり、若い男性は夜中に一室に集合してある密議などをこらしたものである。中でも私にとって一番楽しかったのは、マージャンである。マージャンが3度のメシより好きな私には、毎土曜日の練習に参加するのが楽しくてしようがなかった。練習後、打ち合わせと称しては、前会長の富沢氏宅へ集合し、打ち合わせなんてほんの5分ぐらいで、あとは卓を囲んで長い長い打ち合わせが、夜の明けるまで続くのである。もちろん1人では出来ないのである。それだけ好きな人が私の他にもたくさんいたのである。土曜の夜から日曜日の朝まで、時には昼にも夜にまでも続き、またこれがほとんど毎週とてているから、家族の方には大変な迷惑をかけたものである。夜食、朝食、昼食と食べて帰るのだからうううしさもたいへんなものであった。しかし、このような集まりがコミュニケーションをとることに大変効果があり、クラブの運営にも大いにプラスになったと思う。クラブを通じての仲間というより、もっと親密な心のつながりが出来たようで、いわゆるつうかあの間がらになったといえる。

43年、熊谷先生がなくなり、その年の定演（11回）は追悼演奏会ということになり、悲しみの中の演奏会でやはり印象に残るものであるが、私にとって一番思い出深い定演は、なんといっても翌年の12回である。10回定演後の幹事会で、熊谷先生がなくなられ、ソサエティにとっては大きなささえ失ったが、このまま悲嘆にくれてソサエティを衰退させたのではいけない、今後は以前にも増してメンバーの団結をはかり、定演も充実させていくことにして満場一致で決定。一応幹事にはなっていたものの、仕事らしい仕事もしていなかった私に、富沢氏の「田中、おまえ若いんじゃけえ、やれいや」この一言で大変な量の仕事がまわって来たのである。普段の練習のスケジュールなどはなんでもないことなのだが、定演ともなれば、ほんとうに大変な量の仕事である。会場の手配から始まって、定演までの練習スケジュール、合宿、プログラム、入場券、ポスターの作成、広告集収 etc, etc, とにかく一回の演奏会を開くということは、幹事にとってはたいへんなことである。もちろん全て一人でやったわけではないのだが、5月から準備にかかり8月の定演まで、この間はマンドリンの幹事が本職で、サラリーマンはアルバイトのような状態であった。演奏会当日、緊張の中でオープニングテーマ、幕が上がり、プログラムは後悔の念の中で無情にもどんどん進んでいく、そしてよいよ終曲、幕が降りる。「やった、大成功だ！」、演奏会が無事終了した時のこのすばらしい感激。この感激はプレイヤーの人に悪いが、そういう仕事をしてみないと絶対に味わえないと思う。一つのもの事を成し遂げるということに、こんなにもすばらしい充実感や感激があるということを初めて知ったのである。それから、14, 15, 16回と4年間、プレイとマネージメントの両方をやらしてもらい、あのすばらしい感激を4回も味わうことができて非常に感謝している。

マネージメントをした中で、一番の苦労は、定演のチケットをいかにたくさん売るかということであった。こう書くといかにも、営利が目的のように見えるが決してそうではない。I C M C はアマチュアであるから技術のレベルアップをはかり、いい演奏をたくさんのお客様に聴いていただくことが一番の目的だとは思うのだが、お客様がこなければいくらすばらしい演奏をしても無駄になる。たくさんのお客様に来ていただいてこそ、すばらしい演奏会になるのではないだろうか。そしてたくさんのお客様、すなわち岩国市民の方またマンドリン音楽愛好家の方に、日頃の練習の成果であるいい演奏を聴いていただく、そうすることによってはじめて I C M C は岩国市民の方に愛され、支持されるのではないだろうか。そのためには、演奏会にたくさんのお客様に足を運んでいただきなければならない。そのためにはやはりチケットをより多く売らなければならないということになると思う。そうすればクラブの財政も豊かになり、楽器や備品を購入することも出来るし、一石三鳥だと思う。そういう意味で私がマネージメントをした定演では、チケットの販売に関してメンバーの方に、きびしいことも言い、むりなこともお願いもしたのです。当時のメンバーの方には、ほんとうによく協力していただき、感謝しております。まあ苦労といえば、これくらいのことであとは楽しいことばかりではんとうに充実した毎日であった。

何かにむかって情熱を燃やす。一步、また一步前進。これが年令に関係なく、ほんとうの「青春」というものではないだろうか。私の青春はマンドリンと共にあり、マンドリンを愛し、I C M C を愛し「青春は永遠に」の心意気で、I C M C の50周年を目指してがんばっていくつもりである。

でないと別れとプレアンと

S 42 年卒 松 金 進 (旧姓 高木)

先日、元市会議員をしておられたN氏宅で熊谷先生の想い出話を聞くことができました。岩国商工教諭時代、N氏らが語合って当時流行(?)の牛スキ(もっともこれは牛とスキの間にカエルの入るものらしいのですが……)を何とかして熊谷先生にご試食させようとなさったそうです。勿論、シャム猫よろしき我らがミキ先生、まともに言って食されるわけがないし、というわけで、牛肉を少し入れ、牛のスキ焼きを調理されたところ、嬉々として召しあがられたとか。胃の中央まで入りこんだところ、皆の様子の異常に気づかれ、「Nさん、こりゃなんだい。何だかヌルヌルしてたようだが……。」と例の声でおもむろにたずねられ、N氏ら猛者連の大爆笑をかわされたそうです。

これは、たまたまN氏との間にもち得た出あいの中で聴取することができたものです。ただ、ぼくの場合、プレアンを介した邂逅と別離がとりわけ多かったように思われます。そんなことのあれこれを書かせていただこうかと思います。故久国君とのでないが、まさにそれであったろうかと思います。彼の場合、ぼくより一年先輩でしたが、身体上の都合で休学し、たまたま2年2組に同属したのがそのはじまりでした。彼は岡山大の医学部へ、ぼくは高知へということで、まさかその後あおうなどとは思ってもいませんでした。ところが、ぼくが4回生の秋、高知西高という学校に教育実習にゆき、1年6組というクラスを3週間担任することになりました。そのクラスに久国という女生徒がいたのです。まさかと思っていたのですが、あとできくと彼の妹だといいます。ことの奇しきにおどろきつつ、その後彼の家でもずい分お世話になりました。使いふるされた言葉を黒インクで染めて、募る思いを白紙にこめるようなすすけた学生生活をしていたぼくにとって、彼の出現とその奔放な生き様が、かなり大きな衝撃を与えたことはたしかです。ある夜など、角ビンを2人であけてまもなく、岡山の恋人(彼は結婚相手だといっていましたが……)に電話をかけたいからおまえの大学につれていいけということで、ぼくのバイクにまたがり、出かけることになりました。勿論、彼は無免許、おまけにゲタばきでした。ぼくもついつい荷台にのりました。ところが、彼は赤信号をものともせず前進してゆくのです。なおもおどろいたことに、彼は何と右側を走っているのです。これにはおそれいました。危うく電車と衝突しかけたのですが、その時の言い草がまたふるっています。「ばかやろう! 目をあけて前をよう見んかい。」ま、万事がこの類で、常識破りの青春をおくっていたことはたしかです。彼はやがて岡山にかえってゆき、もう会うこともあるまいと思っていました。ところがところが、ニチイができてまもなく、ひょっこり出あってしまったのです。それも、2人に何の縁もないはずの婦人服売り場で……。彼は肝臓をわざらい、国病に入院しているとのことでした。その後2年ばかり会っていなかったのですが、たまたま三浦さんのお宅で名簿をくっているうちに彼の死を知ったような次第です。その死にふれて、やっと彼の生き方の謎がとけたように思われました。彼の青春は、その基底に詩と音楽をもっていました。一日に洋書400ページ余りを読破するという彼の生き方は、たしかにはげしかった。ただ、今ぼくは彼の死を“自己というものを生命をかけて守りぬく一つの試み”ではなかったかと考えるのです。彼は、人間の終末を脳死とするほどの生に対する冷徹な分析力は充分もちはあわせていました。だからこそ、彼は自己の生命を見すえており、運命などという、人間の勝手にしつちえた理由づけにあきたりなかったのではないかと思うのです。

ともあれ、ぼくは現在、田舎の高校教師をしているわけですが、そこでも波羅君という、すぐれた可能性を秘めた一教師にであります。これまたプレアンのなせるわざでしょうし、第一ぼくが教師を志望した動機自体、熊谷先生との出会いがあってはじめてありえたことだと思います。

今のぼくの願いは、教室で授業をとおした一大オーケストラの創造です。一つ一つの個性を、タクトの先で引き出し、ぶつけあい、一つの交響曲を組織してゆくことです。久国君の死の演出をしのぐような、生の演出を完成してみたい。数々のプレアンを介したふれあいの中で、そんなことを考えるこのごろです。はからずも、プレアンが、過去への導火線でありえ、且つ未来への糧としてありつづけていることに思い至らざるを得ません。



S. 42.6 連合音楽会・宇部

想　い　出

S 43年卒 德　永　美由紀

記念誌の原稿を書くように——というお話しがあったとき、私は、ある種のとまどいを感じました。正式な卒部生でもない私に、こんな原稿を書く資格があるのだろうか……。高校の半ばにして転校した私は、プレアンの部員として在籍したのは、わずか一年間。ですから、勿論、卒部生とは言えない人間なのです。それなのに、母校といえば、いまだに岩国高校を想い起し、高校時代の思い出といえば、プレアン一色に塗りつぶされているという、なんともおかしな人間なのですから……。でも、たった一年間の想い出を後生大事にかかえている私のことを、同じマンドリン仲間として扱ってくださった幹事の方に感謝しながら、短い期間の、だからこそ、他の人よりもあざやか、かもしれない想い出を書いてみようと、ペンを取りました。

18回生の私たちが入学したのは、ちょうど40年。まだ、横山校舎と川西校舎に別れていたころのことです。中学時代からプレアンの演奏会を聴いて憧れていた私は、何のためらいもなく、入学と同時にプレアンに入部しました。そこでまず驚いたのは、入学試験の時、少し鼻にかかった美声で進行のアナウンスをしていた人が、あの熊谷先生だったということ。

そして、入部と同時に聞かされたのが、熊谷先生の「長幼の序を尊べ」という教えです。それまで、先輩、後輩などという固苦しい関係（少なくとも、その時分は、そう思えたのでした）とは無縁だった私は、このことで、またビックリ。

「女子が男子を呼ぶときに、クンづけはやめなさい」——次から次へと驚くことばかり……。こうして、物珍しさの中に快い緊張感を持ちながら、私のクラブ生活はスタートを切りました。授業が終わると、掃除もそこそこに川西校舎から横山校舎への再通学。「ちょっと、そのドリンを取って」と先生に言われて、それがマンドリンを取ってとだとも知らなかったような私が、だんだんマンドリンの魅力にとりつかれしていくのは、自分でも目をみはる思いでした。

しばらくすると、合奏への仲間入り。たしか、オデルの36番がテスト曲でした。冷汗をかきながら先生の前で弾いた後、「よし、明日から合奏入りだ」と言われたときの、あの感激……今でも、昨日のことのように思い出します。合奏に入つてみて、音を出すことのこわさを知りました。たった一人の不注意な音が合奏全体をぶちこわしてしまう恐しさ……それは、誰に言われたわけでもなく、指揮の間の熊谷先生の真剣な眼差しから、自然に感じとったような気がします。

第18回の定演は、私達新入生がプレアン部員として初めて経験した定演。三部の曲目は、『序曲ロ短調』『幸福の星』と『組曲蝦夷』でした。中学時代にブラスバンドでフリュートを吹いていた私は、ロ短調のフリュートに引張り出されました。今にして思えば赤面するばかりですが、それでも先輩のリードで何とか無事に終えたときの安堵感は、言いようのないものでした。そして、三年生の卒部。

春休みには、広大の演奏会の賛助出演が待っていました。その直前に修学旅行で留守っ残った一年生だけが、熊谷先生の指揮で練習をしていました。そのとき、すでに転校が決まっていた私には、最後の演奏会のための練習でもありました。

二年生が留守ということは、当然、ファーストも全員が留守というわけです。応援に来られた先輩と一緒に、先生の隣に座って、初めてファーストを弾いたのもこのときでした。「プレアンに入っていて、サード・ポジションも知らない今まで出ていくのでは……」と言いながら、先生直々に教えてくださったサード・ポジションは、転校していく私への最大のはなむけだったと言えましょうか……。たしか、曲名は『支那の印象』だったと記憶しています。

転校してからも、マンドリン恋しさに、毎年の定演に駆けつけたものでした。ちょうど、高校三年生の時、開演前にバッタリ先生にお逢いして「やあ、わざわざ、よく来てくれましたね」と声をかけていただいたのが、今にして思えば、先生との最後の会話でした。その後、友達からの便りで先生のお体が悪いことは聞いていましたが、まさか、あんなに早くお亡くなりになるとも知らずに……。

広島女子大に入学して、『プレアン時代の夢よ、もう一度』とばかり、すぐにマンドリンを始めたことは言うまでもありません。岩国高校でやっていたという、ただ、それだけの理由で、一年生の中でただ一人、五月の定演メンバーにも入れてもらい、私のマンドリンとの再会は、好調なスタートを切ったばかりでした。あとは、ゆっくり先生にご報告を……と思っていた矢先に、先生の悲報を聞いたのでした。7月の初め、暑いさかりの日を、川西の先生のお宅へ駆けつけたとき、先生の姿は、もう二度とみることができませんでした。熊谷先生の指揮の下に定演を開け、卒業できた幸わせな世代は、私たちの学生で終ったのです。

それから4年間、女子大のコンマスとして、がむしゃらに弾いていたときも、常に、プレアン時代の友人のあたたかい眼が、無言の励ましが、そばにありました。

そして、プレアン入部以来10余年。いまは、広告制作のコピーライターとして働く毎日です。この道に入ったのも、一人一人の音色をもとに曲を創り出していく合奏の喜びを忘れられなかつたからなのかもしれません。コピーライター、デザイナー、カメラマン、イラストレーター……何人かの人が力を出し合つて、自分をぶつけ合つてつくる広告の世界も、合奏の世界に通じていると、このごろ、つくづく思うのです。いま、こうしてふりかえつてみると、プレアン時代に植えつけられた、“つくることへの喜び”の芽は、どうしても摘みとることができずに、私の生き方までも変えてしまったよう………そんな気がしてならないのです。東京で暮らす今の私の周りには、プレアン時代の先輩、後輩が、あたたかい手を差しのべてくれています。たった一年間のプレアン生活ですから、お互いに顔も知らなかつた人たち……それなのに、同じマンドリンを愛した仲間として、いまの私をあたたかく支えてくれているのです。こんな人たちがいる限り、私にとって、プレアンは単なる想い出ではなく、これからも、ずっと隣りあわせの場と言えそうです。

プレアン 40年～43年

S 43年卒 重 広 喜 美 枝（旧姓 弘田）

昭和40年4月、岩高入学当時は、現在のように男女一緒の立派な校舎はできておらず、横山と川西に伝統ある校舎が分れてありました。授業が終つてから、来るのが遅い、と叱られながら横山まで毎日通つたものです。

春は土手の桜吹雪、夏は錦川の涼風、秋は紅葉、冬は錦帯橋を渡る時の身をさすような寒風と、四季折々風情のある通学路でした。

以前から岩高プレアンの評判は高く、私もマンドリンを持って通学する岩高生を見て憧れて、岩高へ入つたらプレアンに入ると早くから決めていました。

入部して、熊谷先生は厳しそうな方だし、礼儀正しく、挨拶はきちんとするようにと注意があり、何と窮屈で封建的なクラブだと思ったことでしょう。しかし、現在のように「自由」を乱用する時代にあって、高校時代に厳しく躉けられていたことは良かったと感謝しています。

私達の年は入部者が多くて、最初100人近くいたと思います。しかし、始めは、ダウンアップの練習、教則本と、あのマンドリンの軽やかな音色とはおよそかけ離れた音を出していましたので、夏休みまでにやめる人が多く、最後まで残つた頑張り屋さんは30人位でした。

10月の定演が済んで、3年生が一線から退くと一年生がステージにあげてもらえるのです。待ちに待つステージ演奏です。下から見るとまことにカッコ良いのですが、ステージの上は、冬は寒く、夏は蒸し暑くて慣れるまではたいへん演奏しにくい所でした。

2年生になってから、周音連、コンクール等で遠征しました。「アリスの声が大きいからと言って、ジェニーの主調よりも正しいとは限らない。」という広告がありましたが、プラスバンドの活発な音を聞いた後では、マンドリンのデリケートな演奏は圧倒されて、コンクールでは遂に入賞できませんでした。コンクールは演奏人数が制限されて、プラスバンドと同人数のマンドリン演奏では、音量が違すぎてどうしてもマンドリンには不利だと、熊谷先生も言っておられました。

その他、広島の青少年センターで演奏したり、同志社大学マンドリンクラブと交歓会をやつたり、楽しい思い出もあります。なかでも、確か2年生の春休みだったと思いますが、卒業された先輩方と交歓会をやつた時は、和かで嬉しいものでした。熊谷先生もこの日は特にご機嫌が良かったようです。

3年生の時の定期演奏会が、熊谷先生最後の定演指揮でした。少し背中をかがめるようにして力いっぱい指揮されるお姿が、今も心に残っています。

3年間を振り返って、練習が辛くて時にはやめたいこともありましたが続けられたのは、熊谷先生の熱心なご指導と、クラブの縦の繋がりであったと思います。

縦の繋がりは、岩国市民マンドリンクラブとなって、年に一度お盆の演奏会で私のように卒業後マンドリンから遠ざかった者にも、かって演奏した頃の情熱を思い出させてくれます。

この伝統あるすばらしいクラブが、いつまでもご活躍されるようお祈り致します。

記念誌発行によせて（プレアン時代の思い出）

S 43年卒 山 内 光 子（旧姓 高木）

過日、記念誌発行の企画案内をいただきて、本当に月日のたつのは早いと感じると同時に卒業して10年目を迎えた今、プレアン時代の懐しい思い出が心をうるおしています。

岩高に入学して歓迎演奏に聞きはれ、名声高かったプレアンにぜひ、入りたいと入部して3年間、変った楽器をおぼつかない手で持ち、小さな爪をともすれば落しそうにしながら、先輩の親切な指導で練習した日々。

一年生時代は、新しいマンドリンを毎日もって、川西校舎から横山講堂に通った思い出。

二年生になり、はじめて向山校舎に入った私達。あの長い坂を上り下りして、自転車置場から横山へ——三年生で第20回の熊谷先生最後の定演を終るまで、なんと長く、龍江の淵を通ってクラブ仲間とかよったことでしょう。

横山講堂のステージの小さな木の椅子、それに腰かけて練習をし、クラブが終ると錦帯橋を自転車をガタガタいわせてそのままお好み焼屋さんへ。また、土手を走れば、おなかすいたと替え歌を作り、恥もなく大きな声で歌ったの。

それは、ハツラツとした若人時代だったと思います。当時は、O B・O Gとの交歓会、大学との交歓会も盛んで、沢山の方々とお会いしたものでした。今は、亡き熊谷先生もお元気で、こんな交歓会を楽しみに後継者育成に力を注いでおられました。先生の魅力的でひき込まれるような指揮は、今も忘れることが出来ません。先生が卒業した私達を夏休みも待たずして、おなくなりになるなんて本当に悲しくて、同級生でお墓まいりに行ったことも思い出されます。私達以後の後輩の方々は、熊谷先生の印象のない方も多いと存じますが、先生とクラブの歴史を切り離すことはできないように思います。

先日、久々ぶりに I C M C のすてきな演奏を聞かせていただき、また、プレアンの方々が私達の高校時代と同じようにお手伝される姿を拝見して大変感激しました。

記念誌発行にあたり熊谷先生の御冥福をお祈りしつつ、これからも、よき先輩に続いて先輩にまさる方々が数多く誕生し岩高と I C M C とのきずなを永遠に求めて、両クラブの発展を心よりお祈り申し上げます。

チョット 思うこと

S 43年卒 山 根 道 広

大阪の山根です。Celloの方です。

夏の演奏会を何よりも楽しみにしています。

演奏会の前になると飛んで帰って、そして思うことは……。

毎年、演奏会前の合宿に帰ると初めて会う人がチラリホラリ。

「名前は？歳は？どこの人？」などと色々なことを思いめぐらし、自分がよその人みたいに思えて、おとなしく片隅にすわって「誰か知った人はいないかナ？」とあたりをキヨロキヨロ。知った人を見つけるとやっと安心。毎年いる人がいないと「今年はどうしたのかナ？元氣でいれば良いけれど。」とちょっと気掛り。そしてやっと落着いて「サー練習しようか？」ということになるのですが、練習が始まると今度は弾けないところばかりで冷や汗の連続。練習していたつもりなのに、合奏になってみると目で譜面をおっているだけ。弾けるところがくるまでは“忍”的一字。弾けるところになると、この時とばかりいい気になってガンガン弾いていると指揮者から「Cello もうちょっと落して？」とか「Cello 合わせて？」とか。そんな調子なので演奏会もよく弾けるはずではなく、音をはずしたり、こぼしたりの間違いだらけ。終るとシュンとなり「弾けなかったナ～。来年こそは？」と反省。しかし打上げで酒をガーッと飲んだらそんな思いはどうか遠くの方へ行ってしまい次の年はまたリピート。

練習不足で演奏会に臨むというのは本来許されないことかもしれません。

しかし、弾けないからとか、仕事が忙しいとかで演奏会に出ないと弾く機会がだんだんなくなるし、いつの間にかマンドリン・クラブから離れていくような気がするし、ここまでできたら半分癖みたいなもので弾けても弾けなくても頭数だけででも出なければ気が済まないので。弾けない分は周りの人がカバーしてくれるし、そのうちカバーする側にいけばいいじゃないか、と自分を慰めながら。不憫じゃのう。

岩国市民マンドリンクラブの平均年令が幾つくらいなのか、よくわかりませんが、かなり若いのではないでしょか。もちろん若い人が多いことはすばらしいと思います。でもその分、中年、老年層が減ってしまったのでは何もなりません。何年もやっている人が残り、若い人がどんどん入ってくれれば、もっともっとすばらしいクラブになるのに、と思うのはチョッと贅沢？

泉南メモリアルパーク工事現場にて

1人の奏者として

S 43年卒 山根義広

マンドリンの演奏会には、一般のお客さんが少ない。ほとんどマンドリンクラブの関係者だ。それは、演奏会の曲目が固苦しく一般の人々になじみにくい曲が多いからだ。だからもっとみんなの知っているクラシックのアレンジや、肩のこらないポピュラーをとりあげるべきだ、という意見がある。

また、クラシックのアレンジをマンドリンで演奏しても、バイオリンとマンドリンでは表現力が格段にちがうので、クラシックのアレンジをマンドリンで弾いても、かえって貧弱である。クラシックはバイオリンの演奏で聞くのが良いし、マンドリンは、マンドリンの良さを出せるオリジナルの曲を演奏すべきだ、という意見がある。

また、マンドリン音楽に物足りなさを感じるのは、マンドリン合奏というのが、同族楽器ばかりで、音色に変化がない。だからもっと管楽器や打楽器を入れて音色を豊かにするべきだ、という意見がある。

これらの意見は、ある面では当っていると思う。

しかし、私は、奏者として、演奏上、もっともっと気をつけるべき事があるのではないかと思う。

音楽上の基礎的な知識、表現上の基礎的な技術が、マンドリンの場合、あまりにも気にとめられていない事が多いのではないかと思う。

「レッスン」という名だったと思うが（店先で立読みしたので定かでない）小学生向けの小冊子がある。

中にバイオリンやピアノの添付楽譜があって、五線紙の空白の部分や音符のまわりには、こと細かに演奏上の注意が書いてある。

「このフレーズの入り、頭はハッキリ、少し大きめに」とか

「こここのフレーズの終りの部分は > して」とか

「このメロディの中のこここの四分音符はテヌート気味に」とか……

（機会があれば店先で読んで下さい。楽器屋の書籍部にあると思います）

これらは楽譜を、演奏して音楽に仕上げていく際、楽譜に書いてない部分を読みとり、感じて演奏すべきことである。

「マンドリン音楽」というものを考えるのなら、たとえ趣味としてマンドリンを弾いていくにしても、長年の経験で得たマンドリンの知識に甘えてはいけない、もっともっと、クラシックでもポピュラーでも良い演奏を注意深く聞く姿勢をもち、もっともっと「音楽」全般に関する知識を吸収していく姿勢がいると思う。

1人の奏者として気をつけていきたいことである。

“マンドリンにかける夢”

S 44年卒 紙元澄子（旧姓 永易）

私達にとって打ち込めるものを持てることは幸せですね。

下手でも全力投球して……。

少しだけかも知れませんが、私にとって青春の思い出はやはりマンドリンでした。

初恋と失恋。

喜びも涙もクラブや楽器を通して経験したようです。

マンドリンの音色と熊谷先生のあのユーモラスなタクトを振られる姿に憧れて、岩高に入学する前から夢を持ち、念願が

叶い、指先に血をにじませながらやっとステージの上で演奏ができた時の感激は、10年過ぎてしまった今でもはっきりと思い出ことがあります。卒業後、O B の会で活動しながら大人同志の人間関係に悩み、友人がその苦しみを分け合ってくれたことも。

学生と異って立場や年令、性別の著しく異った社会人の集り、沢山の問題がありますが、どんな時でも一つになれる合奏の魅力はいつになっても捨てがたいものです。

手を痛めて捨てなければならなかった私にとって、それは最大の失恋だったと思います。楽器を弾けないと知った時、その音を聞くことも、仲間の顔を見るとも避けて、代障を無理に探し回った時期もありました。

今となれば、定演の写真やパンフレットの一つ一つは青春の貴重な宝物です。

結婚した今、いつの日か自分の子供が生まれ育った時、私の使ったマンドリンを弾かせることができたらと、今度は又、長い先の夢を持っています。

身も心も音楽の中に陶酔する一時、本当に素晴らしい時間です。

現在活動の一線におられる皆様には事情が許されるかぎりがんばって続けて頂きたいと思います。

止むなく活動できない仲間の分まで。

岩国地でマンドリン演奏会が聴けることをいつまでも楽しみにしております。

熊谷幹雄先生の最後の教えを受けた者の一人として、その意志を受け継ぎ
生命の燈火続く限り6本の弦とアンサンブルの為に生きることを誓います。

1977. 10 松塚展門

回 想

S 44年卒 田村 隆司

小生は昭和41年に岩国高校に入学したものである。

小生達の学生時代は大きな変動の時代であった。その1つは、緑の多い横山校舎から無毛の川西校舎への移転であったが、何と言っても大きな出来事（ショック）は、小生が3年生の時の熊谷幹雄先生の死去であった。

以下、学生時代をふりかえってみる。

小生がプレクラムアンサンブルに入部したのは友人の勧誘により何の気なしに入ったのであるが、持ち前（？）の凝り性（実は何もする事がなかった）により現在まで続いている。

最初はギター志望であったが、ギターを触ろうとした時に、先輩に呼びとめられ、うまい具合にいいまるめこまれて、マンドロを弾く羽目になった。

その小生がマンドリンを弾くようになったのは、熊谷先生の勧めによるものであった。小生が遊びでマンドリンを弾いているのを見て、熊谷先生がみそめられたのであろう。（実はマンドリンを弾く男子がほとんどいなかったため、しかたなく決められたのであった。）

さてその後、どういう訳かコンサートマスターとなった。しかも、熊谷先生に直接に教わった最後のコンサートマスターである。（他に上手な人はいっぽいいたのであるが。）

コンマスになってからは毎週日曜日の午前中は熊谷先生宅でマンドリンの特訓を受けるようになったが、非常にキビシイものであった。練習後の紅茶と茶菓子のうまかったのは今でもよく覚えている。

話は変わるが、熊谷先生の言葉で小生が一番思い出深い言葉がある。それは毎年12月のプレクラムアンサンブルの創立記念日のときに、3年生の卒業の餞別として歌われたものである。

「ゴンベが種まきやカラスがはじくる……三度に一度ははらわにゃならぬ…………」

この言葉は学生時代には余り意味を考えずただ聞いていたのであるが、最近社会人となって公私共付合いが広くなるにつれ、この言葉の重要性が解り、今では小生の「座石の銘」としている。

熊谷先生との出会いにより小生の一生は決まったような気がする。つまり小生が生きているかぎり、マンドリンと熊谷先生の言葉は一生わすれない。

心の和

845年卒 白木 静代(旧姓 比江島)

「プレクラム・アンサンブル」、それは、私にとって、最っとも素晴らしい学生時代の思い出です。幼い頃よりピアノを習い始め、現在は、ピアノ・エレクトーンの一講師として、音楽とは、長いつき合いの私ですが、音楽の真髄に触れ、音楽に対する情熱を持ったのは、この高校3年間のクラブ活動を通じてだったと思います。

哀愁に帯びた、美しく神秘的なマンドリンの音色を初めて耳にしたのは、中学三年生の時でした。友達にさそわれて、何んとなく演奏会に行ってみたのですが、その時以来、私は、マンドリンに憧れ、岩高入学後、迷うことなく「プレアン」に入部しました。しかし、最初は、ピックの持ち方や、弦の打ち方等、毎日毎日、同じことの繰返しばかりで、マンドリンを弾く、というには程遠いものでした。そのうち、指先に弦が食い込んで涙が出る程の痛さ。先輩達の素晴らしいステージに憧れ、すぐ弾けると甘く考えていましたが、早くも弱音を吐いてしまいました。でも私達を励まし、時には、厳しく、また、ある時には、やさしく教えて下さった先輩達のお陰で、何とか曲が弾ける様になりました。それからは、毎日のクラブが楽しくなりませんでした。

この3年間を振り返ってみると、色々な行事がありました。私にとっては、初めてのステージとなった広島大学との交歓会や春の新入生歓迎演奏会、夏のO Bとの交歓会、秋の定演、冬のクリスマス・パーティー等々、どれも思い出深いものばかりです。の中でも一番、私の心の中に残っているのは、三年生時の定演でしょう。

この年の夏、私達部員にとって、大変悲しい出来ごとがありました。7月16日、プレアンの顧問として、クラブに情熱を注いでおられた熊谷先生が御逝去されたことです。

「徒然草」と「横山」を愛され、いつも笑顔で冗談を言っていた先生ですが、一度、タクトを握られると、とても厳しい方でした。また、音楽を通じて、より高い人間性の育成を目指しておられた先生は、私達の礼儀作法等も厳しく指導しておられました。そんな皆の心の支えであった先生を失ったプレアンは、ガタガタになってしまいました。

そんな、ある日、一人の三年生が部員を集め「こんな時にこそ、皆が力を合せてクラブを盛り上げいかなければならないのではないか……。」と涙を流しながら訴えました。その先輩の訴えは、私の心を強く打ちました。他の部員も同様の様でした。それからは三年生を中心に、定演を目指して一生懸命頑張りました。先生がいらっしゃらなくとも、私達だけでも立派にやれるんだと……。

そして、部員全員「心の和」で結ばれ、力を合わせての定演は、実にすばらしいものでした。演奏は、完全とはいえないかかもしれません、こんな心を打たれ、感激した演奏は初めてでした。三年生は、皆泣いていました。そして、私達二年生も、一年生も。あの感激は、一生、忘れる事はできないでしょう。

この定演を機に、合奏という本当の言葉の意味がよくわかりました。合奏とは、単に一人一人の演奏の技術の集り、音の集りではなく、演奏する人々の「心の和」、これがあってこそ、本当の素晴らしいハーモニーが生まれるのであることが……。

現在、音楽を職業としている私は、クラブ活動を通じて体得したことを少しでも子供達に伝えていけたら、そして、心豊かな人間になる様、少しでも手助けが出来たらと願っています。

雑感

845年卒 山本 芳生

合奏中よく指揮者が「棒をよく見て」と言います。これは音の出がそろわない、あるいはテンポが変化する時などによく言いますが、確かに棒を見れば、ある程度バラバラになりかけた演奏も整然としたものになります。整然とした演奏はそれだけで結構美しく、合奏においては、まず必要不可欠なものかも知れませんが、音楽はそれだけで楽しく美しいものではないでしょう。

ある程度弾けるようになり、合奏に入れれば、みんなの音と自分の音が美しく交差して、ピタリと合えば実際楽しいものです。しかし、それだけでは何度もやればあきてしまい、結局、最初のピタリと合った感激さえも忘れてしまうことが多い

いのです。実際はピタリと合わせるまでがたいへんなのですが、近頃は、テクニック的快感からか、合わせるまでがたいへんな曲が多く選ばれ、やっと合った頃には演奏会という事が多いようです。こうなると、曲の美しさなどそっちのけで合わせるだけに苦労して音を楽しむまでに致らず、流れを楽しむまでに致らずということが多いようです。

テクニックには各自差がありますから、合わせるまでに苦労するのは致しかたないとしても、もう少しじっくりと、一曲を仕上げたいものです。

指揮者はよく言います「棒を見て」と、これを指揮者が言わなくなり、表情豊かに、皆の気持ちが一致して、流れるような音楽ができれば、どんなに美しいであろうかと考えます。

しかし、私達は欲張りで、新しい曲をやり、新鮮な喜びを得ようとなります。新鮮な音の響きに鳥肌をたて、新しい楽譜を好奇心いっぱいの気持ちで広げます。もちろん、こういう気持ちも大事ですが、その中に一曲でも、私達がお気に入りの曲を、じっくりと仕上げて、私達のオハコという曲ができればと思います。

合わせるだけに熱中せず、楽器を弾く機械にならず、テレずに大胆に、繊細に、顔の表情までも変えて、表情豊かな音楽の中に入っていきたいものです。

熊谷先生を知る最後の年代

S 46 年卒 石川 善久

昭和43年4月岩高入学当時、向山新校舎は一部まだ工事中であった様に記憶しております。2年生と3年生は、既に新校舎の方へ移転していましたが、私達新入生は、5月の末まで城山の新緑に囲まれた横山の旧校舎で過ごしました。横山校舎での私達は、上級生にあれこれと気を遣うこともなければ、頭ごなしに校風云々をたたき込まれることもなく、今思えば全く自由気まゝ、重苦しい受験勉強を終えて憧れの“西校”に入学出来た喜びも全身に感ずれば、今こそ「我が世の春」といった気分であった様に思います。

7月16日(火)の朝、私達1年生も向山の新校舎に移転して間もなくのこと、登校して来た私達を迎えたのは、熊谷先生の突然の御逝去の悲報でした。校内全体が息づまる空気につつまれ、特に御年輩の先生方の御悲嘆の表情には、目を覆うものがありました。今は亡き横尾先生に引率され、川西での御葬儀に参列するために級友と共におりて行った向山の長い坂での無言の悲しみを昨日のことの様に思い出します。

私は6月にプレアンに入部しましたが、当時はクラブに対して全く関心がなく、唯、籍が有るというだけで幽霊部員も同様。ですから、プレアンの事は殆んど知っておりませんでしたし、熊谷先生とプレアンを結び付けて考る事が出来ませんでした。私が「熊谷先生とプレアン」の事を知りはじめたのは、2学期に入りチョロの山本芳生先輩の熱心な御指導を得てクラブに興味を持ちはじめて以降、多くの先輩方から口伝えで教わったり、同級の仲間から教わってからです。その後3年を卒業するまでのプレアン生活の中で最も残念であったことは、直接先生の御指導をいただくことが出来なかつたことです。他の同級の仲間は、短期間ではありながらも、強烈な印象をもって、先生のマンドリンに対する御熱意を感じた様ですし、プレアンの心に触れた様です。

不幸にして、熊谷先生の死に遭遇した私達の代は、長いプレアンの歴史の中で1つの大きな節であったと思います。私達の後輩からは、誰一人として先生の直接の御指導を受けた者はおりませんし、私達の先輩は、皆先生に手を取って教えていただかれた方々ばかりです。先生を亡くして全てを創り出して行かざるを得なくなった混乱の渦中にあった私達は、途方に暮れたものでした。何一つをするにしても、先生の、そして先輩の偉大さがあまりに大きくてしかかり、行く手を阻んでしまうのです。暗中模索。その終局を迎えたのが3年時の第23回の定演であったわけです。伝統という大きな心の支えを得ながらも自らの手で成し遂げたという満足感に言い知れぬ喜びをかみしめたものです。

私は、ある意味で先輩方からごらんになれば、造反者なのかも知れません。つまり、熊谷先生の死を境にして、直接先生の御指導を受けて卒業なさった先輩方と、先生が亡くなられた後、続いている後輩達とは、相互に同一線上に置いて考えるべきではないと思うからです。当然、両者の間には“プレアン気質”という何か得体の知れぬ一つの大綱に沿ったものはあるものの、熊谷先生、そして、プレアンに対する基本的な考え方の違いが有るものと思われます。後輩達を取り囲む環境、特に学校内に於けるプレアンの置かれている状況も以前と随分変わって來たことであろうし、熊谷先生を知らない、これから後の後輩に我々の考え方で助言をするのは良しにしても、押しつけるのは無理なことです。彼等は、彼等の創るプレアンの中で精一杯悩み、苦しみ、喜び、全てを模索しながら青春の情熱を燃やしているのです。熊谷先生を知らない

い後輩達がこれから創り上げて行く新らしい伝統を暖かく見守っていってやるのが私達のつとめであろうと思います。そして、いつかマンドリンの絃で結ばれた彼等と私達に共通のふれあいを見つけた時、互いの肩をたたき合い。その喜びを分かち合いたいものです。

想　い　出

S 46 年卒 機　部　由美子

岩高に入って、マンドリンクラブに、入ろう、それが私の、長年の夢でした。ギターかマンドリンか、と、迷ったあげく私の選んだのは、ギターの方でした。そんなある日、クラブの皆さんと広島に、演奏会を聞きに行きました。“バグダッドの太守”——あの初めの静かな、そして遠くの方から次第に近づいて来るような出だし——を聞いた時、私は選択を誤っていた。と、はっとさせられ、演奏が終るとすぐ飛び立つような思いで、コンサートマスターに聞きました。

「これからでも、間に合います？変更してもよろしいですか？」その時、その方が何と言われたか覚えておりませんが、OKして下さった事は確かです。そして翌日、横山校舎の職員室に、重い足取りで熊谷先生の許可を得に行きました時の事、メガネの奥から静かな眼差を向けられた時、来なければ良かった。このままギターを続ければ、こんな思いをしなくて済んだのに、と、薄暗い一角を見ておりました。クラブに入って一ヶ月やそこらで、先生があきれられるのも無理はありません。先生のあの時の寂しそうな顔、忘ることはできないでしょう。とにかく、それからマンドリンに変り、毎日の練習。5月も終り、いよいよ横山校舎とも別れ川西の新しい校舎に、移動が始まりました。授業中、勉強の方は其方の窓から桜の花びらがヒラヒラ舞うのを見たり、四つ葉のクローバーを探したグランドともお別れ、でも、そこには新しい生活が待っていると言う、期待のようなものもありました。

やっと、小曲のセカンドパートを、どうにか弾けるようになったと思ったのに、私達待っていたのは、熊谷先生の他界でした。校葬の時、白菊に囲まれた先生のお写真を目にしてはボロリ、他の先生方が先生の思い出話をされるのを聞いてはボロリ、先生の耳に届くようにと、合奏した時は、もう涙でいっぱいでした。私にとっての先生の思い出は、あの独特的の指揮の仕方、そして長身の背に、ショルダーバッグを肩にかけ、黄昏時に横山校舎の図書室の前に、たたずんでいらっしゃるお姿、マンドリンを教えていただいた、と言う記憶は残念ながら、ほとんどありません。

それからの二年間は、何と早く過ぎ去った事でしょう。合奏コンクールに行っては、あんなに練習したのに、入賞しなかった……とがっかりしたり、あるコンクールの帰りのバスで“若人”を合奏ならず合唱しようと言う事になり、マンドリンパートの人はともかく、ギターの人が口一つでは、到底足らず、大笑いした事（よくもバスがはちきれなかったこと）鈴木静一先生がお見えになり、感激してボーッと過ごした一日、まるで昨日の事のように思い出されます。そして最も思い出深いのは、何と言っても秋の定期演奏会。一年間の総仕上げ、三年生にとっては、最後の晴れの舞台です。今、思いますのに、定演の終った後、ひっそりした体育馆で、よくもあんなに泣いたものだと。卒業して別れて行くのが辛いとか、一年生は一年生の、三年生はそれなりの感慨もある事でしょうが、それだけ皆、純朴で、プレアンを心から愛し、ちょっぴり感激屋さんだったので、と思うのは、私の一人合点でしょうか。この頃の方はどうな様子かと、時々思ったりします。

皆さん“案山子の歌”って、ご存知だと思いますが、その作曲者が、長年いっしょの会社でコーラスを指導して下さっている方だと、つい最近知り、世の巡り合わせの不思議を感じております。

高校を卒業して、マンドリンとも縁が薄れておりましたが、この寄稿を機会に、また練習に行こうかな、と思いをはせている今日、この頃です。

僕とギター

S 46 年卒 谷　本　浩　二

高校に入ってギターとつきあうようになるとは思ってもいなかった。技術的にはうまくならなかったけれども、ギターをいじることの楽しさには、取りつかれました。一日の練習に疲れて、もうギターなど手にする気もしないなどと思って

いても、次の日には、それなりの期待感を持ってギターをいじっている。

それは、昨日とは、違う音が出来るかもしれない、という期待感だ。熊谷先生が亡くなられてしまったとか、向山校舎に移転したとか、ということが僕たち自身の手で僕たちなりの音を創り出すことへの不安と期待を駆り立てていた。演奏だけでなく、クラブ全体の活動といったものが以前のものとは変ってきたのも、この頃だ。

ある意味で何かから、ふつ切れたという雰囲気がクラブ活動に生れたようだ。クラブでの付き合いなどもリラックスしたものになったと思う。僕たちの演奏は、こんな雰囲気の中から生れた。良くも悪くも、向山でのクラブ活動は白紙のページに新しく書きしるしていくようなものだった。

結果は、少々乱雑で、まとまりのないものだったかもしれないが、ともかく新しい環境の中で、新しいものを創り出そうとする意欲だけは、僕たちの間に、確かに存在していたと思う。

ふり返つてみれば

S 46年卒 藤井亮子（旧姓 河田）

岩国高校プレクトラムアンサンブルも創立30年。私が在籍していた3年間はそのわずか $\frac{1}{10}$ ですが、その頃のことを想い出すまま書いてみました。

私達が入学した年は、横山から向山への移転の年で、3ヶ月間横山に通っていました。横山校舎のあの部室に入るのは、楽器を取りに行きそれを戻す時だけ。その時も、どうか先輩がいませんように、と願っていたものです。1年生の役割と言えば、合奏体形をつくることで、それも日によって広々としていたり狭かったり。その頃は、合奏とはもっぱら聴くものでした。今は故き熊谷先生も指揮棒を振っておられ、“バグダッドの太守”はことに印象深いものです。先生には、“文法”を教わりました。どういう訳か、講義よりも合い間の人間味あふれるユーモアが心に残っています。向山に移ってからは、そろそろ1年生も合奏に加わり始め、やっと“若人”が弾けた時、初めて合奏に入った時、楽譜のどこを弾いているのかさえもわからなかったこと、1小節だけ待ち構えてやっと音を出した時のうれしさ、など思い出します。

私にとって初めての定演は第21回でした。ポーとなって気がついた時はもう一部も終わり、とにかく夢中で楽譜とにらめっこでした。（私はマンドリンでしたから）1stと2ndに分れる試験は、2年生での重大なできごとでした。先輩の前で弾くその場の雰囲気のきびしかったことを憶えています。

しかしながら忘れないものは第23回の定演です。3年生で迎える定演で、やはり感激もひとしおでした。最後の“若人”的満足感などとはなしの淋しさ。やった者でしかわからないあの心の和、独特のムード。他のものでは絶対に得られない貴重な体験でした。

3年間いろいろなことがありました。クラブ活動終了時間をオーバーしたためステージの電気を消されたこと、指揮者に怒鳴られたのも、先輩にしつこくしつこくいっしょに弾いてもらったことも、振り返れば、これもあれも、そしていっしょにやったメンバー達のあのころの姿が浮んできます。岩国高校を卒業して早7年。現在、1才8ヶ月になる男の子の母として、クラブでつちかわれてきた根性でがんばっています。

プレアンの思い出

S 46年卒 村井清子（旧姓 高木）

私とマンドリンとの出会いは、中学時代、姉がその頃プレアンに所属しており、定演に招待されたことに始まった。始めて聞くマンドリンの澄んだ音色と、今は亡き熊谷先生の情熱的な指揮に心を奪われ、結局、そのことが私をプレアンに入部させたと言える。

3年間のクラブの思い出は数々あるけれど、その中で印象に残っているのが1年目の練習と、高校生活の締めくくりとなった定演である。最初の1年生の練習は、向山校舎完成の6月頃まで、横山の校舎で行われた。先輩達は1年生を教えるため、向山から横山へ通う毎日だった。練習を重ねるにつれ、最初見易そうに見えたマンドリンも、弦が指に食い込む痛さに、少々やる気をなくした時期もあった。先輩の厳しさと自分の不器用さに、クラブをやめようと思ったこともあっ

たが、それを押し止めてくれたのは、今思えば、同期の友であり、又、プレアンの魅力ではなかったかと思う。私が卒業して、早や6年が過ぎてしまったが、高校生活最後の第23回定期演の感激は格別であった。「細川ガラシャ」「朱雀門」、今でも思い出す曲である。

定期演後のミーティングで涙ながらに語ったこと、後輩との別れ、クラブを去ることに涙したこと、具体的なことは、何一つ覚えていない。しかし今でも充実した時期であったと思い起こすことが出来る。

最近では、マンドリンとも遠ざかってしまったが、それでも、時々思い出した様に引き出して弾いてみる。昔のように手も動かず、カチャカチャと鳴る音色に、高校時代を懐しむこの頃である。

プレクトラムアンサンブル部の思い出

S 46年卒 吉野 美津江(旧姓 河村)

“若人”……わこうど、なつかしい言葉ですね。三年間のクラブ活動の中で一番始めに教えてもらった曲がこの曲でした。そして三年間弾き親しんできたこの曲。三年生最後の定期演奏会で“ああこの曲をみんなで合奏するのもこれで最後なんだなー”と涙をボロボロ流しながら弾いたのもこの曲でした。そう、もうあの頃から10年近くたっているのに「ブンチャッ、ブンチャッ、ブンチャッチャッチャッ……なんてメロディーが今でも頭の中で聞えてくるんです。年に一回の定期演奏会のために日が暮れる頃まで練習したり、日曜日も一日中練習してたっけ。日曜日というとあの頃盛んになってたお弁当作り。朝早くからいそいそと、五、六人分のお弁当を作り、まるでハイキングにでも行くかの様にクラブに通っていました。練習の合い間にみんなでワイワイ言いながら男の子も女の子も色々なお弁当を食べくらべました。そんな時は苦しい事や辛い事も忘れて色々な話に花が咲きます。そんな時は、先輩も後輩も、男の子も女の子も通称で呼び合ったりまるで兄弟の様に親しかった様です。いつだったか三年生の時、桜の花が咲き乱れている頃、ふっと五、六人で、クラブをさぼって横山へお花見を行ったんです。その後ひどく部長に怒られて自主的に正座した事もありました。やはり何と言っても一番印象的だったのは、三年生最後の定期演奏会でした。私達は何故か妙に落つかなく、無性に淋しい様な……そんな思いの中で必死に演奏しました。誰か一人が堪えきれなくなった涙をボロボロ流し始めると、誰もかれもが込み上げてくる涙拭いながら、顔をくしゃくしゃにして弾いてました。明日からは、もうこのクラブの部員ではなくなるのか……と思うと三年間の長い様で短かかったクラブ生活が名残惜しく、最後の定期演奏会をやりとげた満足感と、三年間のクラブ生活の充実感とで何とも素晴らしい感激の中での“若人”を無意識のうちに弾いてました。長い人生のはんの細やかな高校生活、その中のクラブ活動は私にとって忘れがたい思い出なのです。

今、一人の子の母となり家事や育児に追われる毎日、そんな生活の中で“ふっ”と思い出した様にあの“若人”的曲を口ずさんでいる時があるんです。今年も又、現役の定期演奏会で、何人かの人達が私の様に素晴らしいクラブの思い出を胸におさめて引退するのでしょうか。“若人”的曲を弾きながら……

プレクトラムアンサンブルの思い出

S 47年卒 波羅三哉

期待に胸をふくらませて、私がプレアンに入部したのは、昭和44年4月である。姉がマンドリン音楽をやっていたことで、マンドリン音楽にある程度親しんでいたこと、また中学生のときから音楽に興味をもち、とくに中学校では出来ない弦楽器をやってみたいというのが、入部の動機だった。

まず入部してみて最初に感じたことは非常にみんな礼儀正しいということである。当時はあまりのかた苦しさに、いや気がさしたことあったが一年も半ばすぎると、合奏に重要な“和”は、こういうところから生まれるものだということが納得出来るようになった。またもうひとつの印象は、非常に練習がきびしいという点である。私を含め、当時ベース希望者が一年生3人と競争率が高かったせいか、とにかく死にものぐるいという形容詞がまさにぴったりするような練習をつづけたものである。

また、きびしい練習の間に先輩やOBの話から学んだのがプレアンの歴史であった、私どもの年代は直接熊谷先生のお

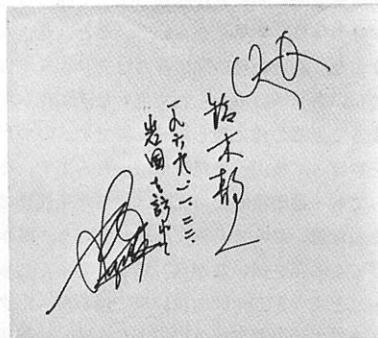
教えは受けていないが、先生の偉大さには、ただただ敬服するばかりであった。

その他、三年間の活動を通して、思い出に残っているものをいくつかあげてみたい。

まず、プレアンに入つて2回目の定演である。この定演では前回と異り細川ガラシャをはじめ、ひじょうに高レベルの曲目をそろえた点。そして「朱雀門」のように、ナレーター入りの曲をはじめて演奏した点が今でも印象深い。「山嶽詩」「古戦場の秋」といったイメージな曲ではなく、大曲をやることによって私のマンドリン音楽に対する情熱はもえあがったといつてもあながち言いすぎとはいえないだろう。また、直接、鈴木静一先生の教えをうけたのも私ども年代がはじめてであろう。とくにベースというパートの性格に、あまり指揮者から注意をうけたことがなかっただけに、先生から直接、演奏中に注意されたことは、大いに刺激になった。さらにひじょうに細いミスでもするどくご指摘なさるプロの作曲家に対する尊敬の念が出来あがったことも否定できない。

そういうきびしい練習の思い出だけではなく、楽しい思い出も、数えきれない。毎年8月に行なわれる部員全員のハイキングや、クリスマス会あるいはOBとの交歓会など。しかし何といっても定演以外の活動で印象深いのは、他の演奏会である。宇部、防府、山口などで開かれたいろいろな演奏会に出演したが、どうしてもプレクラムミュージックに対する県オーソリティーの無理解を克服することができず、高校生なりに最上の演奏したにもかかわらず上位入賞できないということはくやしい思いをしたものだった。

いろいろ楽しいことも悲しいこともつらいくともあったがやはり、私の高校生活はプレアンぬきでは考えられない。高校時代の思い出で、プレアンにまつわらないものは、ひとつもないといっても決して、言いすぎではない。プレアンとともに学んだ、三年間は、いつまでも忘れる事はないだろう。



楽器のこと

s 48年卒 中里文昭

プレアンに入って最初に持たせもらったのが、大きなカンオケのようなケースに入っていた、大野のチェロであった。今現在またチェロを弾いているのだが、フラットのチェロであんなに大きなチェロにはまだお目にかかったことがない。そんな大きなものを、男にしては手の小さい者が弾くのだから、かなりつらい思いをした。なにしろ、朝起きた時に時々左手の指が炎症をおこして全く曲らなくなっていたり、指先にできたマメが破れたりすることも再々であった。

そして高校2年の5月にマンドリンを手にしたのである。最初のマンドリンはスズキの確か18000円ぐらいのものだったかと思う。決していいものではなくひどい楽器であったが、しばらく弾いた後、尾園君に譲った。そののち三年生がいなくなると、私は他の同級生よりも1年以上遅れてやりはじめたにもかかわらず、コンサートマスターにおさまるはめになってしまった。実力のないコンマスということで、指揮の松村君をはじめ、みんなに大変迷惑をかけることとなり、申し訳なく思ったものである。その時、新しく買い求めたのが、カラーチュのマンドリンであり、当時はけっこう高値だったのだが、そのわりにはボリュームのない細い音しか出なかったような気がする。そのマンドリンは大学2年の春まで使い、またパートをうつすことになったため、鈴ヶ峰女子短大のマンドリンクラブの人々に譲ったのだが、今になって後悔している次第である。

現在持っているのは、落合のチェロであるが、今まで自分が使った楽器の中で一番気に入っている。この楽器を一生使っていこうと思っている。

岩高プレクトラムアンサンブルの三年間

848年卒 松村 紀

熊谷幹雄先生が亡くなられたのは昭和43年のことで、昭和45年に入学した我々は全く先生のご指導を受けずに三年間を過ごしたわけである。

昭和45年4月11日、土曜日だったが、午後から音楽系クラブ主催の新入生歓迎演奏会があった。これが私とプレクトラム・アンサンブルとの出会いであった。曲目は忘れてしまったが、確か「古戦場の秋」が含まれていたような気がする。

クラブ総会でプレアンに顔を出して驚いた。何しろ女ばかりである。新入部員は40人余りいたが、そのうち男は自分と中里文昭君だけであった。男子部員も増えて卒業の時には男が7人、女が10人であったが、ともかくその年の定演まで一年生の男子は2名のままだったから、合奏練習後のステージの帷幕掛けは大変であった。

我々が在部した3年間は鈴木静一先生の音楽物語を取り組んだ3年間であった。45年の第23回定期演奏会では「朱雀門」翌年の第24回定期演奏会では「人魚」、そして47年の第25回定期演奏会では「氷姫」という具合である。

とりわけ第23回の定演は第4部で「朱雀門」をやり、第一部でも「細川ガラシャ」他を演奏するなど、鈴木先生の特集であったとも言える。この時の部長は石川善久先輩、指揮は奥西仁先輩であった。一年生の自分にとって奥西さんは非常に恐い指揮者であった。自分は新谷さんや松重さんの後ろでマンドラを弾いていたが、合奏中、失敗した時に奥西さんと目が合うと、思わず震え上がりそうになったことを今でも覚えている。

定演は10月11日だったが、その2、3日前になって、音楽物語をやるのだから是非とも照明を入れる必要があろうということになった。スポット・ライトは急遽借りて来て間に合わせたが、フット・ライトやボーダー・ライトはどうしても調達ができない。仕方がないから、自作しようということになり、部品を買って来てみんなで作った。確かに電球は百ワットのものを20個ばかり、コードは延べ百メートルくらい使ったと思う。問題はどうやって光に赤や青の色を付けるかということであった。劇場用のゼラチン紙を買ってくる余裕はないし、セロファンでは火事になる。結局、電球に直接色マジックを塗ることにしたが、これはなかなかいい着想だった。

自分は元来こういうことは好きで、中心になって嬉んでやらせてもらった。ひょっとするとマンドラを弾くよりもこちらの方に才能があったのかも知れない。ともかくこの照明設備はタコ足配線ながらもどうにか開演の数時間前に完成し、事故も起こさずその役割を果たすことができた。その後、音楽物語に続いたこともあってこの照明設備は年々改良が加えられ、我々の最後の定演の時には、蛍光灯やヒューズ付きのスイッチ・ボックスも完備し、火災の危険も薄らいで今日に至っている。

「朱雀門」は岩高プレクトラム・アンサンブルが初めて挑んだ音楽物語であったわけだが、OB諸兄の厳しく、かつ愛情のこもった指導もあって、今聞き返してみてもなかなか立派な演奏であったと思う。メンバーのうち数人が夏のOBの定演に参加して経験を積んで来たことも役に立った。ナレーターを引き受けて下さった国語科の高富先生も大変な熱演であった。音楽物語に関しては何もかも全く初めての経験であり、当時の三年生は非常なご苦労をされたこと察する。しかし、日曜、祭日も返上して朝早くから夕方遅くまで8時間に及ぶ猛練習を繰り返した甲斐があって、技術的にもかなり難しいこの曲を仕上げることができたのだった。自分が体験した最初の定期演奏会はこうして幕を閉じたのである。

昭和46年の第24回定期演奏会は、例年よりも少し早く、9月26日に行なわれた。前年の「朱雀門」で自信をつけた当時のメンバーは、今度は同じ鈴木先生の「人魚」に挑戦した。前の年にOBが定演で演奏した曲である。部長の福田雅良先輩、指揮の木村透先輩始め、部員の「人魚」に対する憧れはものすごく、冬休み明けの練習を始めた時にはもう楽譜がそろっていたほどだった。一年生の定演の時も、自分は殆どの曲を暗譜していたが、今回の「人魚」は、春休みが終わる頃には完全に覚えてしまった。

夏のOBの定演には、自分を含めて7名が“留学”させてもらったが、単に技術の向上だけでなく、先輩の持っている様々なノウハウを吸収するという意味においても、非常に有意義であった。もし事情が許すならば、今の現役の生徒さんにも是非勧めたいと思う。

さて、その年の定演では松重さんがコンサートマスターとしてマンドリンへ移ったために、マンドラの三年生は都野令子さんただ一人となってしまった。そこで自分は二年生ながら最前列で彼女と並んで弾くことになったのだが、練習中、周囲から羨望と嫉妬の視線を痛いほど感じたものである。それだけに、合奏は実に楽しかった。

ナレーターには前年OBの定演ですばらしいナレーションを聞かせてくれたRCCのアナウンサーを呼ばうという話も

あったが、これはいろいろな事情で中止になった。結局、当時二年生であった原桂子さんにお願いしたのだが、練習も大変熱心で、本当に一生懸命にやって下さった。今から思えば彼女は正に適役であり、我々はナレーターにも恵まれたと言えよう。

定演のポスターは規格を決めて例年になくかなりの枚数を書き、招待券も大量に配り、また当日は午前中模試があり大部分の生徒が登校していたことも手伝って、演奏会には随分大勢の人が来てくれた。そしてまた、演奏も十分それに答えるものだったと思う。舞台の照明の方も、今回は事前に計画を立てて準備したのでかなり効果もあったようなし、演奏会全体の構成からみても、無理がなくまとまっていた。

第24回定期演奏会の翌日から、新編成での練習が始まった。部長は佐古雅昭君で自分は指揮を務めることになった。他に、現在 I C M C で大活躍している中里文昭君や尾園勝善君などがいたが新チームの前途は多難であった。

前回や前々回の定演の時に比べて、我々は技術の面ではお世辞にもレベルが高いとは言えなかった。しかし、先輩たちの成功を眼の当たりにして来た以上、どうしても負けるわけには行かない。いろいろと 途曲折はあったが、結局、定演では鈴木先生の「氷姫」を取り組むことに決まった。何しろ30分を越える大曲である。当時の我々の技量を遥かに上まわるものであった。当然、指揮者である自分は相当厳しい練習を部員に要求しなければならなかった。

無理をすればどこかに歪が出るものである。桜の花が咲き新学期が始まると、三年生は本格的な受験勉強に取り組まざるを得なくなり、それまで留っていた同期の中からも退部するものが出てきたようになつた。我々は度々集まって話し合いをしたが、男子と女子との間で意見が対立することもしばしばであった。今思えばあの頃が一番苦しかった。

が、苦しいことばかりではなかった。秋にはハイキングと称してみんなで楽器を持って城山に登り、ロープ・ウェイの駅の広場で合奏をして注目を集めた。春には花見と称して錦川の河原に繰り出し、フォーク・ダンスをやって注目を集めた。どうも注目を集めることが好きだったようである。その年の夏の連合音楽会は山口市であったので泊まりがけで参加した。当時は合宿をやらなかったから、これは非常にいい思い出になった。その他、夏休みには海田高校のマンドリン・クラブを招いて交歓会を催すなど、いろいろなことを試みた一年間だった。

第25回定期演奏会が開かれたのは、昭和47年10月10日、体育の日のことであった。当日、三年生は午前6時30分に岩中グランドに集合、故熊谷幹雄先生のお墓にお参りをし、更に椎尾神社に定演の成功を祈願してから登校した。また、昼の弁当は我々の分まで女の子が作って来てくれて一緒に食べたことを覚えている。これらの計画はすべて彼女たちから出たものだが、前の日にこの話を聞いた時、自分はびっくりすると同時にとても嬉しかった。三年間一緒に頑張って来て本当に良かったと思った。

ところで、この時の定演で幻想組曲「銀河」が初演されたということは忘れてはなるまい。この曲は尾園勝善君の書き下ろしで、高島信人先輩作曲の組曲「秋の詩」と共に我々の手によって日本で初めて演奏されたのである。高校生による作曲、演奏ではあったが、今アンケートを読み返してみても評判はかなり良かったようだ。思い切ってやってみて本当に良かったと思っている。

問題の「氷姫」は、先輩方の叱咤激励の下で猛練習を積んだ甲斐があって、何とか悔いの残らない演奏が出来た。五年後の今、テープを聞き直しても当時の我々の力量からすればあれは最高の出来であったことは間違いないだろうと思う。

ともかく、岩高プレクトラム・アンサンブルで過ごした三年間に自分は非常に貴重な経験をすることができた。それは他の先輩方にも共通することであろう。この文章を書いていると、涙を流しながら「若人」を弾き、お互いに握手をして感激を確め合ったあの日のことが、走馬燈のように目に浮かんで来る。

いつもご迷惑をかけ続けた顧問の本村勇治先生やお世話になった先輩後輩のみなさんにここで改めて感謝したい。同時に、あの感激をもっと多くの仲間たちと分ち合うことができたはずなのにと、途中でやめて行った多くの人たちのことを見残に思うのである。

想 い 出

S 49 年卒 浅 田 幸 利

よき先輩、よき後輩、よき仲間達に恵まれ、すばらしい高校生活を過ごさせたことを、僕のみならず、部員一同感じていると思います。

「レコード作成」、「プレアンくずれ一同」の花束…… etc
どれもこれも決して忘れられない思い出ばかりです。

クラブと学問、クラブと仕事の両立をめざし、一本の指揮棒をもとに、すばらしい音楽を生み出していって下さい。

東海地方のマンドリン音楽活動について

S 49 年卒 井 川 勇喜夫

現在マンドリン音楽は一般にはまだなじみの薄い存在で、その演奏活動も大学、高校のサークル活動を中心となっていると言っても過言ではないでしょう。しかし一方では、こうしたサークルのO Bによるアンサンブルの地道な活動が認められてきて、新聞、ラジオなどマスコミでも少しづつ取り上げられるようになってきました。

ここ岩国における市民マンドリンクラブの活動も、はや20年に及び、その間安定した実力をもとに、幅広い演奏活動と共にいろいろ新しい試みを取り入れて、マンドリン音楽の普及と追求への熱意が少しづつ市民の方々にも理解されてきたという感じです。私は岩高卒業後、名古屋でマンドリンクラブに4年間籍を置いてきたので、ここで東海地方のマンドリン音楽活動について、紹介したいと思います。

東海地方においても活動の中心はやはり大学のサークル活動であると思っています。東海地方では多くの高校や、ほとんどの大学にマンドリンクラブがあり、フレクトラム人口も多く、また発表の機会も多いので、全体的にマンドリン音楽が普及していると言えます。そして、サークル相互間で音楽性の追求を競い合っている状態です。こうしたサークル個々の活動と共にマンドリン音楽の追求に大きな役割を果しているのに、東海学生マンドリン音楽連盟（東マン連）という東海地方のはとんどの大学、短大によって構成されている組織があります。東マン連では総会を開いて、活動状態を検討し、これからの方針をきめます。そして、それを各サークルにもちかえり、各サークルでの活動に反映させます。方針をもとに毎年、四年制大学を中心に3、4の大学、短大がブロックを組み、各ブロックごとに合宿や技術交流会などを行います。そして東マン連新曲発表会というのを開いて、年間の活動の成果を発表しています。（各大学それぞれの定期演奏会は別に行ないます）

この新曲発表会というものについて少し書きます。10年くらい前から既存のマンドリンオリジナル（かってイタリアを中心にしてマンドリン音楽が最盛期を迎えたころに作られた曲をさします）に対する不満が高まってきた。オリジナルは曲の数そのものも少なく、くり返し演奏していくのにふさわしい程の時代に合った音楽性をもつものは、ごく限られてくるのです。オリジナルにはそれなりの良さがあるのですが、自分たちにぴったりの曲が欲しいと思いはじめたのです。そこで邦人作曲家に自分たちのそういう考えを託して作曲を依頼し、発表するいわゆる新曲活動というものがはじまりました。そうしてしばらくは模索的な試みを続け東マン連としても新曲活動が定着してきました。5、6年前からは、そういう模索的な活動に対する反省がおこってきました。つまり新しい曲を作曲してもらい発表しても、一度演奏しただけで終るのではなくならないというのです。本来、新曲活動が起ったのは、既存のオリジナルに対して自分たちの手で新しいオリジナルとよぶにふさわしい曲を作っていくという意図でした。それで5、6年前からは、新曲活動を続ける一方、かって演奏した新曲を再びとりあげる再演活動というものが始まりました。そして新曲に対しても音楽性の面から厳しい



吟味をして、何度も再演されていくのにふさわしい曲をさがし、本当にマンドリンオリジナルとよべる曲を求めていました。現在はその再演活動も定着してきました。が一方、マンネリ化をおそれ、新しい方向を見いだそうとしている状態です。

以上東海地方のマンドリン音楽活動について書きましたが、岩国市民マンドリンクラブにおいても、今年は熊谷賢一氏に新曲を依頼されるということで、こうした積極的な試みを今後とも続けられるよう期待します。

私とプレアン

8 49 年卒 中 国 智 美

43名いた仲間も、3年の定演では、半分の20名になっていました。その20名も辛うじて技れたというのが本音。進学体制の中で、9月の定期演奏会までは頑張ろうというのが私達の無言の合言葉でした。

1、2年生の夏休み練習は、義務感のみで出席したものでしたが、3年生の夏休みだけは別でした。不思議なことに、合奏が待ち遠しくて仕方なかったのです。トップ連はさぞかし頭を痛めたことと思いますが、私達平プレーヤーは、無心に弾くだけでした。個々人の技術はどんぐりの背比べなのに、皆が一つになった時の合奏の素晴らしいこと。何とも言えない魅力です。頭の中ではメロディーが流れ、指揮者の魔力に、とり憑かれたかのように指が動く。理屈ではない、感覚の世界なのです。

定演ま近になって、遅くまで居残って練習したこと。

それがみつかって、先生にひどく叱られたっけ。

初秋の風を膚に感じながら、夜道を必死でこいだ自転車のペダル。

合奏後の爽快な気分と快い疲れの入り混じった若い体。これらの一つ一つが、貴重な青春の一ページなのです。

運動クラブ程の激しさはありませんが、音楽を通じて一つにとけ合う和の素晴らしさと、マンドリン・クラブで得た良き仲間のことは、決して忘れません。

プレアンの想い出

8 49 年卒 中 塚 洋 二

さわやかな微風とともに、くすぐったい様な暖かさが身体を包みこみ、陽光麗かなという月並みな表現が何の不自然さも与えない程、その日は春の香りを感じさせた。加えて向山の一角から、えも言えぬ妙なる音色が流れ来て、この春景色に花を添えていたのであった。

昭和46年4月の事である。僕の心は騒いだ。中学生の時からプレアンの存在を知っていた僕に、この日のマンドリンの音色は入部の決意を決定づけるものであった。

<岩国高校プレクトラムアンサンブル>口にするのが恥かしくなる程のハイカラな名前に思えた。ギター・マンドリンを手に練習に急ぐ先輩達までがなんと洒落た人達に見えたことか。

しかし、弦を爪弾く音に誘われて新入部員の集まつた教室に行ってみると僕は愕然とした。教室にはいりきれない程の新入部員がいたが、その9割までは女子であったのだ。僕は一瞬戸惑った。男は……と見ると隅の方で4~5人固って小さくなっている。はいるべきか……はいらぬべきか……ええい男は度胸とばかりその教室にはいったのが運のつきであった。それ以来7年間、マンドリン音楽とお付き合いしていることになる。

最初に手にした楽器はギターであった。ギターは僕のあこがれであったのだ。そのあこがれはスペインへのあこがれと時を同じくしていた。

そんな中学生時代にギターを買ってもらったが、まだ手も小さく、しかも独習では上達は望むべくもなかった。が、しかしプレアンは、そのあこがれを充たしてくれそうな気がした。

入部して一月程は基礎練習に明け暮れた。そして少し指が動き始めた五月、初めて合奏曲を手渡された。いや写譜させられたと言った方が正確であろう。それが「若人」であった。結構テンポも速いし、指の動きもかなりある。しかし、つまずきながらも、初めて、マンドリンやドラ、チェロ、ベースと合奏した時のあの嬉しさ、感動は今も覚えている。合奏

って何と素晴らしいのだろうと、かって笛とハーモニカの合奏しかした事のない僕は非常な新鮮さを覚えたのであった。

やっと「若人」をものにできた頃には、もう定演用の楽譜を次から次へと渡される。高校にはいって初めての夏休みは、かくてギターの練習に時を費したのであった。夏休みが終われば、定演はすぐ目前である。定演前のあの緊張した日々、そして初めての演奏会。当日は随分とあがっていたものである。客席を見る余裕などなかった。指揮棒と楽譜をにらみつけて間違えながらも一所懸命指を動かした。メインの曲は、音楽物語「人魚姫」であった。

雰囲気は最高に盛り上っている。バッカナーレの酒宴まで弾いてふと指揮者の木村さんを見ると頬を涙がぬらしている。三年生が泣いている。いや、三年生以外も泣いている。僕はボーッとなってしまった。胸を熱い感動が包み込む。しだいに楽譜がかすんで来る。何故だか自分にもさっぱりわからなかった。ただ得体の知れない熱いものが、胸にこみ上げて来るのであった。

それまで、事あるごとに三年生は「定演、定演」と口うるさく、僕は少なからず反発を感じていた。定演の為だけにプレアンというクラブが存在するのでは余りに寂しいと思っていたのである。しかし、この日全てわかった。定演がこれ程素晴らしいものであったとは。「定演は目的ではなく結果である。」反省会における武信さんの言葉である。成程と思った。いい言葉だと。しかし二年の定演も終わり、自分が指揮者という大役をおおせつかり、責任者になってみると、この言葉は甘いと思った。定演はやはり目的であるのだ。そして結果でもある。

さて、一年の定演を終えて三年生がいなくなると、クラブの様子も一変した。何しろ主役がみんななくなったのだから質の低下はまぬがれない。これを来年のこの時期までに今年同様、いやそれ以上にしなければならない。という訳で、まず各パートの人員確保から始まった。ギター・マンドリンはたくさんいる。しかしチェロやベースはさっぱり人気がなかった。僕はチェロの音が好きだった。今でも五つの楽器の中では一番好きである。そんな訳で、ギターへの未練は断ち難かったが、手を持つ樂器をギターからチェロへと変えたのである。定演直後の10月である。

それから半年、やっとピックを持つ手が少しサマになり始めた頃、今度はベースが足りないという事である。何しろ、ベースは一人しかいなかったのだから誰かが犠牲にならざるを得まい。こうなったら、チェロもベースもあるまい。定演まで後半年だが、ベースをやってやろうと、4月になって初めて、ベースを手にした。これにはギターの経験が大いに役立った。ト音がヘ音に変わっただけで、ギターの低音部とさして変わらなかったからだ。しかし、何とも目まぐるしく、樂器を変えたものである。三年間のプレアン生活で残念だったのはこの事である。何か一つの樂器にうち込んでいれば、もう少し満足できたんじゃないかと思う。

そのベースさえも、半年先には指揮棒を振る為に手離さなければ、ならなくなってしまったのである。

今、振り返れば、懐かしい事の数々が脳裏をよぎる。新入生歓迎演奏会では調弦の時間がなくて、とんでもない演奏になった事もあった。しかし、ちゃんと入部してくれた新入生を見て胸をなでおろしたものである。六月には防府の連合音楽会に出演、「細川ガラシャ夫人」を演奏した。前日、旅館に泊まって普段、あまり話した事のない人と話した事のない事を話し合った事もあった。八月には、みんなでレクリエーションにかけたこともあった。

しかし、いろいろな活動の中で、いつも頭の片隅にひっかかっていたもの、それは「定演」という二文字であった。いつ、いかなる場所でも、この言葉は僕を支配していた。そして夏休みが終わると、僕のあせりはますます度を加えた。恥ずかしい話しだが、僕達は、O Bの手を借りる事を自ら放棄していた。選曲も決して満足できるものではなかった。しかし、それだけに事情を知っている者は、やってやろうという意気込みがうかがえた。夜遅くまでの練習。女子の多いクラブでは無理はあったが、みんなよく頑張った。

演奏会の前日、僕達は、夜すっかり暗くなつてから熊谷先生の墓参りをした。指揮者の立場としては行かざるを得なかつたのだ。何故なら、僕は指揮者としてプレアンというアンサンブルを決して満足できる状態まで引き上げることが出来なかつたからだ。後傾る事の出来る人は、熊谷先生しかいなかつた。演奏会当日は、きっとどこからか僕達を見守つて下さるような気がした。

拍手の中で最後の礼をしている自分を見つけた時、ある種の感動と満足感が僕を包み込んだ。アンコールの「鈴懸の徑」は、僕の心をすごくセンチメンタルなものにした。「若人」の手拍子は全ての完了を告げた。嗚呼三年間は決して無駄ではなかつたのだ。決して……この日全て報いられたような気がした。この気持ちは僕だけのものではなかつたであろう。50人近い仲間と共にスタートした僕達であったが、最後の定演は17人で終えた。この17人全てが僕と同じ気持ちであっただろう。いや、個々の事情でプレアンをやめざるを得なかつたかっての仲間も、僕達と同じ感情を抱いていたかも知れない。

きっと僕達のステージを、そんな気持ちで、見守つてくれたに違いない。プレアンくずれ一同からの花束が、それを顕著に物語ついていた。

やめていった人達の努力なしでは、残った僕達の「定演」もあり得なかつたに相違ないのだ。「心の和」を目標に「若人」で始まり「若人」で終わつた僕達は、決して「プレアン」を通じての高校生活を忘れる事はないであろう。プレアンとしては初めてのレコード製作、京都の塩見さんをはじめ、多くの方々に御協力をいただいて、僕達は一つのけじめをつけた。そして、それは未来への旅立ちでもあった。

今年30周年を迎える、岩国高校プレクトラム・アンサンブル。
いつまでも絶えることなく、より高度の技術と、心の和を目標に、頑張って欲しいと思います。一先輩として僕はそれを希望する。

僕の高校生活を意義あるものにしてくれたプレアンが永遠に活躍して行くことを陰ながら祈っています。

ギター冥利

S 50年卒 中須賀 義治

私が、ギターを弾き始めて若干6年ほどである。それまで、ギターを弾きたいと思っていても、独学でやるほど気力もなかったけれど、時々、兄の定期演奏会に行き、演奏を聴くにつれ、何か言い知れぬ感動が込み上がってきた。それ以来、マンドリンやギターそしてその他の楽器の奏でる音色に魅惑されてしまい、高校入学して、マンドリンクラブに入部した。他人にして見れば、そんな事であったかもしれないが、私にとっては捨て難い魅力であった。今でも思っているのだが、小学・中学・高校そして現段階の大学生活を送つて、一番印象深く心に残っているのは高校時代である。それは、ただ単にギターを弾いて、満足感に浸つてゐるだけではなかつたからである。というのは、入学当時、全くと言って良い程、私達は、マンドリン合奏に関して無知であったが、縦のつながりとしてのO B・O Gまた諸先輩達の指導の許に、2年、3年と進級するにつれて、私達の横のつながりにも和が見出た事であった。そして次く事の出来無い良き朋友に巡り会えたのも、私の学生生活に於いて、本当に喜こばしい事であった。でも、回顧するに、私達が、マンドリン合奏というものを、ある程度把握したつもりであったのに、それは途轍もなく幅広く深い音楽であるのだと痛感する次第である。しかし、私は、他の人と同様にマンドリン合奏が好きで、再に良き境遇にも恵まれてゐるので、ギターが弾ける限りマンドリン合奏を遣りたいと思っている。

青春の断層

S 51年卒 山崎庸生

今年は、岩国高校プレクトラムアンサンブルの30回、岩国市民マンドリンクラブの20回の定期演奏会を数える記念すべき年に当たり、この様な記念誌が制作された事は、我々プレアンのO Bにとっても、又僕達の後輩にとっても、更に、もう10年、20年……後に発行されるであろう記念誌にとっても、大変重要な意義をもつものだと思います。僕も、「若人」を弾いたあの頃が、しみじみ懐かしく感じられる様になった時、もう一度この記念誌を開いて見ようと思います。きっと何かを語ってくれることでしょう。…………。

高校を卒業して、早や一年半が過ぎようとしています。今でもふとその頃の想いにふけることがあります。僕の場合は、人より半年遅れて、一年の二学期に、「プレクトラムアンサンブル」という名前に、何かロマンを感じて入りました。実際にあってみたら、マジノー……。ロマンこそなかつたけれど、非常に楽しいクラブでした。こうして振り返つてみると、色々な事が思い出されます。初めて、合奏に出た時の事、初舞台の事、手がかじかんで、弾けなかつた事、皆でしゃべりながら、大根坂をおりた事、夜遅くまで先輩の家で定演の選曲をした事、そして、一生忘れる事のできない、第28回定期演奏会の事など、思い起させばきりありません。プレアンの事を除いては、高校生活の思い出を語る事は出来ません。クラスの友人より、クラブの友人の方が、気がよく合い、何でも気軽に話す事が出来ました。これら、良き友人、又、良き先輩、良き後輩に恵まれた事は、僕にとって、大変、幸運な事でした。

あの頃は本当によかったです。あれから、もう二年たつたなんて信じられない。三年生最後の定演ゆえに、何とか成功させて、悔いのないようにと皆一生懸命、頑張った。そして最後の定演も無事(?)終了した。心の底から泣いていた

人もあった。でも僕は、二年の時も三年の時も泣く事ができなかった。昨日まで、あんなに一生懸命練習した事がまるで嘘のように、今日からは、いそいそと家路を急ぐ自分が、とても寂しく感じられ、当分の間、定演の時の感激が抜けず、何か自分の中に、ぽっかりと穴があいた様で、何をやっても手につかず、ただぼんやりと、回想にふけるだけだった。先日、第30回定期演奏会を聴きに行きましたが、三年生も、今この時の僕の気持と同じではないかと思います。いっしょに活動したのも、彼らが最後となるわけで、来年からは、クラブに行っても、無視される事が、多々あるのでは……。でも、それはしかたない、時はこうしている今も、どんどん過ぎているのだろう。又、いつか、あの時のメンバーで、合奏が出来る事を楽しみに、筆を置きたいと思います。 プレアンにはいって本当によかった。

思　い　出

852年卒　国　広　幸　雄

高校時代の思い出は、と言われると、苦しくも楽しくもあったクラブの事が思い出される。

私達が入部した当初は、教室を使用することができず、屋外で、空模様を気にしながら練習したものでした。来る日も来る日も同じ練習ばかり、そうして始めて弾いた曲「若人」、生涯の思い出になると言つてもいいような曲でした。合奏の前日に楽譜を渡され、しかも合奏があることなど言われなかつたので練習せずにいると、いざ当日、合奏前に練習したぐらいで全く弾けず、ただ楽譜をじっと見ながら汗を流していました。

きびしい練習を積み重ねむかえた定期演奏会、今までの努力が、この日のためだけに注がれ、3年生はこの日をもって3年間のクラブ活動に終止符を打つ。熱意のこもったすばらしい演奏でした。

演奏会が終わり、また来年を目指して毎日練習が続けられ、次の年の定演も、部員一同一丸となって終えた時には、喜びと感激でいっぱいでした。長く世話をしてもらった3年生もクラブを去り、今度は私達がクラブを担つてゆかなければなりませんでした。定演後は、何か気が抜けたような思いになり、何度も、クラブをやめようと思ったか。でも、そのつど感激的な定演を思い出してはとどまりました。

私達が3年になって、全国学校合奏コンクール、米軍基地での演奏などと活発な活動を続け、又、最大の目標、定期演奏会のための練習に励みました。定演が近づくにつれ、みんなと話し合った口論（議論）も有意義だったと思います。

第29回定演当日、今までつらかったことも、みんなと激しく議論し合つたこともすべて忘れ、指揮者のタクトを一心に見つめて、無心で弾いた。すべての人がそうであったと思います。そうして演奏が終った時、何故か涙がこみ上げてきて「若人」を弾く時には、まわりの人の顔がわからないくらいでした。悲しいのか、うれしいのか、その時の気持はいまだにわかりません。

プレクラム・アンサンブル、素晴らしい仲間の集まる所だと思う。

岩高プレアン30回記念定期演奏会にあたつて

852年卒　守　富　文　昭

第29回定期演奏会卒業生の私達が、定演を前にして気がついたこと、それは次回で30回目を迎えることになるということであった。こういった地味なアンサンブル活動は、ともすれば途中で挫折しそうなものであるが、それがこうして年々盛大となっていくことはただ単にマンドリン音楽の美しさだけではないようである。

私の個人的主観で述べさせてもらうなら、他のサークル活動にない独特の雰囲気を持っているということだ。それというのも私はこれまでに雰囲気のよいクラブに出会ったことがなかったからだ。厳しさと優しさを持ったすばらしき諸先輩方、苦しみながら楽しみをあじわった練習、部員どうしの衝突そして和解、ほんとにわずかの間だけれどもいろいろなことを味わった。少々オーバーな表現をさせてもらうなら、人間的にも大きく成長させてもらった。だから私は今も、並の高校生間では養うことの出来ない人間性が培われたと思っている。

とりわけのんびり者の集りだった私達の代は、部長であった岡崎や諸先輩方にやきもきさせていたが、各自が知らず知らずのうちに「和」のうえにたって、私達の力でなんとかしていこうと奮い立ったことは精神を養ううえでも大いに役立

ったと思っている。

この定期演奏会というのは、現役生にとっては唯一の目標かとも思う。

私達が現役の頃に、大阪で毎年行われている「マンドリン合奏コンクール」に出場しようという話がちあがったことがあり、そして今の現役生も望んでいることだが、出発の準備までして出場不可能になったことがあった。

要するに学校側、具体的に言えば職員会議で認めてもらえたかったのだ。

私達のようにマンドリン音楽の経験者には理解できても、知らない人達には存在すらないといった状態に映っているらしい。これは、私達にとって、野球でいう甲子園大会以上のものであり、唯一のマンドリンコンクールなのである。

今マンドリン活動は盛んになり、各地で新しくクラブが発足し腕を競い合っているのに、30年の歴史を持つ我が母校が未だに出場できないのは、まことに残念である。

また、現在では学校管理が機械警備となり練習が午後5時30分までしかできないのが現状であり、水曜金曜などの日には1時間かそこらしか練習ができない。

そこで、OBのみなさんにお願いであるが、みなさんの中には全日本マンドリンコンクールで優秀な成績を残された方々をはじめとしてプロ級の腕を持った方が多勢いらっしゃるが、どうか都合のつく日には母校へ帰って後輩の指導にあたられて欲しい。

今の制約された練習時間を最大限に活用するのは、みなさんの様々な音楽理論と演奏にかかっている。

こうして、30回の定演を記念し催しをして頂き、先輩方の特に苦労話を聞かせて頂くことは、現役生ならずとも大収穫である。

今後我々岩高プレクトラムアンサンブル出身者は、プレアンと市民マンドリンを軸として更に結束したいものである。今はまだ後援会なるものがないが、運動クラブに負けない後援会という組織が欲しいものだ。

後援会を1日もはやくつくりましょう！

心の故郷

852年卒 四 元 誠

僕がプレクトラムアンサンブルに入部したのは、秋も深まった10月の終りでした。高校生活にも慣れ過ぎてやや疲れ気味になっていた時に、部長の岡崎に誘われて入部したのです。プレクトラムアンサンブルとは何だろうと思いました。また、ドラとは何だろうと思いました。僕は始めて「ドラ」という言葉を聞いた時に打楽器のドラを思い浮べました。でもその頃は退屈していたので何でもやってやろうと思って、入部したのです。しかし、後にドラの練習をしている部屋に連れて行かれた時、マンドリンのような弦楽器だったのでホッとしたのを覚えています。

その時から、僕の新しい毎日が始まったのです。放課後、西日のさし込む教室でジャーンジャーンと基礎練習する。始めのうちはさすがにおもしろくありませんでした。しかし、親切な先輩方の指導や、一人で基礎練習をしている時に、聞こえてくる合奏を聞いて少しでも早く、合奏に加わりたいと思うようになりました。その時聞こえていた曲は「山嶽詩」だろうと思います。この曲を、僕はまだ一度も弾いたことはありません。しかし、マンドリン合奏への出逢いの曲として思い出深い曲の一つとなっています。とにかく、それまで音楽と言ったらほとんど知らなかったのに、他の教室から聞こえて来る合奏を聞いて、涙が出る程嬉しかったのです。クラブ員には女子が多くて始めのうちは、照れくさいやら、恥いやらの中で続けて行けたのも、早く合奏に加わりたいからだったと思います。

それから、いろいろなことがあります、二年生の夏に初めての定演、ここであらためてもう一度びっくり、それからまたいろいろあって、最後の定演を終えたのです。定演が終った時に、いろいろな感動や悔いや別れ、淋しさなどで、みんなが涙を流す。これは僕にとって、それまで、生きて来て一番ショックな出来事だったし、また一番素晴らしい出来事でした。

クラブをやっているうちに、クラブを作って下さいました故熊谷幹雄先生のことも知りました。そして、このクラブがもう長い間続いていることも知りました。こんなに素晴らしいクラブを残してくれた熊谷先生や諸先輩方には、一番新しいプレアン卒業生の一人として大変感謝しています。そしてプレアンには、何かわからないけど、ある一つの精神が、今でもまだ続いているということははっきり言えます。

プレアンなくして僕たちの高校生活はなかっただろうし、今の僕もなかっただろうと思います。自分自身の性格が変わることもはっきり感じられるのです。最近は、比較的自己中心で他人には冷たい世の中の風潮ですが、プレアンにいたお

かげで少しあはれのことも考えられるようになったと思うし、三無主義、しらけの世代の中でも、物言に素直に感動するようになったことは、人間らしくて一番いいことだと思うのです。そういう意味でプレアンはいい人間形成の場であるように思われます。

プレクトラムアンサンブル、どんな世の中になっても、いつまでも続けていって欲しいクラブです。プレアンには、我々の心の故郷だから。

そして、岩国市民マンドリンクラブ、今年は20周年記念でしたが、僕も運よく、参加することができました。主としてプレアンOBによって結成されているこのクラブには、10年も20年も昔からマンドリンを弾き続けている先輩方がおられます。20年？ 僕らの生まれる以前です。プレアンは約30年ですが、20年前にプレクトラムソサエティが結成されたということは、やっぱりその当時のプレアンを卒業された先輩方も、僕たちと同じようにプレアンで出逢ったマンドリン音楽を忘れられずに、作られたことだと思います。そういう気持ちが、何十年も続いているということが、何といっても素晴らしいことです。これからも、できる限り参加して行きたいと思います。そして、マンドリン音楽の素晴しさを少しでも多くの人々に知ってもらいたいのです。



昔の部章



想い出のプログラム

I C M C に参加させてもらつて

I C M C 岡 崎 幸 枝

私がはじめて I・C・M・C の演奏を聞いたのは、50年のマンドリンフェスティバルに行ってのことだった。「月の光」「マドリッドへの帰還」、「チャルダス」と三曲演奏されたが、あのきれいなトレモロを聞き、お友達3人と感激していました。私達はまだマンドリンに対して未熟な経験しかないけど、一緒に演奏できたらと話し合っていました。幸い入部させて頂き、第19回第20回定期演に参加させてもらいました。岩国より離れているので、毎週土曜の練習には、残念ながら行けなかったけれども、合宿、強化練習には努めて参加する様にしました。行くまでは、私のような者が一緒に弾けるのだろうかという不安の気持でいっぱいだったが、楽器を持って練習に励んでいるみんなの顔を見ると、来て良かったとホッと安心するでした。あの夏の暑い汗の出る練習もあれほど緊張感と充実した日はなかった様に思うのです。又記念すべき第20回定期演では、熊谷賢一先生作曲による「ボカリーズ第5番」私の好きな「細川ガラシャ」を弾くことができ、本当にうれしく思います。きっと私にとって忘れることのできない思い出になるでしょう。多くの友とも知りあえ、私にとって心に残るすばらしい経験をした様に思います。

I・C・M・C に参加させてもらい、本当に心から感謝の気持ちでいっぱいです。今後の I・C・M・C の増々の御発展をお祈り致します。

すばらしい明日のために

I C M C 鈎 屋 時 夫

私がマンドリンの合奏を、最初に聞く機会を得たのは、岩国高校に入学して間もなく、新入生歓迎行事の中での何かでプレクラム・アンサンブルの演奏でスクリーンミュージックを聞いたのがはじめてでした。そして、それがたいへん印象深かったのか、その後プレアンの定期演奏会や当時の岩国プレクラムソサエティーの定期演奏会には、毎年欠かさず、いそいそと聞きに行つたものでした。私は小学校以来音楽がにがてだったので、そんな私をよく家の者もからかったものです。それほど音楽に無縁だった私が、当時は言うにおよばず、現在楽器を持って弾いているなどということは、当時としては思いもよらなかつたことです。

このように現在の自分を知るよしもなく岩国高校を卒業して大学へ進み、そこで、私の人生は大きく変わってしましました。プレアン出身の某悪友の甘い言葉についつられて、私はマンドリンの道にふみ込むはめになってしまったのです。もちろん高校時代からまったく興味がなかったわけでもなかったので、少なからず希望をもって入つて行ったといったほうが近かつたかもしれません。

そして少しづつ楽器が弾けるようになり、合奏の中に入つてゆけるようになると、毎日が楽しくて楽しくて、なぜもっと早くから高校時代からやっていなかったのかと、自分のことながらくちおしく思ったこともあります。

大学へは、岩国の自宅から通っていた関係で、昭和50年、現在の岩国市民マンドリンクラブの第18回定期演奏会に出していただいたのが I C M C での最初のステージでした。

当時、大学のマンドリンクラブでの合奏しか経験のなかった私は、社会人のサークルでの合奏に参加するということに非常に抵抗があり不安な思いをしたものでしたが、同じ岩国高校出身の方が多いということと、何よりもメンバーの人には気さくな人が多く、良い人ばかりだったために、その中に浸け込むのにそれほど時間はかかりませんでした。そして最初のステージである、第18回の定期演のための合宿を石城山の青年の家で行つたわけですけれども、その時のレクリエーションの楽しかったことは今でも思い出されます。

その後、昭和51年の2月中国地区マンドリンフェスティバルへ参加するために倉敷へ、又3月には20周年の記念行事としての京都特別演奏会、その夏第19回定期演奏会。昭和52年1月に成人式のアトラクション出演、2月西日本マンドリンフェスティバルで神戸へ、そして夏、第20回定期演奏会、というふうにいろいろ演奏会に参加させていただきました。そのどれをとってもいろいろ思い出がうかんできますが、いちばん自分で思つて残念なのは、いつも個人練習が不十分なままに演奏会に出てしまうことで、メンバーの人にはいつも申し訳ないと思っております。

さて一口に20回目の定演と言いましても、私の I C M Cと共にした期間というのは20年の歴史の中では半歩も共にしたわけでもなく、まして、岩高プレアンの30年の歴史の中にはみじんもありません。しかしその歴史の中に生きつづけて、つかわされて来た伝統とかカラーというものはおのずと感じられ、伝わってくるものです。

長い歴史の中で、私たちにできることはほんの一部分ではあるけれど、合奏を通して音楽の楽しさ、美しさを多くの人に少しでも伝え、そして、このすばらしい仲間の和をもっと広げてゆくことにあると思います。この20回というのは30回に向かってのワンステップであり30回は40回へと、すばらしいものは永遠に続いてゆくものであり、又、みんなの力で続けてゆかなければならぬと思います。

第20回の定期演奏会のために、熊谷賢一先生が作られた、マンドリンオーケストラのためのボカリーズ第5番の中にある“すばらしい明日のために”（門信訳、作）という詩がありました、私はこの詩が大変に好きになったのですが、その一節に……すばらしい世界は出かけていって造り出そう……という部分があります。まさに、すばらしいマンドリン音楽の世界を出かけていって造り出そうではありませんか、すばらしい明日のために！

無題

I C M C 柴田利和

マンドリンを始めたのは1961年9月で、プレアン出身の富永勝之氏が入社し、弾かないかとさそわれた26才の時から。それまで、楽譜を見ることの少なかったのが、合奏の楽しさを知り、山パルマンドリンクラブから門戸を開設した岩国ブレクトラムソサエティ、I C M Cへと、練習をサボらないだけの現役状態が続いている。

なぜ続いたのか？と考えてみても、合奏するのが面白いからとか、練習日にマンドラがないと合奏ができないで困るだろうと思ったからとか、やり始めた中途で止めるのはいかんことだからとか、単純労働に向く体質だからとか、皆について行こうすると人一倍苦労することがわかっているのに、それを苦労すると老けないのではないかと思っているからとか、常連の若い人や中年の人、時たま顔を出す人に会えるからとか、いろいろある。しかしそれよりも、土曜日、強化練習、遠方での演奏会等に、気持良く送り出してくれた音楽好きの家族がいる。と云うのが一番大きな理由だと思う。正直云って、現在の公私に於ける忙しさでは、定演前の練習はきつい。これだけの時間があればいろんなことができるに違いない。止めてしまおうと思ったことも、サボろうと思ったことも再々あるが、やっぱりますます深みにはまるようで、転勤でもないと止められそうにない。

それでも富永氏にさそわれて、はじめて西高O Bだけだったブレクトラムソサエティの練習に出た時、音を出すのがこわくて、できれば一番うしろで楽譜を1人だけで見て、わからぬようにそっと弾きたい、それがだめなら弾かずにそのまま帰ってしまいたいと云うような気がしたのを覚えている。勿論はじめは、O Bが仲間内でしている話や笑い声をそばで聞くだけだった。それが今では、常日頃の練習日（クラブ活動の原点だと思う）に、もっと大勢集まれば良いのになどと思いつながらも、又“あの年寄、今年もまだ隠居せずに弾きよるで！”と云われているに違いないと思うことがあっても、居心地が良いため続いている。

ところで、自分もクラブの古株になって来て、財産係などを仰せつかっているために、I C M Cの中心になって動いている人達の苦労を近くで見ているが、とにかく定期演奏会に至る一連の仕事は大変なものである。今年は定演のあと、記念誌発行のための作業が続いているが、それが本格的になってくると、私生活を犠牲にして、全くあきれるくらい一生懸命にやっておられる。

会長が“組織として体を為す I C M C”を目指してやっておられる実践と啓蒙、又それに応えて動いている人達。この人達の活動は次々と輪をひろげ、これからも立派な I C M Cの歴史を積み重ねて行くに違いないと信じている。

マンドリンと私

ICMC 中 塚 博

今、私がこうして書いておれるのも、昔のはんのちょっとしたきっかけがあったからなんです。あの時あの音を聞いていなかつたら……

私が広島へ来たのが昭和42年春でした。東洋工業に入社して独身寮に入りました。一年経った頃、同じ職場の友人が、部屋でギターを弾いていました。きれいな音がするので好奇心にかられ行ってみました。いろいろ聞いてみると、社内のマンドリンクラブに入部して練習しているとのこと。それでは自分も、と思い楽譜を見せてもらいましたが、とても読めそうにありません。「とてもじゃないがこれじゃすぐやめてしまいそうだ」と言うと、「マンドリンならどうか」ということになりました、なる程ギター程音譜が多く有りません。弦も少ないし。これならなんとかなるから一まずマンドリンで楽符を覚えてからギターに移ろうという気持で入部した訳です。ところが、マンドリンも結構難しい訳で、うまくならないまま何年か経ってしまいました。

入部して4年経った頃でしょうか。私と同期の人が、入部したいと我がクラブへ来ました。（この彼が私を岩国市民マンドリンクラブへ導いてくれたのですが。）ちょうどその頃は、マンドリン合奏がおもしろくなり始めていた時です。折り良く彼が入って来た訳です。話をしてみるとマンドリン合奏について、また曲について詳しく知っていました。いろいろ聞いているうちに、彼は岩国市民マンドリンクラブ（当時は岩国プレクトラムソサエティーと言っていました）で活動しているとのこと、そしてそのクラブが歴史が有り合奏レベルも相当のものがあるという事を知らされました。一つ社内のクラブの為にも、また自身の為にも武者修業へ行ってみるか、という事で紹介してもらって岩国へ通い始めた訳です。その当時一番印象に残っているのは、彼の家で聴いた演奏会のテープです。もちろん岩国のクラブのものですが。それまで私達がやっていたのとはおよそ違う曲だったので。一つは「人魚」一つは「ロ短調」でした。自分達も何とかこれらの曲を弾きたいというので、それ以後はその曲を目標にして練習を重ねて行きました。いくつかの苦労はありましたが、ついにその曲を演奏できた時のうれしさは格別のものでした。

しかし合奏レベルの差はやはり大きく、とても対等という事にはなりません。しかし岩国のクラブの好意により合同演奏会も何回か持たせてもらいました。

この頃からですね、マンドリンというものに対して考え方多少変わったのは。

どういう方向に変わったかと言いますと、それまではマンドリンをやるという事は、クラブに集まって音を出しておれば良い。交際範囲もクラブ内でまとまればそれで良いという考えでした。しかし外に出る事により、この一本のマンドリンは日本全国を知るための（ちょっと大きさですが）窓なんだなという事を知りました。また岩国のクラブにより教えて頂きました。早く言えば、マンドリン一本で各地の人々と交友が持てるという事です。岡山、京都、東京といろんな所へ演奏に行ったり、また聴きに行ったりしますと、その度に新たな友人ができるのです。マンドリンの師と会えるのです。

また、こうして書いているおかげで何年か後の人々と、また大先輩とお話ししができるのです。これらのが、どれだけ自分にプラスになっているかを思わずにはおれません。東洋工業のクラブとの合同演奏会以後は省きますが、私がこのマンドリンクラブで教えて頂いた事、それは、仕事にも通じ社会生活にも通じます。

岩高出身でない私ですが、岩国の現役の皆さんとも、こうしてお話しできる事を幸せに思います。

今後とも、特に若い人々により、このクラブを、ひいてはマンドリンそのものを発展させて頂くようお願い致します。



20周年おめでとうございます

ICMC 中村 あけみ

20歳を迎えたクラブと私の出会い、それは私がまだ重いカバンを下げ、雨にも風にも負けずあの長い長いダイコン坂を通り続けていた頃のことです。その私も今はもう(?)歳。クラブより少々年上……月日の流れの早さと同時にいろいろな思い出が頭をめぐります。といっても、実のところ私は岩国高校プレクトラム・アンサンブルの卒業生ではなく、全くの部外者、それもマンドリンでもなくマンドラでもなく、ギターでもない、パーカッションなのです。そんな私が、現役の定演の賛助出演をきっかけに、当クラブの人々と出会い、それが今日に至っているといったところです。私がクラブの演奏会としてのステージにたったのは第16回定期演奏会でした。年表を見て驚いたのですが、それは岩国プレクトラムソサエティから岩国市民マンドリンクラブと改称して初めての演奏会だったのです。そこに何かしら私とクラブの結びつきを感じずにはいられない気がしています。

今まで何度も演奏会に行って参りましたが、一番印象に深く忘れられない演奏があります。それは私が大学一年生の夏の定演です。あの時の感動は思い出すことはできても、今、感じることはできないものです。あの時の感動が私とクラブの結びつきを決定的にしたといえます。熊谷賢一先生が作曲された「群炎I, II, III」の演奏は、演奏が上手、下手を越えた演奏者全員が観客の人々の存在さえ忘れ、自分自身が何かを感じ、感動した演奏だったと思います。あのようなすばらしい演奏に参加できたことは、私にとって貴重な体験であり、自信です。あの時のような感動をもう一度……と心ひそかに願っている人は私だけではないと確信しています。年令に関係なく、上手下手でもなく、何かしら心に伝わる、自然と涙のあふれる演奏、そんな演奏を実現するために頑張りたい気持でいっぱいです。

そのような演奏を実現する第一歩が通常練習ではないでしょうか？学生のクラブと違って、時間のとれない社会人クラブにとって週一回でも大切な練習時間。私はまだ学生で休みの時期しかクラブに行っていませんが、休みの時は必ず行っています。先程言いましたが、私はパーカッションで、毎週行ってもただ座って曲を聞いているだけなのです。でも何故かしら、それでもとっても楽しいのです。ただ聞いているだけなのですが……この気持ちは解っていただけることと思います。特に私の場合、大学生の期間クラブに入っておらず、大学四年間、私の思い出となるもの、そしてやり通したこと、それが岩国市民マンドリンクラブの活動でした。「私は一体この四年間、何をしただろう……」と考えこんだ時、「市民のクラブ活動だけは一生懸命やった」と言い切れるのが救いです。クラブに対する感謝の気持でいっぱいです。

最後に、クラブの運営に当たり、会長さんをはじめ幹事の方々の御苦労に対して感謝の念が絶えません。本当にありがとうございます。今年は岩高プレクトラム・アンサンブルも時期を同じくして30回記念。本当におめでとうございます。今日、この市民クラブの為に、各地から人々が集っています。そのように、何故か人々をひきつけて放さない魅力のあるクラブが岩国市民マンドリンクラブです。いつまでも大切にしたい気持でいっぱいです。これからも岩高プレクトラム・アンサンブルと共に、30周年、40周年、50周年……と歴史を語り続けてほしいものです。

S 46年頃のこと

ICMC 沖永 匡

拝啓 御無沙汰しております。記念誌の原稿ですが、資料があまり残っていませんので判っている事業と雑感を記します。

S 46年	8/14～16	強化合宿 石城山青少年宿泊訓練所
	8/28	第14回定期演奏会
S 47年	5/28	東洋工業M・Cと交歓会
	7/16	熊谷先生の墓参り
	7/23	プレクトラム・アンサンブルとの交歓会
	8/12～16	強化合宿 光青年の家

定演の選曲では好評だった音楽物語「人魚姫」に続き、「朱雀門」を第14回に、第15回に「氷姫」をシリーズ上演した

が、次第に難度な曲に目が向けられ、第14回には「メリヤの平原に立ちて」を取り上げ、第16回以降は熊谷賢一氏の曲に移っていった。この時期は岩国プレクトラム・ソサエティと名称を変えてプレアン同窓生以外の同好者に門戸を開いて2年目、3年目に当り、多数の同好者の入部をみたが、特に東洋工業MCとの交流が深まり、S48年以降の演奏活動に大きな影響を与えた飛躍の年々であった。

S48年3月に中央公民館が改築されるまでは適当な練習場所が無く、通常の練習は東共用会館で、強化練習は染香幼稚園、商工会議所ホール、中央公民館、理美容学校ホール等使用した。通常練習ではパートが揃わないこともあり、普段できないギター合奏、談笑で終ることもあった。

この頃、茫だな数の譜面をコピーするため、リコピーノの中古を購入した。多少譜面の配布がスムースになった。又大型楽器ティンパニイをクラブ員より借金して購入した。

20年の伝統に支えられて

ICMC幹事長 石川善久

「岩国市民マンドリンクラブ」この、どなたにも分っていただけるごく一般的な名称が誕生したのが今から4年前。昭48年の春です。昭33年、岩国高校プレクトラム・アンサンブルの卒業生を中心組織し「岩高プレクトラム・ソサエティー」と云う名称で発足した当クラブが、昭45年「岩国プレクトラム・ソサエティー」に改称し、その3年後の昭48年、岩高プレクトラム・アンサンブルの卒業生のみの活動によらず、岩国の地に広く根を下した広域的な市民ベースの活動をしようと云う事で、その名称も主旨にふさわしいものに改め、現在の「岩国市民マンドリンクラブ」(ICMC)が生まれたわけです。その誕生から今日まで20年の歳月が流れました。人間社会でいう成人までの年月です。このたびの記念誌を編纂するに当って、私の知らない誕生当時のクラブの事情等を身近に感じ、それと現在のクラブを対比すると、数多くの点において変貌を遂げていることに気が付きます。その幾つかをあげてみると、まずメンバーの数です。発足から今日に至る迄、名簿の上に数えられる方々の数はゆうに数百名にのぼり、夏の定期演奏会のステージの上に顔を揃えるメンバーは約80名近くになります。その構成も、学生、一般社会人、主婦等、様々です。又、近年は遠方よりの参加者も序々に増え、長崎、北九州、山口、徳山、広島、岡山、大阪、東京と、他のアマチュアサークルには、あまり例の無い特異な構成となっております。

次に活動エリアの拡大ということがあげられます。「岩国市民マンドリンクラブ」に改称した昭48年の夏には、部員のかねてよりの念願であった広島での演奏会を開催することができ、地元の関係方々の御協力に支えられて予想以上の成功をおさめ、感涙のうちにその終演の幕を降すことが出来ました。この広島での演奏会はその後も続き、今では、夏の恒例行事の一つとなっております。又その年には、社会人マンドリンクラブ関係の全国的組織である全日本マンドリン連盟(JMU)にも加入し、各地で開かれるJMU主催のマンドリンフェスティバルにも積極的に参加してまいりました。この様に岩国地元でのみの演奏活動に留まらず、前述の昭48年第1回広島演奏会を皮切りに、今日迄に、岡山、東京、倉敷、京都、そして神戸と、可能な限りの演奏旅行を行なってまいりました。特に昭51年3月21日、京都御在住の塩見、尾崎両氏をはじめとする関西方面の方々の絶大なる御厚情、御尽力により実現することが出来ました京都特別演奏会は、三浦会長の御言葉を拝借すれば「ICMC20年の活動の全てを披露する演奏会」にふさわしい充実した演奏会でした。部員各自の意気込みにも氣魄が感じられ、サークルとしての団結力にも一般と強靭さが増したのもこの京都特別演奏会によってではないかと思われます。又、そこに生まれた御当地の方々との心暖たまる友情、深い絆、これこそ、アマチュアサークルの持つ醍醐味であり、我々の指向する姿勢そのものではないかと思います。

この様に、誕生20を迎えた現在、メンバーの数も増え、活動規模も拡大してまいりましたが、その指向するところは創設された諸先輩方の意志、情熱によるところであり、マンドリン音楽を通じての会員相互の素朴な親睦をはかり、同時に、マンドリン音楽の追求、そして普及をという基本姿勢は変わらぬものです。願わくば、岩国というこの一地方都市にあって、真に市民ベースに則った活動を行ない、岩国文化の一端を担うサークルに……と一人思いをめぐらすのは、叶わぬ未来図でしょうか。

最後に、今回の記念誌作成の作業を進めていく過程において、数多くの先輩の方々から貴重な資料を御寄せいただき、黎明期にあった頃の意氣溌剌とした姿を感じることが出来ましたと共に、それが多少形を変えながらも、今日現在まで、綿々として続いているという事実に幹事の一人として、誇りと自信を得、更に、この伝統の重みをひしひしと感じている今日この頃です。

30回のおもみ

3年 中村 浩二

プレアン現役時代の各年代の思い出ということで、この度の記念誌への執筆を依頼されたわけですが、僕は今年の卒業生で「思い出」と言ってもまだ記憶に新らしいことばかりで、「あの頃はこういう時代で云々……」とかいう感じではありませんが一応それらしきものを少しく述べみたいと思います。

今さら言うまでもありませんが、プレアンには先輩達が築きあげた過去30年という伝統が有ります。それを実感として感じだしたのが、2年生になった頃ですが、それまでは別に何とも感じていませんでした。熊谷先生のことを聞かされても、「ふうん」という感じだけでした。しかし2年生になって、そして部長をやらせてもらったせいもありましょうが、その厚みというものが素晴らしいものであることに気付きました。ちょっとやそっとでは簡単にくずせるものではない……という、たのもしささえOBの人達の活発な活動から感じられました。そして熊谷先生については、実際にお目にかかるわけではありませんが、とても尊敬しています。先生が亡くなられてから10年も月日が流れようとしているのに、その心意気がOBの人達の心に根強く残っている、そして現役にも受け継がれている、というのは何よりも先生の姿勢というものが、いかにみんなをグイグイ引っ張っていったか、ということでしょう。それだけマンドリンに対する熱意というものが素晴らしかった、ということにつきると思います。そのような先生に対する尊敬の念と同時に、部長として「こういう時、熊谷先生がいてくれたらなあ……」と思うことが何度もありました。僕個人の中にもそれだけ先生の像というのが（あくまで理想像ですが）焼き付いているのです。今日、こうしてICMCの20回定演を無事に終え、そして現役の30回定演をむかえるに至ったのも過去の先輩達、そして誰よりも熊谷先生のおかげでしょう。

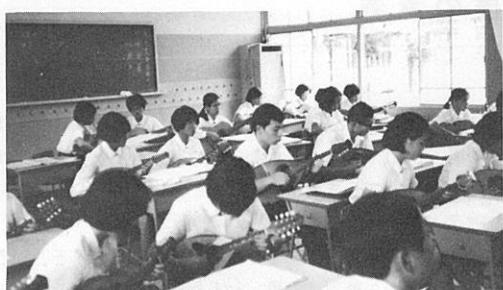
僕がこれから現役に望みたいことは、先生が亡くなられて何年もたっているわけですが、その燃えたぎる火をたやすなということです。時代も違うし、どういう形であらわれるかは、わかりませんが、とにかく音楽を追求する心意気というのを失なってはいけないと思います。昔の古いOBの方達が、よく「サークル化している」という事をおっしゃられるのを耳にしますが、それは時代と共にかわるのであって、「音楽性の追求」という面ではいつの時代もかわらないのではないかでしょうか。とにかく今後の発展を望むばかりであります。

プレアンの思い出

3年 貴船 宏子

私にとって初めての定演（第28回）が無事終了し、その感激も醒め切らない9月の終り、私はマンドリンからマンドラーに移りました。決心したのは定演の3日前。その日、当時ドラ唯一の一年生だった古江さんと2人で曲を合わせた時、私がほんの冗談のつもりで「ドラにかわろうか……」と言ったのを聞いた彼女が「そうしんさい、そうしんさい」と強く勧めてくれなかつたら、私は今頃ファーストにいたかも知れません。こうして私のドラへの移籍は、今から考えると全く勝手なものですが、他の誰にも相談せずその日のうちに全く安易に決まってしまいました。

一回り大きな楽器をかかえ始めて2週間ほど後、ようやく少し慣れてきたかなと思った頃のことです。ある3年生のギターの男子の先輩（現ICMC 敢えて御名前は申しません）が来られて私のトレモロ（のつもり）を聞かれるや、「なんピックの音が1回すじゅ。1まわすんよ。ピックの音の間から弦の音が聞こえるみたいな。」ア然というか、ガク然というか……。この方に限らず、あの学年の男子の先輩は皆、厳しい方ばかりで、「魔の〇さん、恐怖の△さん、地獄の□さん、鬼の×さん」などと今だに言っているほどです。だからこの方々が来られると、どんなに雰囲気がダレっていてもピシッと引き締まります。少なくともその恐さを知っている私達はです。



教室での練習

無事2年生になれ、新入生も4人入り、指導など柄にもない事ですが、やらないわけにもいかず、そのうちにすっかり先輩気分になって教えていたのはいいのですが…… 5月の終りのある日、パートリーダーが私の弾いているところを見て「ちょっとA線のトレモロやってん。」と言われたとおりにすると、じっとそれをながめて「うーん、どこが悪いんかわからん。」またもガク然です。2年生にもなってこんな注意のされ方をするなんて。結局開き直ってその日はずっと開放のトレモロばかりしていました。

あれから1年3ヶ月。その間に第29回定演が盛り上がりの中で幕を閉じました。そして新入生がまた4人、あの頃の1年生は中堅となり指導に練習に励んでいます。私は3年。たった1人です。つらい事もあるけれど、もう嘆いている暇はありません。「バクダッドの太守」の16分音符に苦しみ「レナータ」で音の汚なさに悩む日もあと1ヶ月、そう思うと何とも言えない心地です。去年の3年生がドラの“メッセージ・ノート”を作って下さいました。定演の後、引退する3年生が後輩に言いたい事を書くノートです。このノートにおそらく私はこう書きます。「ドラにかわってよかったです」少なくとも私個人としてはそう思えるのです。それでもう一言「プレアンに入ってよかったです。」

私とプレアン

2年 河 村 直 子

私がプレアンに入ろうと思ったのは、岩高新聞か何かに載っていたプレアンの記事を見た事です。その記事には、クラブの伝統や合宿のことなどが書いてありました。うわさでも、新入生には先輩が一对一でついて熱心に指導して下さるということを聞いていました。私はすでに他のクラブに入っていたのですが、そのクラブはあまりにもやり甲斐がなく、それにひきかえプレアンなら絶対、高校生活を振り返った時、思い出が残ると思ったのです。プレアンにかわろうと決心した晩は、プレアンに入ったらどんなだろうとか、いろいろな考えが頭の中をかけ巡っていました。

でも私が入部したのは五月だったので、他のみんなはもう基礎練習もかなり進んでいました。でも先輩方は遅れて入った私を歓迎し、つきっきりで教えて下さいました。始めはピックがずれて悩みました。みんなはどんどん先に進むのに、私はまだ全然弾けないと思うと、悲しくなりました。

今ではみんなにどうにかついてゆけるまでに成長し、今年は1stも経験します。2年で1stを経験できるということはこれから私達にとって、大変プラスになると思います。

今年はちょうど30回目の定演に当たるので、先輩方も必死になっておられます。私達も充分とは言えませんが、少しでも先輩方の力になりたいと思っています。

本当にこのクラブは一人ではできないクラブなのです。3年生、2年生、1年生がいてこそこのクラブなのですから、みんなが協力して絶対に成功させます。成功させるのが私達の義務だと思うのです。

私はプレアンの仲間が誰よりも好きです。喜びも悲しみも分けあえる仲間だと思います。きっとみんなも私と同じ気持ちでしょう。

私はプレアンに入ってよかったです、心から思っています。

僕の青春

2年 吉 田 和 史

第30回定期演奏会も無事終わり、今日は本当に喜びの気持ちでいっぱいです。それと共に、今までの張りつめていたものが急に切れて、なんだか心の中にぽっかりと大きな穴があいたような気がします。

しかし過ぎてしまえば早いものと言いますが、私にとってこの一年間というものは、本当に長いようであり、短いようでした。

今、私の心のアルバムを、一頁一頁めくりますと、いろいろなことが思い出されます。

冬のさなかの練習は、思ったより苦しいものでした。トレモロをするにも、凍えている手では思うようにいかず、自分でもやりきれない時もありました。そんな時、懸命に練習している先輩の姿を見て、どれだけ大きな自信となったかしれ

ません。

又合宿では、一日中練習であげてくれて、つらかったけれど、先輩との交流も深まり、楽しい合宿ができました。その結果が定演の成功に結びついたと思います。

さあ、これからは私達が、本当に自分自身自覚を持ち、諸先輩方のお教えを守り、第31回定期演奏会をめざしてゆきたいと思います。頑張ります。

これから僕は………

1年 阿武秀治

僕がプレクラム・アンサンブルに入った動機は、中学1年の時、定期演奏会へ行き、聞き慣れない音色に何か体がしびれるように感動し、それが忘れられなかったからだ。高校に入学して、中学時代やっていたバレーボールを続けようか、プレアン入ろうかと迷ったが、結局このクラブに入った。

このクラブに入って早くも半年になるが、だんだんとクラブの様子や、お互いの人柄もわかるようになってきた。そして、このクラブは深い伝統の上に築かれたクラブであることもわかり、その伝統を僕らも受け継がなくてはならない責任があると思うようになった。

もうすぐ3年生の先輩と一緒に練習できなくなるけれども、半年後に入る新入生のためにさらに続けなくてはならない。

僕思うに、このクラブは先輩達がとても人格のある人ばかりだ。練習やクラブに対しては厳しく、それ以外の時は気軽である。このことも受け継がれた伝統だろうと思う。

僕はこのクラブに入って後悔していない。むしろよかったです。3年生の先輩達が引退されると、また新しい気持で練習に打ち込まなくてはと思う。そして先輩についていき、少しでも多くの人が感動するような演奏を目指したい。

定演を終えて

1年生女子合作

若人と共におりていく幕。“終った”頭に浮んだのはただそれだけ……。そして、私達一年生にとって定演というものが、どんなに大切な物かを思い知らされたのはその時……。

4月、新しい制服と一緒に私達の所へまいこんできたのは、このあまりに小さい、8本の弦が張られた楽器“マンドリン”それは私達にとって初めて見る物であり、かつ初めてふれる物であった。だからピックを手渡された時、こんな小さな物で音を出すのかと思ったし、マンドリンを手渡された時、こんな小さな楽器で音を出すのかとも思った。でも、いざマンドリンをかかえると、それはかかえきれない大きな物にかわっていた。私達の手からずれて落ちてしまうピック、私達の手からずれて、かたむいてしまうマンドリン、みんなに小さい物なのに、数分もたたないうちに巨大な物になっていたなんて……。思うように動かない右手、石のように固くなってしまった左手の指、どんなにかいやな思いをしたものだ。

どうしてトレモロができるんだろう

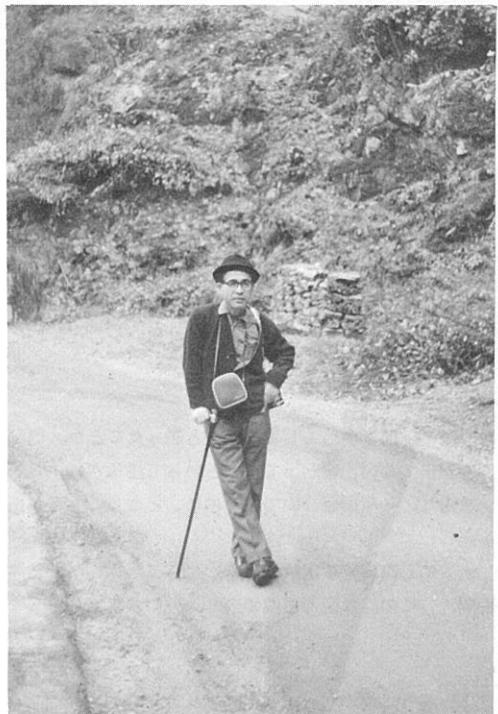
どうして指が動かないんだろう

とてもくやしかった。まだプレアンに入って数ヶ月しかたっていないのに、何度もやめてしまおうかと思ったことか。

練習で夜おそく一人で帰る時、思い出すのは今日の練習のこと。音が出てない、音が出てないといつも注意され、ちゃんと指揮を見てと何度も言われ、そのたびに涙の出る思いがした。こんなに一生懸命ひいているのに、どうしても音が出ない、どうしてもみんなと合わない。毎日毎日、こんな事のくりかえし。

今、定演という私達にとって初めての大きなステージが終った。と共に、次に来る定演への幕が切って落された。私達は、一日一日を確実にふみしめていこうと思う。このすばらしい仲間と、この妙な楽器と共に…………いつまでも…………

故熊谷幹雄



先生を偲ぶ

古い横山校舎でマンドリンを習ってから20数年、当時は血氣盛んで情熱の固りであった先生も、今は普済寺山の墓地にお母さんと静かに眠っておられます。

昭和21年4月、母校の旧制岩国中学校に赴任された先生は、終戦直後の荒んだ社会が学園内にも滲透しているのに心を痛められ、なんとか少年らしい明るく生々とした表情が取り返せないかと、寄宿舎の舍監をしておられた関係から舎内演芸会を計画され首尾よく大成功を納められました。その後を継いで舎生を中心としたハーモニカ・アンサンブルを作られ、いよいよ石神校長先生のご理解を得て、昭和24年12月24日記念すべき最初の合奏「聖夜」を演奏する中で岩高プレクラム・アンサンブルは呱々の声をあげたのです。

丁度あなた方のご両親の青春時代なのです。

教壇では、国語の教師として、あの特有の鼻にかかる江戸くずしの名調子“文法”は、マンドリンと共に忘れ去ることはできません。練習では、楽器を弾くことだけを教えるのではなく、礼儀・作法・言葉遣いを初め人間形成に力を入れられ、その上で合奏を教えて来られたように記憶しています。高校時代は、合奏ということを徹底的に教えられ、野球にあるようなワンマンチームは通用せず、しっかりしたアンサンブルを強調しておられました。したがって、選曲も無理な背伸びは厳に慎まれ、あくまで基礎を作る事に専念しておられましたので、3年でようやく曲が出来始めた頃に皆卒業して行くと言って常々残念がっていました。

先生は、個性も極めて強く、自分が法律だみたいな処もあり、痼疾もちで誰彼の見境なしに雷が鳴ったもので、生徒の作った数え唄の中に“三つ幹の怒りん坊”と唄われたものでした。けれども、その反面には、夜更けて練習が終った時や夏休みの暑い盛りの練習等には、度々菓子やアイスクリーム等をご褒美として買って下さるといった優しさもあり、こうした心の触れ合いに生徒からは慕われ、卒業生の訪問も跡を絶たない程でした。またウィットや洒落を解し、時にはフザケも通じたし自分のニックネーム“猫”を愛しておられた様子も窺うことができました。合奏の合い間に何か息抜きの曲をやろうと生徒の希望で“若人”がとり上げられ、愛唱曲として今も引きつがれているのです。

岩高プレアンは、その後年を追うごとに部員数を増し、益々隆盛して行く中で恩師は病に抗し切れず、昭和43年ついに帰らぬ人となりました。

これ程までに情熱をかけて育てあげてこられた合奏の火はさらに燃え続け、いよいよ来年は30回の定期演奏会を迎えることになりました。生徒をとりまく環境は、社会の移り変りと共に大きく変り、ラジオ・S Pレコードしかなかった時代と比べ様もありませんが、練習に打ち込んだ時の顔は、今も当時も変りません。青春の多感な時期を無為無策で終ることなくひたむきに何かを求める、清々しい満足が君を包むならきっと有意義な想い出となるでしょうし、またもしそれがマンドリン合奏であるなら、君達の想像する熊谷先生は、補足する説明を要しないでしょう。

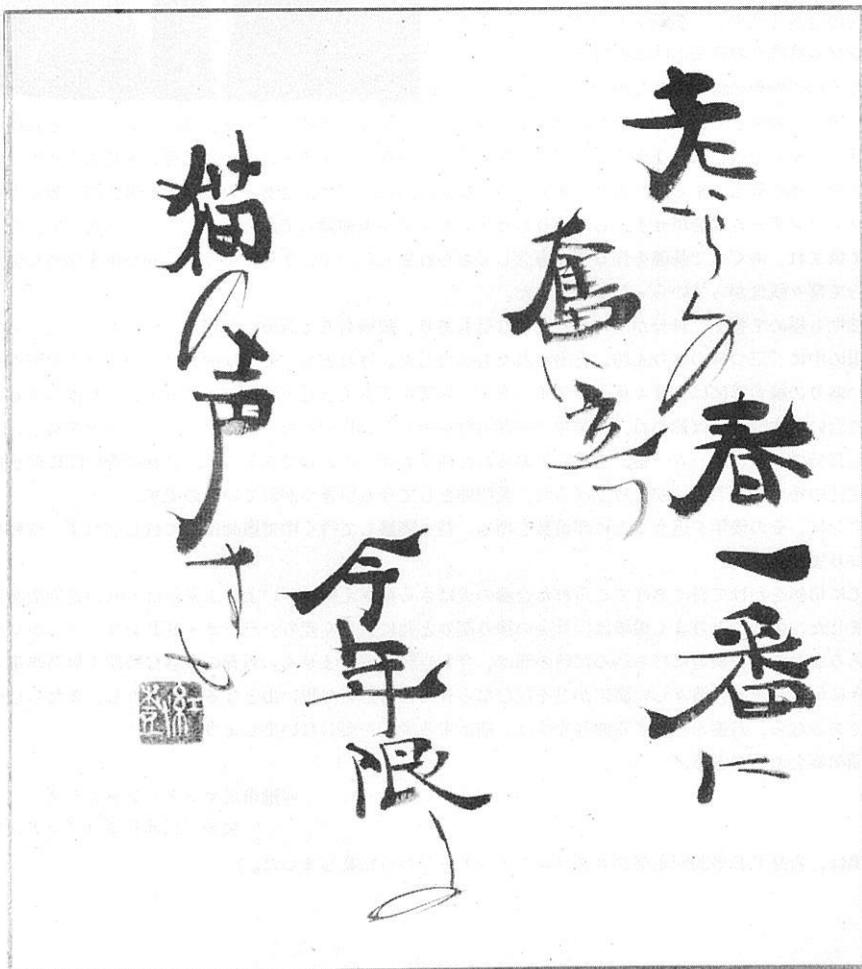
第29回定期演奏会おめでとう！

岩国市民マンドリン・クラブ
会長 三浦孔司（プレアン第5回卒）

（この原稿は、岩高P E 第29回定期演奏プログラムのメッセージから転載しました。）

略歴

大正4年1月24日	北海道に生まれる
昭和3年3月31日	岩国町立岩国尋常高等小学校高等科修了
昭和8年3月2日	山口県立岩国中学校卒業
昭和13年3月25日	早稲田大学高等師範部卒業
昭和13年4月5日	広島県呉港中学校教諭
昭和15年1月20日	岩国町立岩国商工学校教諭
昭和20年3月31日	山口県立岩国工業学校教諭
昭和21年4月6日	山口県立岩国中学校教諭
山口県立岩国高等学校教諭	
昭和43年7月16日	没



岩 高 P E 年 譜 - 1

岩国 P E 年譜 - 2

	昭44	45	46	47	48	49	50	51	52	
定 演	#22 ($\frac{10}{12}$)	#23 ($\frac{10}{11}$)	#24 ($\frac{9}{26}$)	#25 ($\frac{10}{10}$)	#26 ($\frac{9}{24}$)	#27 ($\frac{9}{23}$)	#28 ($\frac{9}{24}$)	#29 ($\frac{9}{15}$)	#30 ($\frac{9}{23}$)	
連 合 音 楽 会	#20 防府 ($\frac{6}{15}$)	#21 防府 ($\frac{6}{28}$)	#22 宇部 ($\frac{6}{20}$)	#23 山口 ($\frac{6}{18}$)	#24 防府 ($\frac{6}{17}$)	#25 光 ($\frac{6}{16}$)	#26 美祢 ($\frac{6}{15}$)	#27 徳山 ($\frac{6}{20}$)	#28 萩 ($\frac{6}{19}$)	
コンクール	NHK放送 ($\frac{9}{23}$)	NHK放送 ($\frac{9}{23}$)								
その他の 演 奏 会	岩高春季 ($\frac{6}{8}$) 文化祭 ($\frac{9}{6}$)	岩高春季 ($\frac{6}{14}$) 文化祭 ($\frac{9}{5}$)	" ($\frac{6}{27}$)	"	文化祭 ($\frac{9}{\text{ }}\text{ }/\text{ }$)	岩高春季 ($\frac{6}{2}$) " " ($\frac{9}{6}$) 熊毛南交歓 ($\frac{9}{7}$) 灘 中 ($\frac{11}{16}$)	" ($\frac{9}{\text{ }}\text{ }/\text{ }$)			
その他の 活 动								米軍基地 ($\frac{5}{\text{ }}\text{ }/\text{ }$)		
	#8 交歓会 ($\frac{7}{20}$)	#9 " " ($\frac{8}{2}$)	#10 " " ($\frac{7}{25}$)	#11 " " ($\frac{7}{23}$)	#12 " " ($\frac{7}{29}$)	#13 " " ($\frac{7}{28}$)	合宿ユース ($\frac{8}{27} \sim 28$) #14 " " ($\frac{8}{3}$)	" " ($\frac{8}{29} \sim 30$) #15 " " ($\frac{7}{25}$)	" " ($\frac{8}{29} \sim 31$) #16 " " ($\frac{3}{27}$)	
主な記事			ドラ、チエ ロ寄贈 (岩国PS)						定演30回 記念事業	

3 4	3 5	3 6	3 7	3 8	3 9	4 0	4 1	4 2	4 3
#12 ($\frac{10}{18}$)	#13 ($\frac{10}{9}$)	#14 ($\frac{10}{8}$)	#15 ($\frac{10}{14}$)	#16 ($\frac{10}{13}$)	#17 ($\frac{10}{4}$)	#18 ($\frac{10}{10}$)	#19 ($\frac{10}{9}$)	#20 ($\frac{10}{15}$)	#21 ($\frac{10}{13}$)
#10 徳山 ($\frac{6}{12}$)	#11 防府 ($\frac{6}{12}$)	#12 山口 ($\frac{6}{25}$)	#13 小野田 ($\frac{6}{17}$)	#14 宇部 ($\frac{6}{23}$)	#15 徳山 ($\frac{6}{28}$)	#16 萩 ($\frac{6}{/}$)	#17 ($\frac{6}{/}$)	#18 ($\frac{6}{/}$)	#19 ($\frac{6}{/}$)
				NHK放 ($\frac{9}{24}$)	"	"	" ($\frac{9}{11}$)	" ($\frac{9}{10}$)	
" ($\frac{5}{17}$)	" ($\frac{6}{19}$)	" ($\frac{5}{21}$)	" ($\frac{6}{10}$)		岩高春季 ($\frac{6}{7}$)	" ($\frac{6}{13}$)	" ($\frac{6}{12}$)		
					同志社合同 ($\frac{8}{12}$)				
		安下庄中 ($\frac{9}{3}$)	周音連 合同練習 ($\frac{12}{/}$)	周音連 音楽会 ($\frac{4}{21}$)	周音連 交歎会 ($\frac{6}{28}$)	ライオンズ・ クラブ ($\frac{5}{2}$)	広大交歎 ($\frac{4}{2}$)	山口短大 交歎	鳥取大 交歎
			#1 交歎会 ($\frac{6}{29}$)	#2 "	#3 "	RCC.TV ($\frac{7}{11}$)	NHK 山口TV ($\frac{10}{10}$)		
					#4 "	#5 "	#6 "	#7 " ($\frac{7}{28}$)	
校歌制定 ($\frac{1}{8}$)				#15 定演 記念誌発刊				熊谷先生文 化功勞賞受 賞 ($\frac{11}{3}$)	校舎向山新 築($\frac{4}{1}$)
								熊谷先生没 ($\frac{7}{16}$)	
								熊谷先生を 偲ぶ会 ($\frac{7}{22}$)	

住 所 錄

（住所変更並びにお問合せは下記のところまで
〒741 岩国市横山 [REDACTED]
TEL (0827) [REDACTED] 2539
三浦孔司）

岩国市民マンドリン・クラブ会則

1. 名 称	当会は、岩国市民マンドリン・クラブと称する。
2. 目 的	プレクトラム音楽の発展と普及を目的とし、地方文化の高揚に寄与する。 (岩高プレクトラム・アンサンブルを後援する)
3. 会 員	広くプレクトラム音楽の愛好者を募り、当会の目的に賛同する者とする。
4. 会 費	会員は、年会費として金2000円を納入する義務がある。
5. 本部・支部	本部は岩国市に置き、事務局は適宜設置する。 支部は必要により設置することができる。
6. 役 員	当会は、会員の互選により次の役員を置く。 会長 1名 幹事 若干名（うち互選により幹事長1名をおく） その他必要に応じ会長の任命により役員を置くことができる。
7. 事 業	当会は、次の事業を行なう。 総会、演奏会、友誼団体との交流、その他。
8. 改 廃	この会則は、必要に応じて総会において改廃することができる。
9. そ の 他	この会則以外のところは、従来の習慣に従うこととする。
10. 発 効	この会則は、昭和50年1月1日から発効実施する。 制定年月日 昭和35年4月1日 改廃年月日 昭和45年4月1日 改廃年月日 昭和48年4月1日 改廃年月日 昭和51年1月1日

岩国市民マンドリン・クラブ 歴代役員

昭33年 会長 富沢元生, 幹事 熊沢偉全, 村橋浩, 長島啓, 平岡昌憲, 中田秀子, 中原秀子, 鴨打直子, 蔵重敦子
昭34年 会長 富沢元生, 幹事 熊沢偉全, 山添修志, 村中弘幸, 中田秀子, 中原秀子, 鴨打直子, 蔵重敦子
昭35年 会長 富沢元生, 幹事 熊沢偉全, 三浦孔司, 田村忠, 山添修志, 中田秀子, 中原秀子, 鴨打直子, 蔵重敦子
昭36年 会長 富沢元生, 幹事 熊沢偉全, 三浦孔司, 山添修志, 中田秀子, 中原秀子, 鴨打直子, 蔵重敦子
昭37年 会長 富沢元生, 幹事 熊沢偉全, 山添修志, 富永勝之, 中田秀子, 中原秀子, 蔵重敦子, 兼敦子
昭38年 会長 富沢元生, 幹事 熊沢偉全, 山添修志, 富永勝之, 青木優子, 兼敦子, 土井哲子, 弘兼嘉代子
昭39年 会長 富沢元生, 幹事 熊沢偉全, 山添修志, 富永勝之, 大屋幸子, 弘兼嘉代子, 広田松美
昭40年 会長 富沢元生, 幹事 熊沢偉全, 山添修志, 富永勝之, 藤井利和, 鹿恭悦, 広田松美, 大江恵子
昭41年 会長 富沢元生, 幹事 富永勝之, 藤井利和, 鹿恭悦, 和久本忠史, 中川勉, 大江恵子, 松本糸代
昭42年 会長 富沢元生, 幹事 三浦孔司, 富永勝之, 鹿恭悦, 和久本忠史, 田中正充, 大江恵子, 十時和子, 小西麗子
昭43年 会長 富沢元生, 幹事 山添修志, 高島信人, 和久本忠史, 山根義広, 十時和子, 中原悦子
昭44年 会長 富沢元生, 幹事 山添修志, 高島信人, 和久本忠史, 田中正充, 山根義広, 中原悦子, 山本むつ子
昭45年 会長 富沢元生, 幹事 山添修志, 沖永匡, 富永勝之, 高島信人, 和久本忠史, 田中正充, 中原悦子, 浦井英子
昭46年 会長 三浦孔司, 幹事 沖永匡, 山添修志, 高島信人, 和久本忠史, 田中正充, 石川善久, 兼本静江, 八百谷和枝
昭47年 会長 三浦孔司, 幹事 沖永匡, 高島信人, 和久本忠史, 田中正充, 安田英雄, 益田真理子, 竹崎トモ子
昭48年 会長 三浦孔司, 幹事 沖永匡, 高島信人, 田中正充, 山根義広, 益田真理子, 竹崎トモ子
昭49年 会長 三浦孔司, 副会長 山添修志, 幹事 柴田利和, 沖永匡, 高島信人, 田中正充, 岩井由美, 益田真理子, 竹崎トモ子

東京支部長 松塚展門，関西支部長 和久本忠史，広島支部長 山根義広

昭50年 会長 三浦孔司，幹事 高島信人，中塚博，田村隆司，石川善久，中里文昭，山本芳生，岩井由美，山本むつ子

昭51年 会長 三浦孔司，幹事 柴田利和，高島信人，藤本匡孝，山根義広，石川善久，中須賀弘明，山中敬子

昭52年 会長 三浦孔司，副会長 山添修志，幹事 柴田利和，山本芳生，石川善久，中須賀弘明，中里文昭，山中敬子

東京支部長 新井義悠，関西支部長 山根道広，広島支部長 山根義広

。印は幹事長

岩国市民マンドリン・クラブ現役活動メンバー

マンドリン

足立真智子，新井義悠，新井恭子，江口道子，江口裕子，岡崎幸枝，国清教子，小宮道子，谷田真里子，田村隆司，
田村礼子，為重昌子，近間正樹，中塚博，長見しのぶ，西野隆士，西村美由紀，繁沢秀治，弘津賀子，藤沢育子
藤沢幸昌，俵藤博文，前田慶恒，牧田むつ子，峯由美子，森山栄，柳村典子，山添修志，山根義広

マンドラ

金丸真明，釤屋時夫，柴田利和，田中正充，近間三笑子，松金進，松重正清，松村紀，山中敬子，四元誠，和久本忠史

マンドチェロ

石川善久，中国智美，中里文昭，長藤雅則，山根道広，山本芳生

ギター

石崎悦子，遠藤清子，小田忠夫，尾園勝善，河村啓二，末岡成基，鈴木久美子，中島輝子，中須賀弘明，
中須賀義治，中塚洋二，中村悦子，広中暢子，広中亮一，船木一顕，松塚展門，丸山妙子，森上吉夫，吉松庸子

ベース

奥西仁，作元博文，中村由哉，波羅三哉，藤岡寿，藤島寛治，安田英雄，松本一久

ティンパニ

吉本屋政幸

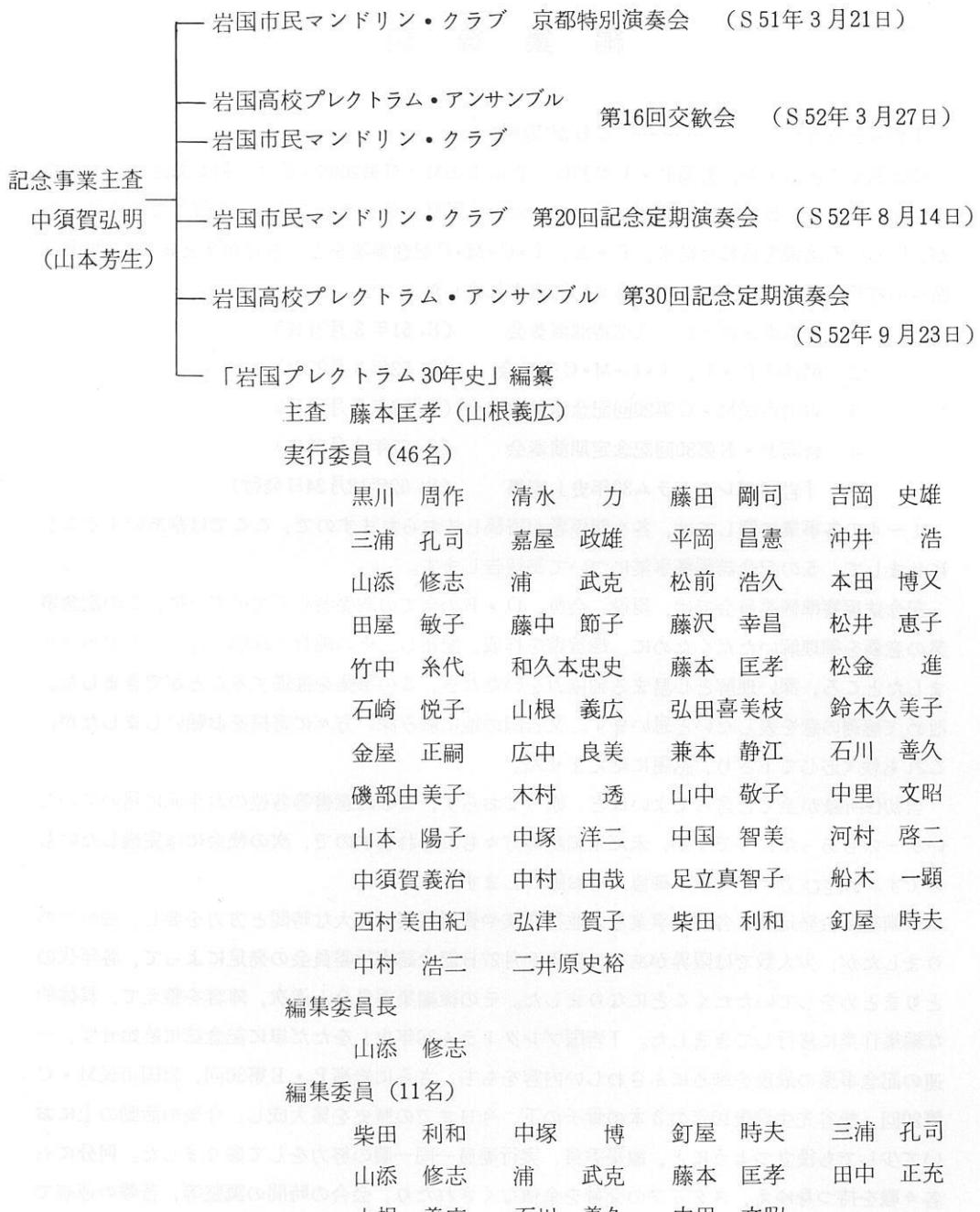
パークッション

中村あけみ

アコーディオン

三浦孔司

記念事業組織



() 途中退任

編 集 後 記

「やっとできた」……………これが実感です。

時は溯ること2年前、岩高P・E第30回、岩国市民M・C第20回定演に、何か記念行事をとの話題が出て以来、長い長い陣痛でした。当初岩国市民M・Cサイドで話しあは進展しておりましたが、いろいろ論議を重ねた結果、P・E、I・C・M・C記念事業をと、意見がまとまり、関係方面への打診を行ない、次の5つの事業が決定されました。

- 1 岩国市民M・C 京都特別演奏会 (S. 51年3月21日)
- 2 第16回P・E、I・C・M・C交歓会 (S. 52年3月27日)
- 3 岩国市民M・C第20回記念定期演奏会 (S. 52年8月14日)
- 4 岩高P・E第30回記念定期演奏会 (S. 52年9月23日)
- 5 「岩国プレクトラム30年史」編纂 (S. 52年12月24日発行)

1～4の各事業に関しては、各々関係者が寄稿しておられますので、ここでは割あいすることにして、5.の記念誌編纂事業について御報告します。

記念誌編纂準備委員会では、現役、会員、O・Bの全ての関係者約千名の方々に、この記念事業の意義を御理解いただくために、趣旨書を作成、配布し、その趣旨の理解と協力をお願いしましたところ、深い理解と心温まる御協力をいただき、この事業を推進することができました。改めて感謝の意を表したいと思います。又岩国の中には馴み深い方々に寄稿をお願いしましたが、これも快く応じて下さり、感謝に絶えません。

当初住所録が全くと言ってよいほど、揃っておらず、この趣意書等各位のお手元に届いていないケースもあったようですが、未だ未確認の方々もおられますので、次の機会には完備したいものです。お詫び方々、今後の御協力をお願いします。

準備委員会発足後、各記念事業との並行作業や資料収集に膨大な時間と労力を要し、曲折がありました。少人数では限界があり、今年8月27日記念誌実行委員会の発足によって、各年代のとりまとめをしていただくことになりました。その後編集委員会と遂次、陣容を整えて、具体的な編集作業に移行してきました。「岩国プレクトラム30年史」をただ単に記念誌に終始せず、一連の記念事業の最後を飾るにふさわしい内容をもち、さらに岩高P・E第30回、岩国市民M・C第20回、熊谷先生没後10年の3本の骨子の下、今までの歴史を集大成し、今後の活動の上において少しでも役立つようにと、編集委員、実行委員一同一層の努力をして参りました。何分にも各々職を持つ身ゆえ、スタッフの交替を余儀なくされたり、会合の時間の調整等、苦難の連続でしたが、各位からお預りしております貴重な原稿、篤志に支えられて、今日こうして発刊の日を迎えることができました。衷心より感謝申し上げます。

次に「岩国プレクトラム30年史」編纂の経過と主な打合せ内容を簡単に報告します。

S・50・8	I・C・M・C 第20回記念事業企画立案, アンケート	9/23	# 5 編集委員会	住所録割付作業
S・51・4	同上再企画立案	10/2	# 6 編集委員会	スケジュール調整, 座談会検討
9	記念誌準備委員会発足, 概要報告	10/16	# 7 編集委員会	写真・原稿・年譜の整理
S・52・3	寄稿依頼, 住所録整備開始	10/24	# 8 編集委員会	熊谷先生の頁の検討, 原稿割付
4	代表者制検討	10/28	# 9 編集委員会	原稿割付, 題字の決定
5	メッセージ依頼, 記念誌概要報告	11/3	# 10 編集委員会	原稿割付, 目次検討
7	各作業開始	11/13	# 11 編集委員会	題字選書, 第1回出稿
8/27	記念誌実行委員会発足 (46名) 「岩国ブレクトラム30年史」名称決定	11/27	# 12 編集委員会	一校 (P・E諸君の協力)
9/4	# 1 編集委員会 編集委員11名決定 作業の分担・窓口化を図る	11/30	# 13 編集委員会	一校
9/11	# 2 編集委員会 見積報告, 業者決定 活字号数の決定	12/1	# 14 編集委員会	一校
9/15	# 3 編集委員会 原稿転記開始	12/3	# 15 編集委員会	装庁, 詳細部分の検討
9/20	# 4 編集委員会 住所録掲載検討	12/5	# 16 編集委員会	二校, 出版記念パーティの企画
		12/8	# 17 編集委員会	二校, 出版記念パーティの打合
		12/9	# 18 編集委員会	二校, 写真割付, 実行委員会開催打合
		12/12	# 19 編集委員会	三校

発刊を間近かに控え、編集後記も〆切りとなり、残す編集委員会も数回となりそうです。設計図通りに仕上がるかどうか、一抹の不安を残しながらペンを描かざるを得なくなりました。その設計図も、今となって見ますと、後悔することが多く、「もっとあそこを、こういう風に……」と反省ばかりです。次回編纂されますでしょう「50年史」「100年史」の際には、もっと熟実した記念誌にしていただきたいと祈念しつつ……………

記念誌主査 藤本匡孝

おめでたす記念誌
藤本匡孝
吉田裕山
記念委員会
（080-3333-1111）

後記一題で、開拓の歴史を記す。開拓は、元々は日本文化の発展、経済の発展に大きな貢献をしたが、一方で、資源枯渇や環境破壊などの問題も生じて、今後は持続可能な開拓へと変化する必至の課題である。また、開拓は、地域社会の形成や文化の発展にも重要な役割を果たしてきました。

参考文献　本文集

岩国プレクトラム30年史

記念誌主査　藤本匡孝

編集委員長　山添修志

昭和52年12月17日印刷 (限定500部)
昭和52年12月24日発行

編集兼発行者　編纂実行委員会

印 刷 所　山陽印刷株式会社
岩国市裴東町4丁目4の1
TEL (0827) 22-3330

老圃堂文集